

川柳塔

平成十一年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷八七九号



白川協加盟

No. 879

八月号

第6回 川柳塔まつり

<同人総会>

と き 9月24日(日) 午前10時-11時
ところ ホテル・アウリーナ大阪 4F 金剛東
(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・☎06・6772・1441)
議 事 平成11年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成12年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

<各賞表彰・記念句会>

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウリーナ大阪 4F 金剛中・西
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞
各地柳壇賞授与
兼 題 「花 形」 (鳥 取) 鈴 木 公 弘 選
「鮮 や か」 (和歌山) 福 本 英 子 選
「憧 れ」 (鳥 取) 小 林 由多香 選
「忘 れ る」 (青 森) 波多野 五楽庵 選
「自 信」 (奈 良) 宮 口 笛 生 選
「むらさき」(事前投句・8月20日締切) 黒 川 紫 香 選
◎各題2句・出句締切正午・4時半終了予定
会 費 2000円 (記念品呈)一当日いただきます

<懇親宴>

と き 同 日 午後5時-8時
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 葛城
懇親宴会費 7000円 (会席料理)
宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8000円 (朝食付)
◎①事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌最終ページの
申込み用紙に明記の上、8月20日までに本社事務所あてお
願い申し上げます。
②懇親宴・宿泊の御送金(句会費をのぞく)は同封の払込用
紙でお願いいたします。
③記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人で
も多くの方々の御参加をお待ち申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社

五年先 十年先

橘高 薫風

六月の私の行動を簡単に「大空のころ」へ書いたが、退院後の体力には相当にきつかった。それでも楽しい思いが多くて、佳句に出合え仲間を増やすことで自然に力が湧いてくるのだから、家族が心配するほど弱音は吐いてないつもりだ。六月十一日の東京は雨であった。にもかかわらず七百六十名の参加者は今世紀最後の締めくくりとして東京にふさわしい全日本川柳大会だった。東京の世話方の皆さんに心からお礼を言わねばならぬ。本社の黒川紫香さんが長寿川柳人表彰を受けられたのは、その日のハイライトで、十七名のうち三名が舞台の表彰式に臨まれた。月原宵明さん、二宗吟平さん、工藤吟笑さんとも不参であったが、川柳塔の名譽として歴史に残る慶事であった。四名方の益々のご健勝をお祈り申します。

いずも川柳会の七十五周年記念と横浜あおば川柳会の五周年記念句会とは、年数の差はありながら、いずれも深い意義ある催しと胸の熱くなるのを覚えた。

いずもは尼緑之助先生が麻生路郎先生の『川柳雑誌』創刊に即応して、いち早く川維蔵川支部を起し傘下に馳せ参じられた。あおばの方は、関東に支部を創設し、句会を持ちたいと常に思い続けられた先生の遺志が実現し、軌道に乗ったのである。かつて副主幹の福田山雨楼氏が転動在住しながらも果せなかったことを菱田満秋氏が独力で種を蒔き育てた努力は並大抵ではなかったと思う。大阪から出雲へは二十名ほど、横浜へは十名ほど参加した。両大会とも快適なホテルを利用しての前夜祭と大会だったので、参加者は爽やかで和やかな川柳塔の気風に接し、力強く感じたことと思う。四月の鳥取の梨花の会の砂丘吟行に青森から多数の参加者を得て、作句や観光で融和の実際の挙がったことと共にありがたく、これからもこの趨勢を各地の会に受け継いで頂きたいと願う次第です。

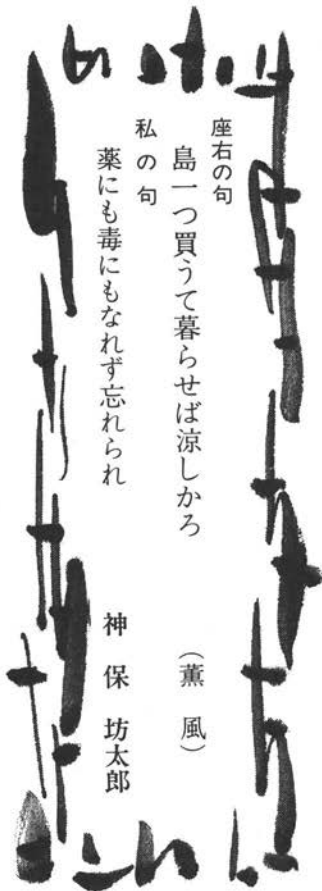
私はまことに運の良い星に生まれてい

て、主幹になる前に田中正坊さんが川柳に興味を持たれたことから、編集の苦労までしないで済んだ。川柳界そのものも上り潮に乗って愛好者の増えた時だったので川柳塔誌も勢いづくことになったが、今や不況という社会情勢や、老人の出費の厳しさが原因で、これからの経営は難しくなるのではないかと。路郎先生のお言葉「私は五年先十年先を常に見ている」を思い出すのである。

今この巻頭言を書いている六日の夜、巨人の清原和博選手が復活の三点本塁打をかつ飛ばした。私は以前に、清原は野茂がアメリカの大リーグへ去ったから、駄目になると言ったが、その通り若い日の精彩はなくなつた。しかし侮蔑的な立場になって努力をしたらしく一層精悍な姿でカムバックしてくれたことをうれしく思い一筆書くことにした。

路郎先生のように才能のある人でも、上に立つゆえ常に勉強を続けておられた。川柳塔の充実、路郎精神の一つは作品の向上である。句風の向上は選者指導者の力に負うところ大である。

勉強は川柳だけのことではない。



座右の句

島一つ買うて暮らせば涼しかろ

(薰風)

私の句

薬にも毒にもなれず忘れられ

神保坊太郎

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 五年先 十年先

七月二十八日と私

川柳塔(同人吟)

この句 この人

自選集

大空のころこ (115)

川柳の群像 伊藤定子

俳風柳多留二四篇研究 20

水煙抄

秀句鑑賞 同人吟
水煙抄

愛染帖

茴香の花

橘高薰風…(1)

田中正坊…(2)

橘高薰風選…(4)

橘高薰風…(47)

橘高薰風…(48)

東野大八…(53)

河内天笑選…(56)

河内月子…(58)

江口度…(89)

波多野五楽庵選…(90)

宮西弥生選…(94)

七月二十八日と私

田中正坊

誰にも生涯にわたって忘れることができない日があると思う。私の経歴については、この欄でもふれたことがあるが、その日はレックドバージが行われた七月二十八日、そして今年はずいぶん五十年目にあたる。この事実は今や知る人も少なくなったが、それは私にとって記念すべき日と言っただけでなく、日本の戦後史にも特筆される日であると思う。

その事件は、昨年一月二十六日、『毎日新聞』の企画記事「21世紀への伝言」として大きく掲載されたので、その一節を引用する。

「50年7月28日午後3時、大阪市北区堂島にあった毎日新聞大阪本社2階の社会部で、内勤記者だった田中さんは部長に呼ばれた。

「何事か」といふかりながらも、指示通り編集主幹室に入ると、主幹が立ち上がり、「本日、ここに重大なことを伝える」と前置きし文書を読み上げた。「マッカーサー書簡の趣旨に基づき、本日、君を解雇する。ただちに退去されたい」。問答無用だった。

毎日新聞でバージされたのは、大阪本社18人、東京本社31人、計49人。朝日新聞104人、NHK119人など。これを皮切りに全国の間企業と官公庁に波及、約一万二千人

「聞く」……………谷口 義選 ……(96)
一路集「訪ねる」……………白根ふみ選 ……(96)

「泥」……………井上勝視選 ……(97)

初歩教室「軽い」……………吐田公一 ……(98)

受賞体験記 おお富士は日本一の山……………黒川紫香 ……(93)

■私の川柳 わたしの川柳行脚……………高瀬霜石 ……(100)

いずも川柳会七十五周年記念川柳大会……………尼 れいじ ……(102)

あおば川柳会五周年記念句会……………菊地政勝・小野句多留・菱田満秋 ……(104)

七月本社句会……………各地柳壇(佳句地十選/寺川弘一) ……(108)

落児さんを語る……………森下愛論 ……(112)

柳界展望……………みつ子・希久子 ……(126)

八月各地句会案内……………(127)

■編集後記……………(128)

……………(130)

座右の句

ビリ走る根氣に拍手惜しまない

私の句

コーヒーがほのぼの句う初対面

的場 十四郎

(紫 香)

が解雇された。これはレッドパージ直前の六月二十五日に起きた朝鮮戦争遂行のための反共政策と言論弾圧の強行措置であったことは歴史的に明らかである。

これによって私は、のつていた軌道からはずされ、天職と心に決めていたジャーナリストの道を断たれてしまった。かろうじて、それにかかわる仕事に就くことはできたが、それから三十年、妻子をかかえて生活のための悪戦苦闘がつづいた。かつて一枚の赤紙が多くの人の運命をくるわせたように、一片の辞令が人間の一生をゆがめたのである。レッドパージという「負」の烙印はいつまでも付いて回り、思想・信条や人間としての生き方まで変えてしまった人も少なくはない。

そしてこの事件は、無残にも人と人との絆さえも断ち切った。その日まで同僚として友人として付き合っていた人たちが道を避け、会っても顔をそむけるようになった。今まで世間の荒波を知らなかった私は、人間がここまで非情になれるとは思わなかった。それどころか、私と同じく解雇された仲間もしばらくは行動をともにしたが、いつしか一人去り二人去り、ほとんど音信不通となった。図らずも垣間見た「人間模様」だが、私が人間不信におちいらなかったのは、ごく少数だが五十年前のことを語り合える仲間がいたこと、私が苦しかった時、手を差し伸べ、励ましてくれた友人がいたからである。やはり人間を救えるものは人間であると思つた。



橘 高 薫 風 選

米子市 林 瑞 枝

行き交うものあり櫓の樹を守る

鷗追う海のわたしはボヘミアン

木の実挽ぐキリンの首は美女の首

ウォーキング亡夫はいつでも胸の中

海からの天女が生んだ崖の百合

生きてゆく五体を梓に入れ泳ぐ

弘前市 高 瀬 霜 石

安いお茶安いお酒が口に合う

旅の途中あくびをしてる暇がない

団栗を塾が四角い顔にする

医者へ行く時は終わりと母が言う

生き下手と生き下手が遇う縄のれん

振り上げた拳を弱者下ろせない

大阪市 小 糸 昭 子

窮屈なルールブックが横に居る

内緒話するほど今は酔ってない

神様にコネでもあるか虹の橋

鬼ごっこ追われる鬼になった夢

本人は真面目に挑むギネスブック

意見する柄でもないが机拭く

もの忘ればかりしている小抽斗

笑ってはいない笑顔の端役たち

灰汁取って取って旨味はまだ出ない

お互いに喋り疲れたから別れ

泣いた赤鬼に逢いたくなってくる

色即是空ゆるゆると縄を縛う

家庭から柱時計と威厳消え

おい時間少し止まってくれないか

訳もなくサイレンが鳴る焼野原

パーティーの中の一人が敵らしい

俺はサメ脳細胞が進る

俺はサメ脳細胞が進る

和歌山市 西 山 幸

鳥取県 谷 口 次 男

長話豆腐が固くなっている

和歌山市

桜井千秀

風も火も抱けば逃れる道がある

自画像は少し太めの眉でよい

疑似記憶確かめに行く菖蒲園

丁重にお伺いする付かぬ事

あーらあら受け流すのも生きる術

茄子の花だって掟を無視したい

神戸市

小林一夫

葬列に白き日傘の咲きいたり

昼の酒 男たちみな老いいたり

影ながく曳き少年の野球かな

新緑に出会いし頃を思い出し

人はみな寡黙に食すラーメン屋

梅雨明けやメロンを好む猫と住み

鳥取県

原みさを

刈り込んで刈り込んできて老い佳境

十七歳霧の流れが深くなる

どんでん返しは並木通りをすぎてから

梅雨寒や赤いまんまの信号機

薬包紙の中にサダコの像がある

内申書に十把ひとからげの少年

鳥取県

岩崎みさ江

宇宙から見た神さまの在す星

銀河鉄道終着駅で乗り換えて

ふるさとを恋うては風の吹き戻し
無縁墓となるかも知れぬポチの墓

一粒の真珠に海の調べあり

故郷包む大風呂敷を持ち歩く

西宮市

亀岡哲子

野の花を咲かせておこし売れぬ土地

地価下がり小学生の増えた町

ああ姉妹老いて個性の極まれり

青い花咲かせて青い雨降らず

黒猫に縄張りのあり芥子の咲く

絶ち切った縁ベントツが通り過ぎ

守口市

結城君子

四ヶ月も五月も風と共に去り

嬉しさが余って饒舌が続く

初恋を孫はうそつと聞いてくれ

あじさいの気持ちも分かる七変化

蝶よりもとんぼを好むおばあさん

影法師 君も汗を流そうよ

藤井寺市

太田扶美代

うれしい日の星はわたしの眼で光る

また花でごまかしている淋しがり

自尊心たつぷり蜜をかけてある

生きがいはみんなわたしの側におく

介護した病母の笑顔はひとり占め

大好きなだけを恋だと言わらしい

熊本市

永田俊子

青葉の寡黙サタンがゆする十七歳
貧しくてやはりピエロに味方する

新茶祭 夏大島の衿あしよ
青春老春大がじゅまるよありがとう（最後の小学校同窓会）
原爆忌亡夫の好きな百合開く

寝屋川市 江口

軽い嘘ついて仁丹吞んでいる

わたしを圧す青葉の樹勢そして刻
城に待す切先尖る菖蒲の葉

吹田市

石原靖巳

反骨の気負いも萎えた唐辛子

ご返事は沸点過ぎてからにする

親子だな同じところで蹴つまずく

古希過ぎてロングヒットは狙わない

華やかな人ほど過去を語らない

遍路笠浄土は遠いとこならず

竹原市

時広一路

おのおのの持つ辞書が有り食い違う
税金のかからぬ豊かさを探す

句読点打たねば時間だけ過ぎる

雲に乗る切符が欲しい空の青

タクシーのメーター僕に気兼ねせぬ

蜘蛛の糸いつかいい事有るだろう

伊丹市

山崎君子

デートなの鏡に向かって言いながら

藤ゆらし鏡をぬける初夏の風

寄せ植えの花も縁か裏通り

雨の中笑いふりまく花菖蒲

あじさいにとつても似合う黒揚羽

百合の花ゆする噂を聞きたくて

ゴキブリ走ると五戒もあらばこそ

怠けるのもしんどいことだと思ふ

ダンブカーおんな男になぐり込み

大阪市 西出楓楽

努力家が運いい人にされている

知ってるかキレると切れるとの違い

立話だけで帰った万歩計

ハヒフへホ笑い上手は生き上手

助手席に座り言葉を選っている

年齢制限アメリカ村で言われそう

枚方市 海老池

洋

人騙す手紙に見えぬ素直な字

ジュースなんぞにされたメロンの自尊心

目には青葉 頭を晒す新刊書

粘る客いて欲しい時困る時

星の命ホタルのいのちみな輪廻

天然の味から遠くなるばかり

箕面市 岩 津 ようじ

ゲームソフト一体何が面白い
アメリカにべこべここと神の国
来世紀の桜見るまで生きてたい
あれでなんで負けるんやろうジャイアンツ
はったりをいわない医者は頼りない
鰻頭と酒で団欒老夫婦

鳥取県 さえき や え

かけがえのなき人うばう花の雨(荒介さん弔吟 2句)

愛の詩 愛の讃歌をもつきけぬ

東大よりも農大へいけ孫たちよ

祈りの朝しずくの中の花しようぶ

行者谷いとしき人の足跡よ

日南へ長い祈りの道をゆく

茨木市 藤 井 正 雄

アニメ観る子につき合って飲むジュース

セクハラの注意も添えている幹事

風ピタリ止んで社長のご登場

アーケード妻に会釈の多い街

延長戦夜業の邪魔をするナイトー

予定変更酒には甘くなる妥協

吹田市 山 本 希久子

守秘義務を貫き通す雨になる

雨の日は雨を見ている窓の位置

さわやかな朝ホットケーキにレモンティー

生者には雨は冷たしあじさい忌

幾人を送りし年よ夏の雲

公人でなし失言をくり返す

大阪市 大塚 節 子

ひとりですつぎつぎ病氣こしらえて

お悔みへひとりが気楽とは言えず

門限がなくなつてから早よかえろ

発想の転換所詮口だけで

夜のお出かけ家中電気つけてゆく

ケーキハウス体重計がちと恐い

羽曳野市 徳 山 みつこ

豊かなる大地石油もじゃがいもも

コスチュームつければ孫も名ダンサー

双眼鏡孫の呼吸も見逃さず

花束へ夢も仕掛けてベリグッド

アメリカのくらし私は介護度5

異国に根づく子を嬉しとも寂しとも

松江市 川 本 畔

普段着のままの私にまず乾杯

なだらかな山安息の家がある

幸せな顔して戻るつばめの巢

ほとばしるもの一つ欲し月曜日

手に握る切符わたしの行くところ

夕日沈むならば愛されてからに

砂川市 大橋 政良

振り向くと北風にほほ叩かれる
さりげなく洩らす私語から火の匂い

天気晴朗ラベンタを嗅ぐ白い杖

タンポポの首輪あげよう乳姉弟

風の絵に羅漢になった父がいる

黒石市 千葉 風樹

仏壇を毎日拝む：この俺が

一族の血を登り来る蠅の脚

一日中トイレの中に居たい雨

点滴を往ったり来たりしてる月

この猫も老いて乗ってる化粧台

黒石市 相馬 一花

マツタケを買う振りをする虚栄心

ほろ酔いでライندگانスの癖が出る

痩せ薬あれば飲みたい薬剤師

安酒もママの酌なら上撰酒

総会にはサボリ宴会だけに出る

弘前市 櫻庭 順風

バレンタイン匂いすみの濃紫

白兎海岸見てこの旅はこれでよし

叱られる白紙叱っている白紙

わくわくとひこばえを見る白骨樹

赤い月エロスのタンゴ舞っている

弘前市 福士 慕情

洗面器気合を入れた今朝の顔
叩かれて木魚の口が閉まらない

遮断機の向こうで犬が吠えている

しっかりと風を掴んだ津軽風

今日の荷を下ろして妻の酌が良い

弘前市 岡本 花匠

春蟬の声に早起き鳶の宿

誰怱ぶ慕情隠せぬ一輪草

下界は夏日覚めて笑う水芭蕉

奥入瀬の阿修羅に邪気を払われる

そこはかとなく生き蒟蒻に満ち足りる

弘前市 宮崎 ヒサ子

葉桜になって落ち着くわが公園

リング煮る何と静かな初夏の家

日がな一日無駄な時間を愉しんで

今年は何を黄花菖蒲に貰う幸

ポケッパルの帽子と初夏を駆けてみる

弘前市 蒔苗 果林

摩訶不思議生かされて来た八十年

たった一つの青春だった恋のお札

子が四人孫十人が人となり

風前の灯火 命燃えに燃え

喪の柩に入れる自画像これでよし

弘前市 中山雅城
フラメンコ踊つてみたい金魚草

ピアスして男の威厳取戻す
イエローのカード持つてる紳士録
パソコンと相性合わぬおじいちゃん
ビオトープ屋上の木に蟬が鳴く

弘前市 今 愁女

フルムーン貴方まかせのスケジュール
春うらら明日香古墳をひと巡り
利休ねずみの雨に打たれて城ヶ島
クレソンの花にも蝶がたわむれる
目の前のにんじんを追うこともなく

弘前市 相馬銀波

読み書きの日課六十路を掘り起こす
出来不出来言葉にしない舞台裏
最初から背伸びが目立つ時の人
立ち上げる汗を汗とは思えない
梅雨寒の夜水軍手が乾かない

青森県 西谷大吾

人間を透かして見ればがらんどつ
人間がサル語を真似る文化論
父の日も昨日と同じ酒二合
真っ直ぐに歩いた靴がしよぼくれる
年金を追いかけてくる介護法

東京都 後藤早智
赤リング素朴な北の味は消え

船旅を終えオレンジの固い皮
思い出の味に届かぬ旬のビワ
止められたつるが芽を吹くブドウ棚
市民権得て堂堂の青リング

東京都 播本充子

飛びたいの思い蟻にも羽が生え
一段と暗さが増した夜明け前
肩書きにまんまと生き血吸取られ
うれしくて自分で流している噂
兄ちゃんと風が押してるベビーカー

町田市 竹内紫鏑

父の日に健脚向きの杖届く
紫陽花に停めて撮らせる地方線
（箱根登山鉄道）
神経と骨が対話しあるじ起き
施設見に四列に並ぶ夏帽子
君が代の四部合唱に聞きほれる

佐倉市 吉田笑女

横やりが入って消える旅プラン
いい話なら聞く耳は持っている
移り香もなつかし父母の形見分け
少し手をぬいた積木がまたくずれ
しっかりとベルトをしめて歩き出す

横浜市 菱田満秋

肝臓を切つて幸運だと言われ
棚ボタもあり辛抱は報われる
リハビリの姿に欲も得もない
カメラ向けられて菖蒲がポーズする
ご命日だから線香高いほう

横浜市 清水潮華

花自慢してます庭にバラが咲く
親切が過ぎる車掌の保母口調
年齢の愚痴は言わない誕生日
テリトリ―越えぬ程度にジャンプする
帰る家あるから旅に憧れる

横浜市 山下省子

あの頃のクレージーラブ目を覚ます
嫌いでもともあれ金のありがたさ
我が家では鳩派タカ派で仲が良い
今日の罪御破算にする仕舞風呂
木下闇どちらが先か罪と罰

横浜市 菊地政勝

この土地に根付き咲く花いとおしい
東京の空を追いつ出す高いビル
日の丸を揚げれば家をのぞかれる
細枝の脚厚底に鍛えられ
お互いの良さを認める二輪草

川崎市 和泉あかり

塀の蓋と力くらべをしてしまふ
切り抜いて集めて何となく捨てる
冷蔵庫あふれたツケはきつとくる
陽の真下影も真下についてくる
生きている限りここに敗戦日

静岡市 安本晃授

福耳をかすめて通るいい話
貧乏に育ち情熱湧くおとこ
妻の画布素直に虹を描いて秋
縋せぬ絵の一枚老いの防波堤
平凡を倅せと知る年となり

富士宮市 渥美弧秀

一抜け二抜け終着駅へ二人連れ
時に諍い時に仲良く傘寿過ぎ
年金暮しは義理を欠くこと
晩年は二病息災詩とピアノ
枯葉舞う茜の富士に見つめられ

静岡県 蘭田模沓

炎天に振り返らずに人歩く
冷や酒にひとりぼっちを楽しめり
近づけば近づく程に緑濃し
夏落ち葉流れる影は無いものを
大根をたやすく抜いて老い深む

可児市 板山 まみ子

ホトトギス渡り亡き人思ふ夜
夕食に一品増やし帰省の子
家事の山皆くずしたい雨あがり
筋立ては知っているのに出る涙
感動の泣き顔昼の街に出る

愛知県 早川 盛夫

たかが菓子されどこの道五十年
菓子造るより能のない手を見つめ
師を越えて師を越えられず菓子づくり
菓子つくる手は銭つかむ手と違ふ
へら一本で花になり蝶になり

富山市 舟渡 杏花

父逝ってポツンと残る絵万里皿
無人売場の大根白く風みどり
出る杭になるやもグッチに手を延ばす
神さまが酔うてたらしい二重丸
辻褄が合わぬベンチの小半日

富山県 増田 紗弓

筆持てば父が添手をするごとく
師と同じ病であった父のこと
現実の逃避 図書館 美術館
きらきらと緑全部あげたくなる祝辞
心痛を隠すに派手な衣装着る

京都市 都倉 求芽

トンネルの中で方向変換思いつく
雨止んでもう打ち明けることもない
カネ落ちる音 自販機も晴れが好き
嬉しさも文字は躍らぬEメール
賞味期限追いかけどおしの冷蔵庫

京都市 高島 啓子

ガラスの靴なくして欠席が続く
幼虫を見逃がしておく山椒の木
久しぶりゆかたバズルのように縫う
摩天楼私も少し背のびする
八月の道の暑さよ広島忌

岡岡市 井上 森生

川下る客が手を振る嵯峨野線
痴呆かしら夫がキウイを箸で食う
紫陽花の変化は苦手の蝸牛
行列の背後に迫る古城跡（亀岡光秀祭）
若鮎の若いかたちと若いつや

京都府 稲葉 冬葉

種からを咲かせた花の名を忘れ
嫁さんが風邪引いている塩かげん
美しいおぐしですねと孫の髪
カエルの声 wait っていた家が売れ
いつまでも独りよいことあるのか

大阪市 鶴田遠野

まず地酒吞んで旅を確かめる
わがまを許して爺ちゃんひとり言
来た青果不器量だけど両親の味
爪をかむ癖の女で捨てられぬ
暇だから忙しいです小商い

大阪市 北勝美

産み月の出征に涙見せぬ妻(妻の回想)
ひまあれば手が動いてた毛糸針
パンを焼く色にも好みある夫婦
方向音痴地理には弱く旅行好き
寂に入り方向音痴へ灯をともし

大阪市 川端一步

桜の木いまが見頃の美しさ
年輪は最敬礼にも品があり
やわらかいペンを使って書く手紙
国宝が焼かれ失恋より悲し
聞き耳を立てるとやはり粗大ゴミ

大阪市 神夏磯典子

年齢をまだ悟れない誕生日
分を知り他人の花を羨まず
水戸黄門どころではない探し物
ほどほどに忘れられたら楽なのに
明日は明日今日大切に献立表

大阪市 小林周信

花好きの住む路地裏に花回廊
同じなら美人の方がよいお酌
手鼻かむ術覚えたり貸農園
立ち止まり空見上げると人が寄る
窓際で何故か鼻毛がよく伸びる

大阪市 河井庸佑

岩陰にそつと微笑む花が好き
紆余曲折人それぞれに生きる道
仕舞風呂じつくり溶かすわだかまり
若い頃甦らせる歌を聞く
赦す気へきっかけなくて弱る父

大阪市 津守柳伸

家事全般こなし女は満ち足りる
体調に合わせる旅の二三泊
こだわりのラーメン伸びる話好き
健康は宝つくづくボランティア
六十年生かされている慶弔費

大阪市 辻川慶子

還暦は赤古希はピンクで華やかに
初恋の少女に桃の香りする
ばら園にダイアナと言う名前あり
藤いろの好きな着物も着ずじまい
乾杯のコップ無色のはずがない

大阪市 稻本 凡子

グツと呑む言葉は明日ある限り
目の位置の上下を変えざる事もなし
洗濯で流した悩み乾かない
日記空白忘れたくない涙あと
くったくの無い面つけて母と会う

大阪市 本間 満津子

補償受けずに迎えた満期嬉しい日
切株を見守る森の陽が温い
足るを知る心幸せ湧いてくる
相談が結構出来る独り言
一票を私も入れたではないか

大阪市 川原 章久

雨に霞む遍路見送る杜若
無人市善意の銭の音がする
懐かしいラムネがら祭の夜
格に差が今も船場と島の内
ブーム去り団子に変わるわらび餅

大阪市 板東 倫子

会席のメインははたるのファンタジー
どちらからともなく誘うピアガーデン
子持ちには見えぬ姿で里帰り
インターネットわたし一人が不要論
よう生きて来たなと命いとおしむ

大阪市 岡本 久峰

本町の大ばけ小ばけ飯食らう
ちっちゃい森小鳥さえずる都市砂漠
北向地蔵一円玉にある祈り
一割の負担に喘ぐ介護法
生きのこり熱海の宿の怪気焰

大阪市 杉澤 汀

言いつ放し聞きつ放しの総選挙
ライバルの病氣こっそり触れまわる
酸性雨告げる花とは思われず
大胆に泰山木の花白し
忘れたか耐えよ忍べに哭いた日を

大阪市 清水 絹子

ハハニカンシャ報せに浸る母の日よ
なにごとくも風吹くままと娘の胡坐
千年の苦行を今に延暦寺
一幅の遠き墨絵の比叡山
友の名が日に日にふえる日記帳

大阪市 渡部 さと美

あじさい寺友ら七いろみな元気
怒ることようせず泣くはなお出来ず
実らなかった夢はでかく揚花火
わかったよようわかったよ枇杷の種
ヒゲ一本男のようにあごをなで

大阪市 玉置英子

目が覚めて今日の始まりまずは伸び

吐き出して迷わず潜る鵜飼の鵜

弱冷の表示探して乗る電車

紫陽花の濃いも淡いも雨を恋い

擦られつい手の内を見せました

池田市 栗田久子

おだやかな流れの中にあつた淵

終身刑告げおきひとり先に逝く

おだやかに命のドラマ潮だまり

悲しさももうこのへんで底だろう

すりこぎの手をふと止めて祭り笛

池田市 藤井計光

ごてはつたお方も今は仏様

謙虚さで目線を低く生きた人

マルチ商法気づいた時は金縛り

母の骨拾う手もとが震えてる

「ああ」「おう」と気のない返事反抗期

泉佐野市 山本蛙城

無抵抗の抵抗鉢で木が枯れる

寂聴法話死ぬための生なるほどね

公約の甘と中甘だけ揃い

神の国臣何某が出て来そう

在日が輪で舞う金金会議前

茨木市 堀良江

姑は嫁を他人にしてしまふ

献体の話に進むお茶の会

目を入れて誓い忘れた大だるま

化粧した娘にパパは照れている

みどりから始まる変換額の花

貝塚市 池田寿美子

バンブーダンスバリの夕陽がなつかしい

竹林の陰にすべてをあかす貌

想い出を整理している衣替え

静けさとセンスの渦に展示会

「乙女の祈り」旅の終りに聴いておく

河内長野市 加島由一

青春を括ると歌は神田川

さりげなく過ぎてしまった父の日よ

紫陽花を見ながらついて来ませんか

諸法実相十七歳が家にいる

健康な証拠毎晩飲みたがる

河内長野市 井上喜醉

名水へ豊かな香り出す新茶

平成の御代まで続く縄のれん

誘われて人の懐あてにされ

風鈴の土産ドイツの音で鳴る

平凡な時を刻んで旅の空

岸和田市 岩佐 丹吉

サミットで星条旗の島見てほしい
さすらったあの日でつかい虹に会う
一善を果たして人の顔になる
職安で元気を吸いとられている
血圧の博士のような人がいる

岸和田市 高須賀 金太

運動のために通院しています
通院をガーデニングが慰める
二本打つ注射は細いのが痛い
注射より痛い週二回の出費
体力がないと通院できません

岸和田市 原 さよ子

孫からはパソコン文字の便りくる
データバンクに私の財産握られる
寿命だけ延びてわびしい介護法
工夫した料理へ夫の無頓着
ひと時を無心にかえず花という

岸和田市 藪野 けい子

母の日に光っていますイヤリング
母の日に孫から花を贈られる
しなしぐさ高級感だすお人柄
パソコンを先取りすると変わる機種
景品は手元素焼は手みやげに

堺市 志田 千代

梅ジュースころあいとなり夏休み
夏休み読書感想だけ残り
手づまりの妻の料理の冷奴
機上から山のあなたを見えています
こっそりと水道の水飲んでる

堺市 神原 文

息つぎで変わる筆先夫婦仲
幸せの絶頂不意に悲しくなってくる
ついて来いよっしやと弾むバツテリ
抱きしめる何かが欲しい梅雨寒よ
少子化へ竜舌蘭は子沢山

堺市 山本 半銭

液晶化人間までも薄くなる
ポツンと書く母という字はせつないよ
昔祖母はわたしの為に掌を合せ
海山の恩を数えて祖母の忌よ
仏壇にあまる大きな百合が咲き

吹田市 古川 喜美子

騙されておけよ仏壇からの声
朝とりのいちごジュースにしている音
歯医者さんマスクの内は団子鼻
カーテンを替えようみどりの風が吹く
どの手紙にもご自愛と書いてある

吹田市 瀬戸 まさよ

みずずりんやさしいやさしい心生む

言うことは筋通しても青い芯

餌与う順間違わぬ親つばめ

見飽きない子つばめ同じ顔並べ

梅雨寒にこたつカイロで凌ぐ祖母

吹田市 大谷 篤子

母の日よ膝に二歳の孫という

萌えるもの雑草までもいとらしい

衣替え夏もやっぱり黒が好き

絵心の無いのが花を生けている

おやすみと暖かい骨拾いおり

吹田市 野下之男

トロッコから熟女の笑い転げ落ち

まだ元気母校の並木撫でてみる

無言劇続ける妻の長電話

お座りと言うてはみたがタイの犬

物売りの目に捕らわれる日本人

高槻市 江原 秀夫

旅先の妻の電話は酒が聴く

ややこしいことには触れず午後のお茶

満開の鉢に踏み場のない書斎(さつき盆栽 3句)

一年の愛染め上げる花の色

木の気持ち思う花後の鉢かな

豊中市 安藤 寿美子

アルカイックスマイル弥勒菩薩さま

ほどほどの慕情余生あたたかし

笑えないジョークばかり言うた人

まちがいに気付いて疲れ倍になる

美しい切手を好きな人へ貼る

豊中市 吉田 あずき

招待状わたしについてるバーコード

赤穂の塩 沖繩の塩 舌も罪

ヒトゲノム神の気儘な設計図

今どきの化粧よ老いも好奇心

夕暮れの紫陽花この世のものならず

豊中市 田中正坊

花暦 わたしの誕生花さがす

浮かばない句想に蕪村俳句集

大橋を渡るとそこは花の島(淡路花博行 3句)

花を恋う人がこんなに淡路博

小雨降る中をさまよう花の園

豊中市 井上直次

肩書の消えた名刺の軽いこと

演奏会余韻楽しみ飲むコーヒー

黙礼を返してみたがさてどなた

高い方の薬効くかと買ってくる

アドバイスお金添えれば効果的

富田林市 藤田泰子

ひたひたと私の雨期も近くなる

淋しさと比例している電話料

逆らえず拝金主義に流れ出す

体内時計泉が満ちる卯の刻だ

嶺上開花 高嶺の華を掌に入れる

富田林市 松本今日子

美しい海確かめている素足（佐渡の旅 3句）

彈崎灯台地球の丸さしみじみと

かんぞうの黄色だいてる帰路の船

真つ先に犬が迎えに出てくれる

留守の間のお花はみんな日射病

寝屋川市 森茜

縄張りを鳴く葦切の命がけ

雷神が走っていつてどつと雨

母の日の夕べへ長寿そば届く

家じゅうで分け合っている大笑い

いっどこで打ったことやら胸の痣

寝屋川市 柴田英壬子

夾竹桃の赤と無線で話し合う

寝ころんでいるのいいな誕生日

どんよりとした日々梅の実るころ

グッグアウトの電話コードを捻じぬよう

昭和ひとけたインターネットとは無縁

寝屋川市 籠島恵子

人恋し夫も子供もいてるのに

無視されて葉ざくらホッとしてるよう

中腹のあたりで見えてしまう事

煮ても焼いても食えなくなっているわたし

夫しかもうおりません座りダコ

寝屋川市 高田博泉

満腹の虎に野心は見えてこぬ

花ことば知らぬ私にこんな花

カップルの笑顔幸せなんだろう

年金を貰って思う金の価値

人の波クラクションにも慌てない

寝屋川市 岸野あやめ

ケンちゃんという猫がいる洗濯屋

目覚ましものに仙台歩道橋

銀行の看板目印にはならぬ

宗教に誘われて娘に叱られた

子自慢の隙を待つてる孫自慢

寝屋川市 堀江光子

案外にピンクびったり合うわたし

花を見る約束残し旅立ちぬ

館のさくら館とともに跡もなし

白鳥の歩く恰好見詰めまい

いさかいの言葉にも出る人の幅

寝屋川市 北岡波留吉

まだ八十路恋の手ほどきなら出来る

青信号なかなか点かぬ片思い

素晴らしい信号を待つ二〇〇〇年

広島で鳩と平和を語り合う

恩賜の刀涙で捨てた終戦日

寝屋川市 太田とし子

ミニトマトどこでも主役の顔をする

百円ショップいやに気前のよい財布

花の命今日も介護してお茶に

愛でてやる花にもライバルある様子

エエじゃないかこんな余生でエエじゃないか

羽曳野市 吉川寿美

青葉風真ん中に置くいのち

古希いまだバラにときめく時もあり

時々他人の顔をする鏡

とても静かに病夫を刻む砂時計

添寝する団扇の風に亡母がいる

羽曳野市 福田満州

藍色の際立ちはじめあじさい忌

どこからか来て初鳴きの雨蛙

数病息災 神様の思し召し

包丁を研いで貰うと指を切り

玄関を二三度出入りして出掛け

羽曳野市 三好専平

無理をして答えを探すこともない

コーヒーで取れる眠気でないらしい

目の奥がすこし痛んでいるという

ほんとうに湯が出るのかと安ホテル

紫の爪で文庫のページ繰る

羽曳野市 酒井一壺

あの人の便りと思う風の音

ネクタイを取ると風にも味があり

たわむれる蝶とはなびら風は春

欠席を減らす工夫の記念品

欠席をしても会費は取りに来る

羽曳野市 西村りつえ

かつこよく欲がないとはまだ言えず

生臭い風に麻痺した風見鶏

横文字に弱いシニアの続け文字

目の前の老人力を迂闊にし

登りつめ裾野が見えぬ昼の闇

羽曳野市 安芸田泰子

クラス会女は暮し盗み見る

母介護鬼となる日のある私

会いにゆく顔を鏡に覚られる

傷つけていると思わぬバラの刺

携帯で親子の会話繋いでる

東大阪市 谷口 義

コーヒーのおいしい店は路地の奥
その筋の人だとわかる歩き方
晩酌は奥さんがしてはるらしい
仏壇が二階と下にある我が家
夕焼け小焼け子供頃の道の幅

東大阪市 森下 愛 論

たかが一合愚かさを知るカウンター
息切れは酒切れと知る時間
胃袋を一寸くすぐるだけの酒
グイ飲みで愚痴も一緒に飲んでいる
李香蘭しみじみ滲む兵隊史

東大阪市 安永 春

うぐいすの谷渡り聞く遍路道
軽やかに手甲脚絆の僧が行く
団体でお遍路さんの登山靴
忘れ止めよう効く薬おませんか
流れ雲変形しつつ西へ行く

東大阪市 北村 賢 子

故郷が近い乱れてくる景色
空洞の樹も花咲かす意気を見る
平和の礎 亡兄の名前に立ちつくす
ひめゆりの塔では出来ぬハイチーズ
つらい過去わすれえずしてする介護

枚方市 前 たもつ

年中組トマトジュースはもう飲める
自分ではトゲの一つも抜けぬなり
日帰りへ二重橋とすれ違ふ
へっぴり腰サマになつてギヤル御興
妻の後ろで頭深々下げておく

枚方市 寺川 弘 一

桜が咲くとあたりまえだが記事になる
どんぐりも一度は弾み池の中
玉虫色がパレットにない定年後
パスポートひとつで心弾みだす
昨日は昨日 今日今日の酒を飲む

枚方市 森本 節 子

野の掟あるのか順に花が咲き
モネの花に劣らぬ山荘の白睡蓮
パスポートなしではるばる渡り鳥
いらぬ用事拵え身体きたえてる
ルビのごとより添い歩いた長い途

藤井寺市 高田 美代子

梅の実を光らせ雨季の真ん中に
歳の差があつて衝突せずに済む
信じたくない事が目の前で起きる
ブレイキが効かぬ効かぬとペダル踏む
ひらひらと散れば視線が追ってくる

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

初対面同じジュースに打ち解ける

消して書きまた消して恋傷だらけ

見さかいてもなく好きになるはずがない

ひと言に女心は洗われる

水草の色やわからかに金魚の尾

藤井寺市 楠 昭子

人の目を背中に感じている落ち目

愚痴の球投げあいながら肩ほぐす

親切も過ぎると肩が重くなる

出直しの夫へ好みの靴を買う

評判のえくぼ一座をほほえませ

松原市 小池 しげお

達筆なハガキばかり来て困り

百円で買ってきたのに喜ばれ

働いてごらん暑さが逃げてゆく

有名な医者にかかっていた計報

へそくりをつくって妻と勝負する

箕面市 出口 セツ子

魂の隙間に微が生える梅雨

B面で楽に呼吸をして生きる

少年のニュースに心までも梅雨

恐い者一つ作っておく蝶

蟻踏んだ痛み覚えていない靴

八尾市 内海 幸生

額縁が少し歪んでいる安堵

雨も良し晴れてなおよし生きている

穏やかな人と出会った日の日記

言い切ってブレイキの無い車

落日や恩人の訃へ音も無く

八尾市 宮西 弥生

一本のドリンクにいくさ待っている

現実には冷たい女の矢があたる

自分だけ知らなかった崖っぷち

沖縄は国際色の風平和

梅雨寒も日本の季節いい気分

八尾市 宮崎 シマ子

美しい嘘を包んで胞子とぶ

チリメンジャコの数をかぞえたことがない

ぶっつかり茶髪が先にゴメンナサイ

辞めるのは入る以上に気が重い

夜になると本音そろりと顔を出す

八尾市 高橋 夕花

春愁の妻は優しいことを言う

一筆箋まごころだけが届くなら

言い過ぎて五月の風のきびしすぎ

くちなしの蕾いっぱい胸の中

バラ苑でみ果てぬ夢を見て女

八尾市 高杉千歩

父の忌に仏飯一合炊いている

変身願望 八月の雨多情

青年の匂い息子の枕干す

パステル九十六色幸せいろに燃えている

リハビリからカルチャーへ行く夏帽子

八尾市 吉村一風

ミニマト可愛い彩で初夏を呼ぶ

おだやかな日で平凡に妻と居る

幸せて何かと孫に訊ねられ

はやばやと風鈴初夏を奏でてる

カレンダー妻も負けずに忙しい

八尾市 生嶋ますみ

軽やかに虹を抱いてるシャボン玉

忘れよう昔はむかし今はいま

退屈というぜいたくのある老後

外人さんに席ゆずられて面映い

新しい光溢れて術後の眼

八尾市 神原まさと

ジャズファンシヨパン聞かせて育てた子

行列は大バーゲンの子供服

タイミング良く飲み効いた風邪薬

階段は危ないこと知る二歳

校歌合唱六度目の竜の年(同窓会)

大阪府 米澤俣子

お互いが杖かけがえのない伴侶

一番星 暮れなずむ空待ちかねて

夕陽背に甘いふたりの影絵劇

鯛のあら煮き木の芽もそえて私流

経験よりしよつてる机上評論家

神戸市 中村ゆきを

海拔三千連峰の神に触れ

ちぎれ雲なんだかボクにも手を振って

天と地の間一切捨てという

対岸もレガッタ追って走ってる

中也 春夫古書店のオヤジも逝去せり

相生市 中塚礎石

爪に火をともし地獄に金を積む

リストラの水位が上がる台所

保護色はげて一生不覚とる

いいことがあると信じる霊柩車

喝采の陰で女のすすり泣き

尼崎市 長浜澄子

いいことは永く続かぬ膝を抱く

頬寄せる背中にガレの灯が揺れる

サウンドが虚しいミュージシヤンの葬

お子さまランチの旗には向かう敵がない

後学の為と言いつつ根ほり葉ほり

終戦の一億ザンゲ皆忘れ

川西市 松本 ただし

法螺ひとつ吹けずわびしい太鼓腹

日本を担保にする気の借金王

我が足をしゃぶり警察底い合い

希少価値小判のようなトキの雛

川西市 米原 雪子

夕立に庭も一風呂浴びたよう

担任がニックネームで呼びウケる

梅雨晴間記録延ばした万歩計

青空へ伸びた緑に深呼吸

濃淡の緑が描く森の中

宝塚市 嵯峨根 保子

通り抜けぐらいがよろし花の道

地球儀にわたしを乗せる好きな国

真夜中のほととぎすには起きてやり

滝の街すてても憂さはすぐ戻る

青木弁慶まゆの苦渋はみていたよ

西宮市 長谷川 淳

青山が見付からぬままもう傘寿

ビール党口角泡が多すぎる

気がもめる妻が電話の小さい声

あちこちで出会いが増えた震度七

差別語の代りの言葉出てこない

夢ばかり山盛りだった始発駅

西宮市 西口 いわゑ

満足そうに月がぼっかり顔を出す

傘の中わたしひとりの宇宙なり

見返り美人しかと鏡をたしかめる

運命がどう転んでもわたしです

西宮市 奥田 みつ子

母の口ぐせ何時もいつでも程々に

心模様うつすレーダーなど如何

腹も立つが可愛いところあるんだな

吊り広告ラッシュを美女が慰める

泰山木 一花ささげて毅然たり

西宮市 門谷 たず子

正直な鏡に負けたにらめっこ

叙勲金婚あれが最後の華の頃

もう誰も踊ってくれぬ笛を持つ

阿吽の呼吸を乱す老いの風

終章のシナリオすこし朱を入れる

西宮市 山本 義子

日にち薬これが一番効きました

夏草や更地まだまだ残ってる

突然にオニユリと会う幸もある

水をやる わたしも心咲くように

ワープロの変換笑いはなしかも

西宮市 牧 渕 富喜子

陽が昇る未だ素つぴんの月が居る
身の内できつとせしもの夏が来る
苦言拝聴姉のことばに似てうれし
となり合わせて劇中劇の幕が開く
荒れた声に哀しみのみ残る

西宮市 秋 元 てる

松前城 武者行列へ三分咲き(旅 2句)

下関 引揚帰国半世紀

慰霊祭 曾孫貴方似がおかし

遺族老いよたまた献花の列つづく

「見苦しい」忽ち萎む老ファッション

西宮市 井 上 松 煙

おばはんの高い気位低い鼻
牛肉の旨い法事のおもてなし
ハンカチを只のティッシュが駆逐する
姉妹 父母の長所を一つずつ
約束を守る信条老いたれど

西宮市 刈 田 泰 司

男女差がない言葉もお化粧も
男古希ウブな時ありベレー帽
男の意地と女の我慢まだ続く
お化粧をおとして嘘はつきにくい
雲は秋ひとりで幕が引けるなら

姫路市 古 川 奮 水

山伏等はらの音続く聖護院
大正池空と山との青混ぜる
バリアフリー歳に似合うた城築く
梅雨の鬱いつそ水着になろうかな
ゆうパック パツと開いて梅雨上がる

兵庫県 大 谷 幸次郎

戦争を昔話と聞く世代

ちと緩い男結びは老母だろう

小うるさい町内会のごみ奉行

選ばれたつもりの花が咲き競う

自分史にすっかり自分褒めてある

奈良市 米 田 恭 昌

パラサイト猫は主の顔をして
リストラにあつて我が家が軋み出す
破れ鍋にびったし蓋をするキャリア
女人禁制 役行者の睨む里(大峰山 2句)
結果門すごすご帰る二人連れ

大和郡山市 坊 農 柳 弘

梅雨が明け天神さんのリハーサル
だとしてもハローワークの握り飯
美しい虹が見たいと千羽鶴
夏大根母の小言の味がする
甲子園OB会のカンパ帖

和歌山市 牛尾緑良

影だけを日記に残し生き延びる
青春という名で続く蛇行癖

夢に酔う日々一刻を大切に

延びてゆく余命に耐えている寿命

影は何故等身大を越えたがる

和歌山市 福本英子

二重橋みどり生き生き此処も雨

行く先先のチャンネル変わる旅疲れ

中国へ行く娘に持たす陀羅尼助

マネキンと同じ服着てみたいだけ

目移りの回転ずしに逃げられる

和歌山市 川上大輪

来ないかも知れぬ返事を待つ雌蕊

横風に弱い私の滑走路

自然発火しそうで水を飲んでおく

ガス台にこびりついてる躁と鬱

早く帰ろう亡妻がひとりで待っている

和歌山市 山根めぐみ

そよ風逆風みんな命の肥えである

足ることを知らずに人は数を追う

肝心なことは命で確かめる

すりむいた今日をどうする術もなく

カッとくる単細胞のまま老いる

和歌山市 木本朱夏

あじさいの雨から雨へ旅半ば
あじさいの青に漂い水になる

あじさいの毬揺れひとは還らない

ロストラブひまわり畑に逃れ来て

切り株に座って運を待っている

和歌山市 古久保和子

畳屋の車と出合う五月晴れ

アルバイト地声が役に立っている

焼き芋と同じ声してわらびもち

西暦で読めぬ歴史を持つている

背景に溶けて駅前ミュージシャン

和歌山市 福井桂香

幸先よし婚の荷に会うバスツアー

うぐいすの鳴きうつき咲く茶花の郷

釣り人は無口で帰る桜桃忌

福祉バスもつと静かに運転を

莢えんどうの奥にのこった慎重派

和歌山市 青枝鉄治

代り映えせぬ政界で舟出する

清廉の文字になじまぬ金バツジ

敗戦の訳を聞かずに酌いでやり

生かじりの法を持ち出し空気冷え

色あせたメモから拾う母の味

和歌山市 玉置 当代

海南市 谷口 義男

門を外した隙を狙われる

三つ子の魂今更変わることはない

ネクタイの緩みへ忍びよる悪魔

ネクタイの好みに合わず夜の酒

天秤にかける家庭と肩書きと

和歌山市 堀 畑 靖子

好き嫌い言わず見つけてきた仕事

責められて世間が悪いなどと言う

リメイクの施しようもない私

沢山のもの無駄にしたゴミバケツ

ストレスの原因家庭内離婚

和歌山市 山口 三千子

街の空気吸いに三越ショッピング

歳なりに垢抜けをしたファッション

カレー事件まだ割り切れぬ夏祭り

糸底を磨いて今日の鬱を消す

病んでから心の鏡くもりだす

海南市 三宅 保 州

もう誰も信じられぬという不幸

二度の職息子の秘書になりました

あごだけで人を使っていますか

田舎とはどこにも書いてない田舎

古里がだんだん遠くなる辞令

清貧を褒めてはくれぬ世紀末

美しく生きる老後を考える

一蓮托生 運に任じた木の葉舟

行間の謎に気付いて胸騒ぐ

拳骨の味を知らない子を育て

鳥取市 岸 本 宏 章

虹の橋天女が衣干している

投げ返す石なら一つあればよい

拗ねた釘ほどしっかりと叩かれる

ごみ一つ見せない部屋も落ちつけぬ

貸し渋り歯医者さんへはならない

鳥取市 美 田 旋 風

ふところに名札ひとつの散歩道

男と女わからぬままに黄昏れる

北風へ男はいつも楯となる

帰らない自慢の子ら待つ夫婦

母の目に子はいつまでも餓鬼のまま

鳥取市 近 藤 佳 子

次世紀も水戸黄門をみてるだろ

そろそろと歩くと木偶の坊に見え

演歌の女みな可愛くて不仕合わせ

潮騒は答えず波は翻る

浮雲よ亡友よ貴方も喜寿なのに

鳥取市 石上悦子

誤作動の合図だけれどエサをやる
海越えて母娘支えるEメール
伸びのない輪ゴムに束ねられる島
太陽も外灯も持つ使命感
赤子抱くずーと忘れていた匂い

鳥取市 武田帆雀

半額になる夕刻の顔馴染み
打ってよし走ってオーバーランをする
無口ではなかった会議物申す
鉛筆の筋の通りに大工する
白も白なら黒も黒おもしろい碁

鳥取市 杉本孝男

老境を受容したからよく太る
庇い合う二人に何時か恋心
派手を着て寄る年波の盾とする
身内でも庇い切れない壁がある
長旅に緩む靴ひも締め直す

倉吉市 山中康子

立ち止まり溜め息のどるやわらかさ
ご機嫌な口がうかうか波に乗る
老いの身に華やぎ少し下さいな
気が付けば辺りは青い花ざかり
他人の幸はめて優しい人となり

倉吉市 山本玲子

ぎこちないリズムで喜寿の坂登る
おちよば口してせっかちに食む兎
六十路坂急ぐな狂い咲きもある
土を練る気分はもはや陶芸家
包帯で誤魔化し主婦を休めます

倉吉市 松本よしえ

誰も渡らぬ陸橋が錆びている
粘膜が干からびぬようまむし酒
ふる里の山網膜に焼き付ける
鬼ごろし飲んで美事な泣き上戸
奇麗ねと褒められている総入れ歯

米子市 政岡日枝子

拡声器 今日も行方を尋ねてる
指きりは果たせず濃い濃いコーヒー
射程距離じわじわ幕切れが見える
いつも開けてある西側の窓
秋風に深い眠りはどのように

米子市 田中亜弥

海ゆかば溢れるものは何もない
鉛筆が多くて何もまとまらぬ
母の船はいつも波立つ海にいる
子沢山活気がずらり干してある
道しるべたどれば星へ近くなる

米子市 木村春枝

空仰ぎ椅子ひっそりと主待つ
墓参り鎮静剤の役果たす
裏切りの話に椅子も耳を立て
忘却はノート取る時始まって
これからも素敵な事はたとある

米子市 澤田千春

手を伸ばし若木の気力もらいたい
身の内に確かな母の躰糸
別れてからもさわやかな風のこす友
花道が見えかくれする蟹気楼
カッブルを待つ椅子ひどく落ち着かぬ

米子市 茂理高代

道草のどうせ行く道あせらずに
もろもろの荷をおろし花植えてゆく
訪ね来て庭一ぱいの花に会う
風薫る夢を大きくさせる空
たくさんの人花を愛で雲になる

米子市 青戸田鶴

ひき止めるすべなかったか俄雨（荒介さんを惜しむ）
忘れたい事ほとんど忘れよう
考えごととして咳がとまらない
凡例にしたがいながら種を播く
大山が主役で花回廊はえる

米子市 本吉宗光

東京に負けたらあかん日が暮れる
吾が祖先毛利に追われ武士捨てて
十七歳ラストシーンをなぜ飾る
政治とは数であるぞと法通す
惚け進む財布のありか何処なのか

米子市 木村富美子

今日の雲明日の希望を置いてくれ
オーイ雲少し話して行かないか
思い出を探すアルバム濡れて来る
おしやべりのノート口どめばかりする
歯車がストレス溜めてかみ合わぬ

米子市 光井玲子

私に活気を与える娘のコール
一行の約束守るかたつむり
梅雨晴間ころゆっくり遊ばせる
遊び下手な父が一念発起する
つぶやきを爆発させて落着いた

米子市 門脇晶子

紫の彩 熟年の恋の色
糸巻きを辿って行けば亡母に会う
喜寿までは凡夫婦にて生きてきた
破竹の土が笑い出したよ出ておいで
拔擢の椅子は部屋には一つだけ

米子市 中井 ゆき

大山も今日はお疲れ雲に寝る
夕ぐれに不意に胸つく薔薇の香
数のない絆縫ったりほぐしたり
母の忌がめぐるつるばら真つ盛り
病院の窓それぞれに祈りの灯

鳥取県 吉田 孔美子

建築士となりの瓦だけ誉める
折り紙を本で秘かに会得する
レジャーボート港の景色変えていく
歴戦の空母はなんと頼もしい
君は蜚聞を優雅に制覇する

鳥取県 塔 寛子

お散歩のおつむ綿毛の風をのせ
句読点どこへ無職の日日過ぎる
ファッションは手作り粋な老いづくり
瘦せらつきよう蜂蜜漬けにでもするか
殺りたくてやったよい子の青春悲し

鳥取県 田村 きみ子

わたし今幸せ涙ぬくうなり
舞っていた蝶にもあった世間体
ほころびをつくろう姑は戦中派
襷の中かくしきれない波ひとつ
絵日記にクレヨンで描く父母を

鳥取県 土橋 はるお

ほろ酔いの父が唸っている港
どん底でしずしず飯を食っている
ワンカップ父がほたるにかざしてる
すばらしい音色の軒かく妻だ
爺さまに孫がびしびし問ひ質す

鳥取県 土橋 睦子

肩書きは何もないから飛んでいる
淋しさを忘れる返事待っています
おお真面目おちやめな恋に座が和む
電話から泣いた笑った核家族
意地を張る夫も私も根なし草

鳥取県 乾 喜与志

丸刈りの頭が経を読んでいる
嫁御寮なぜ泣くのかと爺うたう
甥は墓までも都会へ連れて去に
杖ついて釈哲州は未だ生きる
畑作り忘れ野菜をよく食べる

鳥取県 奥谷 彩子

春夏秋冬 悲喜劇重ね生きる欲
逢って来た余韻にひたるコンパクト
レポートに脇役の愚痴書き止める
古希の坂ゆっくり運ぶ万歩計
子は王様齒止め効かぬ子に育ち

鳥取県 橋本多哥由

好きな人迎えて背伸びしてしまう
口裏が合います妻に勘ぐられ
歳月が僕の心を丸くさせ
ふる里に思いをはせる城がある
淡々と生きてる母に感謝する

鳥取県 西川和子

てんでん今日のライバルよく弾む
パフォーマンズここがしらずし見せ所
子供等の思い一つに千の鶴
病んでても母の港は安らげる
手習いへ癖と格闘しています

鳥取県 上田俊路

蟹気楼追っている乱獲の海
悩殺のえくぼも今は皺に化け
老いてなお噴きあげてくる思いあり
受験子の無口に秘めてある未来
不器用でもジョークで最期飾りたい

鳥取県 山本正光

意味はなく他所の奥さん褒める癖
駄洒落などつうじぬかたが横に座す
人間の顔で平気に人殺す
地団駄を踏んでトイレの番を待つ
貴婦人も少しのけぞり飲むワイン

鳥取県 国森武子

土に生き土にかえるか我が命
春夏と変る大地に心澄む
鯉のぼり一軒もなし小部落
青い空臆せず生きてゆくと決め
蛍かご麦わらで編み夜を待った

鳥取県 石尾かつ乃

握手した農婦の素手が温かい
さみだれにあつという間になる青田
趣味の絵が狭いお部屋で語り合う
一くぎりついた安堵に夢を盛る
禁煙の夫をいたわる夫婦愛

鳥取県 西原艶子

サラリーに頼り質素が板につき
少子化の波紋 子の恋揺れている
うらなりの苺いちごの味がする
ひとときの熱狂ぶりはないだんご
芽ぶきの暮し覗いてみたくなる

倉吉市 野口節子

熟れました一寸見ぬ間のさくらんぼ
素裸になれる私の小宇宙
逆縁に時計の針が総狂い
潮満ちて華燭の典に辿りつく
青春の息吹に燃える丘二つ

出雲市 吉岡 きみえ

にぎやかな一日だった灯をつける
愉快なことわたしに低い鼻がある
ビールはスーパードライと決めている
ねるときも手は合掌の形する
ひるの月帰らないでいいですか

出雲市 石倉 芙佐子

もひとりの私奪った積乱雲
どよめきの果て紫の孤独感
漆黒の闇に鴉は鳴かんとす
アラジンの魔法が解けぬ白い壺
露草のその後を知っているあなた

出雲市 竹治 ちかし

毎日を富士見て暮らす人も居り
友情を表通りに出しておく
境界に血染めの杭が打ってある
役終えた添え木が少しずつ朽ちる
信号が変わらぬままに同じ列

出雲市 園山 多賀子

独り言ではない遺影額いた
宙ぶらりんになりそうだから雑草を抜く
独り部屋耐えよ耐えよと太陽が覗く
私の器もう欲びは溢れない
甘い母愛は小粒の方がよい

出雲市 富田 蘭水

ふる里はやはり寢床に適してる
ほしい酒ふつと命を重くさせ
粽には孫の未来がこねてある
自尊心だんだん枯れて丸くなる
無難にも生きているのにゼンダー論

出雲市 久谷 まこと

蟬螂の斧それなりの威力あり
可も不可も承知手加減されている
土壇場の逆点余徳認められ
七坂を越えた足腰きしみ出す
老い二人苦みほどほど新茶の香

出雲市 小玉 満江

会長の次で何かと忙しい
立ち退きへ一人頑張る老いの意地
前列の好きな女が良くしゃべる
一寸だけ泣いた振りして物ねだる
おぞましい朝のニュースは横を向く

出雲市 岸 桂子

母百歳あと幾ばくの余命表
母の日に母を泣かせたブレゼント
淋しさの極みに母の席がある
振り向けば母ひっそりと病んでいる
原点は男と女 父と母

島根県 堀江正朗

またしても昼と夜とを取り違え
汗拭いて御無沙汰詫びる出雲弁
選挙カー初夏かきまわすかきまわす
風流なお地藏さんは四季うたう
失明を慰めにくる小鳥たち

島根県 堀江芳子

雑談の中から拾う温かさ
足の立つうちが花だな酔い機嫌
とうさんの怒鳴る元気を息子褒め
青葉風老いを忘れて長い土手
秋こぼれこぼれ郷愁また誘う

島根県 松本文子

許せずに我が身の内の土石流
桜もいけどつつじもいね一人だけど
雛育つ信じたきものまだ多し
葉桜をほっと見上げる日の流れ
そして大阪遠い所となりにけり

島根県 森茂美

子も孫も棚田に集う連休日
落ちこぼれ種に野性の花が咲く
落城まで時間をかける好きなひと
太陽の怖れを知らぬガングロ娘
敗戦忌摩文仁の丘に立った娘ら

島根県 柿原秀子

夏椿ひっそり咲いた朝の露
ホトトギスよく鳴く今日のいとこの計
低い鼻それでも日焼けしておかし
紙コップビールで和むいい仲間
もう一度なくした夢を探せとや

島根県 伊藤寿美

菜の花忌司馬遼借りる図書カード
介護保険もゴミ分別もややこしい
胸の奥で螢を飼うて妻で居る
噴煙のテレビ見ているさくらんぼ
長期入院病名主になるベッド

岡山市 井上柳五郎

長生きのコツと聞かれる俺も歳
八十余年生きた中にはぼつぽやも
いつからか老いの散歩へ軍歌出る
千円に満たぬ年金べアされる
憧憬の席に座れて孤独追う

倉敷市 小野克枝

大皿に蒸しパン二つのあたたかさ
受ける手を酌ぐ手に替えて父も歳
視線にも赤青黄の色がある
進ませた時計で人間遅刻する
平仮名の手紙が今日を弾ませる

苦しみの果てだと思ふ高い橋

岡山県

小林 妻子

道を選ぶ程の時間はもういらぬ

薬指で光っているが役立たず

洗濯機に入れてあげたい人もいる

飛行機で旅立つ桃を見送って

岡山県

山 本 玉 恵

膝抱いて單身赴任の春送る

無欲にもなれず腕組まだ解けず

花一枝コップに挿して一人膳

逢うて来てそつと焼芋妻に買う

それぞれの想いできいた波の音

岡山県

大 石 あすなろ

少しずつ初夏の彩かな絵の具皿

待ちくたびれて私の影を置いて来る

糸底に明治の亡母の耐えたあと

ふところの深さを秘めている無口

真ん中の囀が派手によく動く

岡山県

富 坂 志 重

薄味でとつてもながいお付合ひ

振り向けば馬鹿正直の積重ね

晩学の尽きるをしらぬ日々楽し

老いてゆく心と体うらはらに

流れ星にたのんで見ようポツクリ死

遊ぶのが仕事のころの童歌

広島市

森 田 文

母が居て足を早めた遠い景

草焼きの風の匂いもなつかしい

悲しみと怒りのニュース祈りのみ

戦時とて恋は詩人にしたものを

竹原市

小 島 蘭 幸

九十歳の友達野菜抱いて来る

子犬抱くジョギングシューズ買ってある

結婚記念日犬と散歩をしています

五十歳になつてしまった弟よ

灯台よ夕陽の中の句碑と会う

竹原市

森 井 菁 居

不器用な振舞に見る人間味

昔ばなしに出て来るヘビースモーカー

少女見染めるこの感覚は恋だろう

ボランテニアならば働き口がある

クーリングオフに救われ目が覚める

竹原市

古 谷 節 夫

夕焼けが宇宙へ消えるモノローグ

ワンスモア坂本龍馬おでましを

お向かいに国旗を嫌う人が住み

ユニフォーム孫へ自慢の背番号

マスターの気つぷのよさに酔うお客

竹原市 三宅 不朽

平均寿命このごろ遠出しなくなり
つくづく鏡やがてはこれが死ぬ顔か
山頂のしかと夫婦の深呼吸
緋とはかくも緋なるか溝に浮く緋鯉
眼のかぎり蝶の変身かも菖蒲

竹原市 岩本 笑子

今日というドラマへ反省文を書く
ど演歌にどっぷり夫のマイクかな
大波小波素足はいつか走り出す
身構えているのは雨の青蛙
長者番付 女だてらと言っなかれ

広島県 藤解 静風

小さな胸に燃やし続けた小さな火
目立ちとない以上に無視はされとない
それなりの覚悟はせよと心電図
癌で死ぬのは他人事だと思ふとる
さめざめと泣いた泪は耳に入る

宇部市 平田 実男

肩書きが増えたと減って行く個性
脛かじる時だけは乗る縄電車
色褪せて痛ましき増す千羽鶴
おはようの一言わだかまりを流す
叩いても埃の出ない味気なさ

美祢市 安平次 弘道

一瞬の静寂緞帳が降りる
あれも夢これも夢です弔辞読む
頑固には頑固ゆずれぬものがあり
意地張っていても行く末考える
海鳴りを聞いていつしか寝てしまひ

香川県 池内 かおり

迷わずに付いて来た手だ離すまい
もう一品控えています冷奴
もう来るか来るかと老母の待つ姿
盃で誓って水に流される
旅姿こころはすでに北の空

香川県 神保 坊太郎

さまつ採り秋の不満を埋め合わせ
百歳の候文に叱られる
扶養家族になって息子に嫉まれ
相合傘胸の鼓動をつかまれる
青いのがホオヅキ市で見染められ

松山市 丹下 美津子

吟詠朗々谷上山に冴え渡る
ウグイスも慶びあつて伍健句碑
嫉妬する程とても帽子の似合うひと
Eメール声聞きたくて電話する
嫁の肩持つて波風ない同居

松山市 宮尾みのり

長い糸針に通してまだ未熟
布を裁つ女の迷い断つように
風下にいるから五感よく動く
タクアンとキムチ売場で手をつなぎ
美しい別れだなんてフィクション

高知県 赤川菊野

祖国統一金日成の筆の跡
思い出をたどればアリラン チマチョゴリ
駅一つ過ぎればそこは旅の空
童心に返りブランコこいでいる
遠い日の亡母と遊んだ桂浜

北九州市 梅田宣司

独り者時には誘いの欲しい雨
知らぬ歌ばかりになって老いを知る
割り切ってからのお酒に味が無い
老舗にもじり貧という不況風
老いの一徹額に残る皺の数

唐津市 久保正剣

分け前を貰い小さな共犯者
負けるまでは神の国だと信じてた
洗濯石あるが砧が見当らぬ
年金で動ける幅の趣味で生き
失恋も離婚も相手を換えるだけ

唐津市 井上勝視

八百万神も派閥がありそう
死ぬ前の親父の脛に似て来た十
三〇品目三日でやっとな老い一人
一輪の癒やしに和む老いの膳
不況ぐらい俺に戦後の向う傷

唐津市 市丸晴翠

ゆっくりと逝くお隣は空けといて
月へ行く切符を孫に買つてある
変身の部屋でストレス解き放つ
二年後に漬けるらっきょう植えに行く
駆け込んだ警察深い闇の中

唐津市 山門幸夫

蛍狩り地図を抜けて探しけり
遠い日の思い出連れて蛍舞う
鉢巡り楽しそうだよ蝶たちは
巣にかかる落葉に走る蜘蛛おかし
戦争の話に孫の丸い目よ

唐津市 山門タミ

明日画こう思ってる間に竹は伸び
子雀が三羽おねだりつきまとい
バタヤンが歌えば気分いい夫婦
蛍見に左弦の月が追ってくる
きっかけがつかめず夫婦貝になる

旧悪も時効にしての祝酒

唐津市 仁部 四郎

毒舌に媚薬の匂いたったような

投票に行つて疲れが残るとは

エリート汚職が国の名を残す

緩やかに結ぶ家族の個人主義

唐津市 山口 高明

蝶鮫の玉子と知らず食うキャビア

戒名を背中に彫つた暴れ駒

藤棚の下にわたしの好きなひと

矮鶏三羽老いの朝餉に貢献し

ポスターの笑顔が凍るスツパ抜き

唐津市 宗 水笑

起きてから後おっかける病理学

読めずとも批評は楽し書道展

失言のわが家笑つて暮してゐる

マスコミの正義が怖いお偉方

ケイタイの電波で大気汚れてゐる

熊本県 岩 切 康 子

思いやり抜けた発言悲しかり

お人よし後悔忘れまた失意

見栄もあり壁塗り替えて天仰ぐ

じわじわと脚の疼きが歩を制す

目立つ百合袋絵色は冴えなんだ

交差点日曜朝は余裕だな

釣人の竿そのままに頭垂れ

貪欲なウミネコ田んぼに舞い降りる

河川敷ゲートボールが朝をよぶ

十和田市 阿 部 進

義理がたいところが母の取り柄です

もう一度叱つて欲しいおっかさん

何時までも大事にしたい母の味

風通しのいい親子ゆえ喜ばれ

弘前市 須 郷 井 蛙

酒宴から抜けてラーメンの味という

誕生日蟹がちらつく五目めし

厚底を履いてわが娘も波にのる

色メガネ別の世界が見えてくる

弘前市 小 寺 花 峯

散り際を笑えぬ花のさびしさよ

病院へ向かう途中で霊柩車

休む暇などない亀の砂時計

まだ飲める飲める飲めると夢の中
弘前市 高 橋 岳 水

本棚に見果てぬ夢を積んで老い

点晴を欠く自画像を持ち歩く

逆算をすると佗しくなる余生

老人車わが瘦身の抛りどころ

弘前市 一戸ツネ

ははの忌や重い塔婆に風孕む
彼の音は水子地蔵の風ぐるま
西風の雲は紫ははになる
竹とんぼ風の向こうのふるさとへ

弘前市 小枝ふさゑ

思いつきりどろんこ遊びしてごらん
抜いて欲し抜かないで欲しいぬふぐり
リストラで消えてしまったマイホーム
スピードに麻痺してしまう高速道

大宮市 八田敏

わが余生介護のほかの生き甲斐も
健康法色々知って不摂生
大正の生れもびっくり神の国
へボ将棋教えた孫に負け続け

横浜市 小野句多留

アバウトで気楽に生きた共白髪
自閉児に弁当持たす妻の愛
ロボットの手に合わせてる口の位置
文鳥に想う女の頭文字

富山市 酒井輝

過労死にして貰えない席に居る
歩道にも安全地帯欲しい時
贅沢に飽きお握りの旅に出る
カタカナの癖にわからぬ街にする

嫁からの笑い話がある手紙

人ごとのように思っていた六十路

日没を待たず仏間に灯をともし

打ち水へ家族を待っている夕餉

京都市 山海友熙

同居する猫も金魚も夏祭り

ひまわりよ祇園ばやしが聞えるか

ひとり旅続ける亡夫を見失う

大文字亡夫も見ている頃だろう

大阪市 寺井東雲

足の裏見せて一生台なしに

不器用で着る物一切妻まかせ

蛇田町小豆の産地値が上がる

何処へ行く各自行き先ききたいね

大阪市 井上白峰

自分史の虚飾に妻が朱を入れる

誘い球投げて本音を確かめる

限界を悟り縮めた守備範囲

拘りを除けば解ける縛れ糸

大阪市 松尾柳右子

初めての娘の料理です舌鼓

車内まで緑が匂うローカル線

反省をすれば眠れぬ自己嫌悪

兄ちゃんの真似で散髪出来ました

富山市 島ひかる

老人会頷くだけで理解せず

大阪市

安達 はじめ

従いて来い言った私がついていく

炎天の汗を引かせる缶ビール

夏姿男心を掻き立てる

大阪市

鈴木 トヨ子

ほのぼのと淡い口紅喜寿迎え

心からの愛に女はいやされる

こっそりとポツクリ寺へ願かける

一人住み喜怒哀楽を噛みしめる

大阪市

川久保 睦子

あくせくとしていたわりに座り胼胝

幸せは孝行できる老父が居る

ひたすらに生きているから回り道

シヨルターを開けると女こぼれ出る

大阪市

津村 志華子

別れ道女が選ぶ花の道

恋いくつ咲いて萎んだ花時計

新じゃがが届いてポテトサラダの日

病む老母の軽さにそっと詫びている

大阪市

清水 利武

肉野菜輸入に頼る台所

美しい肌を干して夏海

選挙戦党首の顔の揃い踏み

同窓会老いて残留十八人

遠き日の蛍見たさに新幹線

太陽を蹴って素もぐりダイビング

僕の彼女笑いころげの泣き上戸

魔を秘めてきれいな色のトリカブト

池田市

岡本 吉太郎

婦長さん何でも知ってる顔してる

年寄って苦勞隠して生きている

救急車の中でへそくり気にかかる

森さんの勉強ざらいが諸に出る

和泉市

岡井 やすお

大海原やつぱりブルより楽し

孫クロールじいちゃんゆつくりと蛙

剣二段お面一本西瓜割り

後輩に頼むぞと去る甲子園

和泉市

西岡 洛醉

心ブラにファッションを着て老いふたり

老婆の口紅異なもの味なもの

凡人に進歩無い儘雨しとど

イヤリング嬉しく揺れて恋を待つ

交野市

山川 日出子

ハチ公と記念の写真孫と祖母

太陽の塔と両手広げて対話する

忙中閑 植木済まして一人旅

影武者の下書きを読む森首相

河内長野市 植村喜代

病院の帰り花屋で目を洗う

その先へ灯を付けてくれた孫

母の日に二冊目の辞書送られる

古稀過ぎてあの子あの人どうしてる

岸和田市 宮野みつ江

年寄りがここにも訪問介護車よ

キムタクに似た介護士に老母託し

生きてればこそときめきも泣くことも

アバウトに生きる計画して楽し

岸和田市 井伊東吉

鈴蘭がみんなお辞儀をしてくれる

覚えてた漢字増えくる孫便り

政策をそっち除けする選挙戦

永かった団結豊島に拍手する

岸和田市 原苑子

暖かい手と手わざわざ遠まわり

寝そべった老犬貫禄の唸り

着飾ってお見せ出来ない楽屋うち

大藪のさざめき恋し竹細工

堺市 黒田真砂

紫陽花を被写体にして息子に送る

久し振り心ブラ ガングロにはあわず

自然の力時季にはちゃんと花をつけ

軋む戸も帰ればほっとする我が家

堺市 柿花紀美女

父母よりも長生きをして亡父母を恋う

懸命に時流を追って生きている

今日も又つらいニュースの初夏の風

振り向けば不幸ばかりを思い出し

高石市 浅野房子

デッドヒート手に汗握るグービーだ

身辺整理する暇もないスケジュール

ファッションに左右されないいぶし銀

横車押して墓穴を掘っている

高槻市 傍島克治

無理な背伸びで元の背丈に戻らない

お隣も喫煙場所は庭らしい

喉元で葛藤してるイエスノー

論される娘は吐息ばかり吐き

高槻市 井上照子

友見舞う肺ガンよ笑む白い顔

一日を大切に生きねばならぬ雨つづき

ぬいぐるみ抱いても温みあげるだけ

十七歳春など知らずモンベはく(昭和十八年)

大東市 児玉蛙

自己暗示幸せですとかけておく

酒をのみ忘れた事にする男

ブライドを捨て白黒をはっきりと

なぐさめるつもりが私泣いている

豊中市 岸田 知香子

子が育ちチャンス到来異国旅
五十年マンネリ夫婦陽が沈む
小商い定休一日寝てみたい
手塩かけ初成り嬉し貸農園

豊中市 湯浅 馬洗

大原に右京大夫の憂い増え(寂光院本堂全焼)
三十年万博跡は森繁る

入学祝は泰山木を記念樹に
眼を癒す緑もとめて奥津宿

豊中市 松岡 久留美

無事勤め果たした今日のフルムーン
平凡な人と言われて満ち足りる

草木を培う日びに憂い無し
また一人政界の星消えて行き

富田林市 片岡 智恵子

夫婦茶碗いつかは割れる飯を炊く

手を抜くは年取ったこと茶をすする

手のひらに残る火種の懐古談
生きるって辛いと嘆く葱坊主

寝屋川市 平松 かすみ

明治から波乱万丈幕を引く(妹の姑99歳)

旅立ちへ紅さす古希の娘さん

人生の先生でしたありがとうございます

胃腸から働きすぎとSOS

寝屋川市 坂上 高栄

手巻きすし愚痴も巻き込む賑やかさ
ミレニアム嬉し悲しい誕生日
呼び捨てにされて段だん肥える尻
雨宿り知らぬ同士で笑い合い

寝屋川市 酒井 勇太郎

一歳の孫が僕より良いリズム
生きがいがあり過ぎ手帳悲鳴あげ

図書館を老人力が占拠する
パソコンに貴重な時間奪われる

寝屋川市 富山 ルイ子

おたやんのお面の下は泣きつ面

新老人大地へしっかり根を張って

五十肩七十肩と二人して

生命への恐れ忘れた若い人

東大阪市 指宿 千枝子

薫風に命あるもの輝けり

初夏の風天幕ぐらしに優しくて

飼い主に抱かれてペット患者です

血の色で咲いたよ庭に佐渡の百合

枚方市 栗林 光夫

今今今今が一齣ずつ動く

白杖は乳房の高さ梅雨に入る

観音の第八面に見透かさされ

夕刊をたたみ昨日を捨てる朝

枚方市 宮川珠笑

勘で聴き合つて不自由ない夫婦
神の使徒インターホンに断られ
親切と興味の見舞い受け馴れる
絶対安静心の河が逆巻いて

枚方市 二宮山久

コンクール夢は見えたぞ吟の道
梅雨入りに父へのプレゼントアンブレラ
ミレニウム残しつつたえる俺の趣味
引越は海外ですよと若夫婦

枚方市 鈴木政子

中学生コガネ虫より金持ちだ
三食を律義に食べて肥えぬ老い
バチカンも宗教融和に足運び
介護保険家族の絆遠くなる

藤井寺市 中島志洋

蟬時雨聞いていらいら待ちぼうけ
氷柱の前で女の長話
酒煙草止めた男が入院中
大都会光の海にあるドラマ

箕面市 椎江清芳

夜明けには炎え尽きていた蛍籠
友達を小声で帰す子の午睡
ゆつくりと飲む湧水を掌で掬う
死ぬまでは一緒にですと保険証

守口市 井上桂作

本領を発揮しないで政治には
我に似た孫の顔みて鏡観る
君が代を歌ったことのない生徒
新入生茶髪も混じり落ちつかず

八尾市 村上剛治

幸せな答をくれた花の種
緊張の中で響いてくる鼓動
知らぬ間に中が腐っていた日本
点滴がいのちの粒に見えてくる

八尾市 村上ミツ子

ぞうきんが廊下を走るダイエット
腰低うして世の中をまるく生き
どうしよう嫌いな人に慕われる
立ち直る力は娘からもらう

八尾市 長谷川春蘭

袖たたみしてたつ宿の浴衣かな
手花火の束の間過去のみみがえる
亡き父母の声聞こえ来る祭り笛
男雛女雛背中合せに納められ

大阪府 榎山隆盛

潤いがほしいあじさい雨に咲く
温泉や素顔のおんな対おとこ
本流が呑んだ支流の数いくつ
一番にお慕い申す諭吉殿

神戸市 山口 美穂

鏡の中のわたしへ笑っておはようさん

遠い遠い人想い出す枇杷が熟れ

カタカナ語辞書を閉じればもう忘れ

おいしいな羊羹 雨垂れききながら

神戸市 池田 善守

十七歳吾が十七歳を振り返る

白髪を取るよに枯葉つんでやり

遺言を並んで書いた妻 私

自分にもウソをついてる闇の夜

芦屋市 黒田 能子

ミックスジュース目立たぬけれど個々の味

風船と空を飛びたいシャボン玉

クレオパトラの鼻でなかった孫娘

走り書き自分自身の字が読めぬ

尼崎市 的場 十四郎

ど忘れの辻で小犬が先走る

言いたいこと一つ抑えて握手する

少年が風にさからい太刀を振る

大海へ跳ぶ夢すてぬ井の蛙

尼崎市 田辺 鹿太

生活の音だと思ふ大欠伸

生まじめな貴方に赤は似合わない

子の理屈妙に納得してしまう

今世紀中に仕上げる事がある

尼崎市 春城 武庫坊

靴から昭和の話出して逢う

あわててものんびりしても一日だ

夏の陽が母子姉妹にする衣裳

祇園囃子 京は祭りに似合うまち

尼崎市 春城 年代

縁は異なるもの便り北から南から

一病のおかげゆとりを頂いて

花の命と朝を向き合う六月の

雑巾も乾き切ってるつゆ晴間

伊丹市 小熊 江美

輝いて茶髪の孫が旅立ちぬ

焦点を合かし相槌打っている

やさしさが魅力となつて慕われる

十七歳罪の深さを知らなんだ

三田市 北野 哲男

父の日は夜の徘徊ゆるされず

地ビールも国産品は水ばかり

飛行機で砂漠歩きに行つて来た

SLのサーピス汽笛写させる

西宮市 林 はつ絵

むらさきの青味が勝ってくる恐れ

水が澄みホタルお前も嬉しいか

後編を知りたいだけの無責任

縁かなちようどその時電話来る

西宮市 菊池 トミエ

恩師から形見に貰う楽茶碗
竹の子が今年も届く古い縁
身構えてみたが年には勝てません
奈良みやげ柿の葉寿司の味も良し

西宮市 緒方 美津子

守られし松原ありて海の青

捨てる時いい思い出が邪魔をする

祖母の忌日椿油のかぐわしき

ペーパーといわれ馴染まぬ手漉き和紙

奈良市 天正 千梢

無人駅気まぐれにふと降りてみる

尾を振りすぎていらん事かんぐられ

名脇役わさびをすこしきかしすぎ

愛を書くその鉛筆をふとめにし

香芝市 大内 朝子

生きていてよかった情け子がくれる

背伸びしたけれど器はうつわなり

合掌の指をこぼれてゆく荒み

火と水を抱いてひとりの旅つづく

大和高田市 岸 本 豊平次

吾が十七歳予科練の勧誘を逃げていた

譲られた孫のスニーカーで若くゆく

神棚より豪華な仏壇神の国

厚底で軽く歩けぬ暑い夏

和歌山市 垂井 千寿子

あじさいで一呼吸する花便り

ありがとう明日という日の夕焼けへ

老化でも一縷の望み葉漬け

十七歳へ教師一年の孫思う

和歌山市 楠見 章子

あじさいの滴 紅茶に入れてみる

生まれた日は梅雨のまん中だとおもう

ガングロのぼっちゃり型は憎めない

年甲斐があるから馬鹿もそこそこに

和歌山市 細川 稚代

ホームページ淋しい人がたむろする

低く高く人待顔の遊歩道

傘一本さげてホイホイ出て行った

海開き浜は五色のワイパー

和歌山市 榎原 公子

大勢を忘れたような叩きあい

夏には夏の風が渡って来る苦屋

差別された文字うずくまる木下闇

パンに生きワインに余暇を潤され

和歌山市 田中 みね

自由奔放に育った嫁で今日も留守

糠床の用意できたよ茄子 胡瓜

孫娘と腕競い合うブチトマト

姑からも銭別もらう旅靴

和歌山市 池 永 正 匍

石垣も一番上はあぐらかく

古家にはもうペンキ屋も来なくなり

わが事のように嬉しく孫巢立つ

真つ直ぐより少し曲つた自然性

和歌山県 中 後 清 史

幸せの顔覗かせる窓の花

自販機のビールことんと音を買っ

ファッションのブームがはしゃぐ夏の海

落ち込んで入道雲に怒鳴られる

鳥取市 福 田 登 美

美しい流れに石は丸くなる

風呂敷に愛がこぼれる里帰り

金婚の過去は黙して祝賀会

磯笛の遙かに海女の見え隠れ

鳥取市 春 木 圭 一 郎

水いらず盆は親子で麻雀だ

色紙へは水の如しと書くけれど

どうせなら水のしたたるひとがいい

わが夫婦水ももらさぬはずだった

鳥取市 倉 益 一 瑤

育てられているのは親の方らしい

太い杭打って孤独の中にいる

ひょうたん島を探して船の旅に出る

空と海はぎまに浮いている時間

鳥取市 岩 原 喬 水

八起き目の男きれいに角がとれ

ビリビリと育てうちの子あかんたれ

祝宴に下戸は赤飯ばかり食い

たまに来て暴れる孫は叱れない

鳥取市 前 田 一 枝

生き残り死ぬよりつらい思いする

おんぶした孫の手を借り寺参り

梅雨にぬれしよんぼり信号青を待つ

へそくりと金の入れ歯と取りかえる

鳥取市 岸 本 孝 子

世渡りは上手でないが温い手だ

春の服買つて夫と食事会

道草をしようか駅はみえてきた

本当に私を叱るのもわたし

鳥取市 西 村 黙 光

悩みごと酒が魔法を掛けてくれ

ストレスは粹なものだよ縄ノレン

酔っ払い龍宮城の旅へ発つ

酒ぼとり徐々に劣勢取り戻す

鳥取市 山 本 益 子

ボジョレーヌ旬のワインに舌つづみ

嬉しさに字は躍ってるノート持つ

百年の我慢を称う故きんさん

リハーサル警察犬は拗ねている

鳥取市 植田 一 京

白紙には戻らぬ愚痴をまたも言い
とりどりの花に一際百合の白
お茶漬サラサラ午後から会合へ
近づいて見れば鬼にも泣きどころ

鳥取市 富山 檳榔樹

投げ入れの一輪咲かせみ仏に
生きざまを描くならどうせ火が臭う
ちやほやとどうせ甘えた水中花
老骨の凄さはどうせ親譲り

鳥取市 夏目 健 一

戻り来て鮎の難所は鳥の堰
ぼつぼつと渡ろう老いの夢の橋
騒音を波の音へと置きかえる
魂を揺する言葉のない世相

倉吉市 淡路 ゆり子

いづこへと朝日に染まる鷺の群れ
たんぽぽも子孫を残す風を待つ
今朝の妻妥協許さぬ卵割る
散歩道椿一輪簪に

倉吉市 米田 幸子

アイデアを缶から出すと香が失せる
しゃしゃり出るじいばあちゃん
は缶に詰めくつろいで休む広さで事足りる
世知辛い世間の海で溺れそう

倉吉市 最上 和枝

荒れる日も風ぐ日も鏡嘘はない
じやんけんのぐうから貰う運不運
喉自慢予選で零れ落つ無情
朱印帳気ままな旅の跡がある

米子市 鷺見 正子

贅沢をするか京都の豆腐買う
老母が呼ぶそんな気がする夕まぐれ
トンネルの先がチラチラ見えて来た
友が減りサンローランのバッグ買う

米子市 白根 ふみ

身のまわり人に合わせたものばかり
菖蒲の根しみじみしようぶ湯につかる
カモメール成る程メールしたくなる
我が家までの空間にどくだみの白

米子市 永井 三津子

好きだからこそ許せない事がある
母危篤過去を振り撒く刻の音
暗中模索子にはゆつたりゆとり見せ
孫産まれ心の鬼と縁が切れ

米子市 神庭 詩郎

奥出雲神話の古里見て帰る
戦後生れで敗戦の日を知らず
企みが有って黙って爪を切る
一般論などと上手に逃げられる

米子市 中村金祥

単身赴任駅のホームが長過ぎる
満を持す核へ出番の文字はない
十七歳火の手を消せぬ訳がある
有珠の山桜の雨へ火の手消す

鳥取県 権代康女

言うよりは先に写真を見せてやる
一輪のバラに誘惑されそうだ
虹を追う女無口に成ってゆく
目立たずに個性引立つ品選ぶ

鳥取県 羽津川公乃

ウォーキング目を伏せ通る墓地の前
畔草もすつきり流石篤農家
動きだす朝に有線寺の鐘
早起きの苦手な夫は不眠症

鳥取県 乾隆風

都合では夏かぜを引く時もある
火乙女のホタルが窓にやって来た
八月を謳う夾竹桃炎える
カナカナが啼くとせがれの蜃気楼

鳥取県 林露杖

お隣が空家となりて梅雨に入る
鉛筆を削り二時間ただ唸り
七十歳項に宿す艶と哀
人心も国も病んでる五月雨

鳥取県 太田幸枝

一つ角間違えてから運が逃げ
事件起き後で法律見直され
ゴミ仕分け覚えた頃に嫁が来る
趣味の会元気な顔を見るだけで

鳥取県 石谷美恵子

下書きと清書ノートの格を分け
藤の花背きしひとの計が届く
憧れのままで埋めた青い恋
趣味の輪で選る価値観の同じひと

鳥取県 近藤春恵

助けたり助けられたり良い仲間
口笛の合図でピンクの窓があく
じゅんじゅんに歳が私を攻めてくる
お迎えの準備そろそろしておこう

鳥取県 津村八重子

新芽吹くとてもやさしい風だから
間のぬけたあくびいつしか座も白け
窓越しに映る隣家の平和な灯
飛行雲追って一羽のトンビ舞う

鳥取県 黒田くに子

妥協ぐせついて雑魚の群れにいる
手帳から昨日の悔いがこぼれそう
押し花も愛の便りの使者になり
満ち足りたひと日ゆっくり足伸ばす

松江市 安食友子

パソコンで曼陀羅の絵が躍り出る

惚れなおす都政あずかる無報酬

寵愛の移り気を知る抱っこちゃん

ガングロの隠れた洒落があどけない

松江市 佐野木 みえ

名水が溢れて出雲のわさび棚

糸紡ぐ緋の藍の目に青し

城下町堀川下れば六道湖へ

サービスの過剰店員が離れない

出雲市 板垣夢酔

夏猛暑動けぬ石はじつと耐え

終戦日家族元気で世は平和

ザラザラと音はすれども札はなし

草に水やると開花が待ち切れず

出雲市 小白金 房子

牛の目に緑すいこむ牧の朝

掛けごしで呑む一杯の茶はうまい

飾ってもかくせぬ農婦の太い指

上品な言葉で女抗議する

岡山市 矢内 寿恵子

無住寺の庭に箒目立っている

沸々と記憶の中に野火走る

爪に灯が点る昭和の一頁

地獄図がまだ忘れぬ敗戦忌

岡山市 福原悦子

葉ざくらになり人間の列に入る

新婚の照れたころの古日記

玩具箱まだまだ昭和息吹いてる

無から無へ歩きつづけている余生

岡山市 荻野 鮫虎狼

肝心な処で隠れている演技

完璧な迷路を巡る右派と左派

行過ぎて振り返りたい人生譜

少年に残して置きたい唄が無い

香川県 山地 マツエ

友達をだしに言いわけばかりする

迷うてるひまはなかった貧最中

少年の心が渇く飢えている

姿見に古希も女を取り戻す

高知市 北川 竹萌

風呂あがり夕顔の戸を開け放つ

野苺の赤い童心舌にのる

真つ二つ技の努力の西瓜割る

鳩の群迎えてくれる遊園地

唐津市 樋口 輝夫

留守電にしてからテンブラ掲げる妻

触られて慰謝料入った男運

茶柱に候補が頼る明日の運

部屋割りに担任腕の見せ所

この句 この人

橘 高 薫 風

行き交うものあり縦の樹を守る

林 瑞枝

上半句は松尾芭蕉の「奥の細道」や鴨長明の「方丈記」の冒頭に似た無常観である。

縦の樹は、荒介はんが大山に蕨採りに出掛けるのが、例年早春の楽しみであつたことから、その目印になつた樹であろうか。一樹の貫禄が故人の貫禄に繋がる。

男らしい荒介氏の陰でなよなよとした奥さんと思つていたが、巻頭の海に近い故里の句、また、すでに玉野の川柳会に参加の意欲を見ると、夫君と同じ筋金入りの作家に思える。

宙ぶらりんになりそうだから雑草を抜く
私の器もう飲みは溢れない 園山多賀子

これらの二句も卒寿に近く夫君を亡くされた実体験から生まれた句だ。私はこの欄には二度の登場をして貰わぬつもりでいたが方針を替えた。肉体は雑草にすがりついておられるのに句には力がある。年と関係なしだ。

凡例にしたがいながら種を播く

青戸 田鶴

種袋の指示通りに種を播く。それだけの内容だけれど、味もしゃりもない言葉を使つた裏に、絢爛とした開花時の夢を蔵している。さり気なく詠み流して味のある句。

きやらばくの本尊八木千代さんを盛り立てる四天王の一人と私は思っている

老婆の口紅異なものの味なもの

西岡 洛酔

川柳のたのしさはこのような句に接した時である。女は化粧に執心するものだが、それでもない大雑把な人もいる。まして年取つてからは美への関心も薄れる。ところがある日異なことをと、思わせられ、まんざらでもないと感じたと言うのだから、女性の化粧は常に男を誤らせるものか。

大阪交通局で市電の運転手を四十年、後に地下鉄、ニュートラムに変わるが、如何にも勤厳実直なお人柄である。

藤棚の下にわたしの好きなひと 山口 高明

満開の藤の花の下に好きなひとがいる。一幅の絵だ。女性が立っているか腰かけている

か、それは藤の房の長さからポーズも決まる。

作者は元漁連に勤められ、海の男との取引で鍛えた重厚なたたずまいの持ち主だ。六十過ぎか。唐津おくんちが棲んでいる。

お子さまランチの旗には向かう敵がない

長浜 澄子

この句には驚いた。と言うのは、私は時折孫たちを思い出してお子様ランチを注文するからだ。そこで「旗のないお子様ランチなんて」とつぶやく場合も出来る。

父の天職を継ぐ一人娘の成長に母娘一体の感あり。いかにもよく笑うのは、お子さまランチの旗に吹く風のムードか。

内申書に十把ひとからげの少年

原 みさを

激しい競争の世界では生徒も大変、先生も大変だ。同じ大変でも蒙る大きさは無論のこと生徒の方で、先生のあり方では十七歳になつて切れることになる。家庭環境も肝心であるが、「じゅっばひとからげ」の対応ではと思えないこともない。現代はどの領域においても、一部エリートのものとの感が深いのが、来世紀にはその差が広がるばかりだろう。

作者は川柳塔おとりのお世話役、幅広く農作業に従事されている質実剛健の男性である。私は島根の森茂美氏とよく間違える。

自選集

月原宵明

ふるさとの林の中で仮面脱ぐ
平凡と言う幸せが解らない
殺虫剤の瓶とは知らず蠅休む
借金が背負い切れない門構え
大腸ファイバー敵を求めて奥深く（入院）

二 宗吟平

藤の棚トンネルとなり花見酒
吟詠の差す手引く手の口を練り
心経を唱え座が湧く縁日
富士山に毎日登る額を掛け
渡り鳥帰りましたと頭上舞い

黒川紫香

ネクタイをしない社長は話よい
もうお歳でんなど医者も笑いつつ
外濠内濠お辞儀して見る船はみどり（松江にて）
宍道湖七珍モグモグ話途切れ勝ち
宍道湖の夕陽を賞めている車中

工藤吟笑

散り際を知らぬ造花が褪せてゆく
一期一会今日の命の重さ知る
一堂に拍手が湧いて幕が開く
戦地への妻の便りを持ち続け（大戦回顧）
排気ガス街路樹怖い貌をする

正本水客

誤字脱字気にせぬ人になりはてる
言わぬが花と言う言葉を君しるや
腹の虫おさえてかえる雪の道
冗談ですませぬ事とメモをする
蜘蛛の巣がおんなじとこにあるあんど

弘津柳慶

老人の欲へ詐欺師の甘い口
下級生を暴殺痛ましい世相
確実に春を若芽が告げて来る
退職のそれから妻の意のままに
課長のカラオケ御世辞のアンコール

田口虹汀

卒寿の峠越したが冥土まだ見えぬ
忙しくて残務整理の余暇がない
自選集に荒介さんの貌がない
閻魔の庁もエスカレーター有ればいい
四代に仕え歴史は雲の上

西田柳宏子

二度と来ぬ今日一日をウカウカと
深い訳知らず出しゃばり掻き回し
警察も親も先生も信じぬ子
老母に書く手紙昔の仮名遣い
故郷は無人駅にも四季の花

小西雄々

ダイや婚までは希望の灯をともし
農道の舗装をしても過疎つづく
出直しの錆を落しに北へ行く
不本意な道を求める土踏まず
北に嫁ぐ切り取り線は何時離す

野田素身郎

墓地墓石整えお迎え待つばかり
よう敗ける今夜も敗けたタイガース
思い出の隅にいた娘が夢に出る
事故か事件かいずれにしても人が死に
いんきんたむし水虫だけが居ついでる

阿萬萬的

ひと花も咲かず辿った曲り道
高過ぎる希望へ声が届かない
僕の過去を保護する仮面捨てられず
妥協して寒さが沁みる夜の道帰る
鵜呑みしたばかりに肩が凝る羽目に

藤井明朗

二十一世紀へ夢も希望も描いている
子のおもちゃの中にナイフ光ってる
揃わない皿をならべて子は育ち
嫁にゆずって若さへ戻る趣味
十代の孫がいて気苦労する祖父母

八木千代

地蔵札

木漏れ日の中から剝落の地蔵
首欠けた地蔵ばかりが群れている
一体は不審顔した六地藏
肝臓あたりに札を貼らせてくださいな
四婆の鈍にくすくす六地藏

榎本吐来

おや消えた古稀のデスクの独り言
啖阿切る男揉み手も持っている
猫も杓子も正論を吐く選挙戦
「神の国」衆院選に火をつける
俺が先私我先と揉む末路

小林由多香

味噌汁の香り家族の顔そろつ
まな板の音も変つた新年度
久々の上京に服誂える
収穫はなくても心地よい疲れ
欠点は飲んだら絡むくせがある

波多野五楽庵

四十九日誤解の中で溺れたり
流水の上であなたと眠りたし
遠花火考えあぐるのはよそう
朱の腕に情けがたまる悲がたまる
老愁の真つ只中の浮世かな

堀端三男

世相反映この夏浴衣見直され
プライドを捨てたか腰が低くなり
とばっちりが来そうトイレに避難する
酒臭い息でぶつぶつ終電車
梅雨晴れ間老いには老いの約束が

斉藤 晶

一隅を照らし続けたベンの味
母の日の母画用紙に真つ盛り
天地有情やっぱり花は散るのなり
縄文の指紋も出土ミレニアム
霧の湖に見とれて我を見失い

石川 汎流洞

一抜け二抜け おいてけばりの花筏
美辞麗句視界良好裏が見え

明治大正 死語にはならぬ神の国
中途半端嫌い耳は貸さない腹八分
乙種合格まだ死にそうにない八十路

宮口 笛生

うまい寿司だったで老妻へ買うて来る
花替えて御先祖様の墓護る
元気な酒のお陰と言うて呑み
盗人酒時々妻に見つけられ
丹精の花で玄関飾られる

木村 あきら

この笑顔祭壇用に撮つて置く
鯛よりもサンマの似合う暮らし向き
自己過信道で小石に蹴躓く
ササヤカな残り火燃やす傘寿かな
B面に俺の歴史の貌がある

土橋 螢

健康で食欲があり ありがとつ
七十歳過ぎたお方はこちらです
接点を探し求めているふたり
海ゆかば鯨が浮いたり沈んだり
昨日から窓にとまっている螢

野村太茂津

座布団に老眼鏡が置いてある
濡れ落ち葉乾く八月風招く
気が付けば校正の目で読み終わる
八月忌結界を出た僧の汗
鞭はもう手放そう気が減入る

川島諷云児

人嫌い冷たい世間に背を向けて
時として言葉の綾にけつまずく
心眼を開くと見える風の彩
馬鹿になることも利口に生きる術
つまらない事に苛立つ腹の虫

田辺灸六

きやらばくの案内役がもう居ない
江戸前の気っ風閻魔に裁かれる
訃報聞く度にお次は俺かいな
梅雨冷えの吉備路に鷺の貌がない
娘を盗られ自棄で奢った男親

舟木与根一

またしても上げ底を買い旅終る
減反がつづく老残物語
芸の無いベツトは悲し食うて寝る
語りべとなった上等兵の夏
適齢期になれば男も飯を炊く

藤村 女

日本に四季あり氏神夏祭り
ふるさとの祭氏子として帰省
大和路の民話へ映えている夕陽
手帖一つ旅の思い出書き貯める
混浴へ男性一人がちぢこまり

両川 洋々

最後まで舞うぞ私の落日よ
葉桜の下で静かに逝きたいな
蓮の座で俺が天の句ひねろうか
悪魔ともペアーで踊るかも知れぬ
もつれ糸解けたぞ晴れの日は近い

芳地 狸村

ウルムチの街におどろく近代化
ニイハオとはほ笑みかわす太極拳
碧色の池面きれいな景勝地
楼蘭のミイラ生きてる博物館
岩肌の荒さが凄い天山越え

西村 早苗

菖蒲ほか束ねてポイと屋根に投げ
笹巻の笹取り今年も雨にありました
沈黙も会話もふたり花時計
ミニトマト好きとか摘まず待つてやる
あんま機に身をまかせてる疲れてる

金井文秋

介護の要らぬ体がうれし長寿国
言動は癡だが魅力ある美人
せつかに掛けた毘だが乗って来ぬ
大空へ飛ぶ野心など蚊は持たぬ
贅沢な虫だな新芽ばかり食う

越智一水

永生きへああありがたや豆ごはん
障子張り替えて笑いの声がもれ
よろこびを分け合う花が美しい
風の中自分が自分見つけ出し
虫けらのように扱い首を切り

遠山可住

野の花の素顔に初夏を嫉妬する
長生きをしたね山椒炊きながら
始発から眉 口紅と出来て降り
行き先は青春切符だけが知る
十七歳いま日本が危いぞ

恒松町紅

爽やかな街厚底とキャミソール
風止んでチャイム鳴らした話好き
空嚔が溜まる元気のいい証拠
受付は笑顔予想を上回る
健康という生きものを飼っている

板尾岳人

東京で戦争ごっこして来ます
戦争が八月十五日済みました
鳩尾の中の年輪太からず
日の丸が好きで戦争ごっこしています
好きなひといるので森で遊びます

玉置重人

建白書男の眉は涼しかり
時刻表魚のうまい町がある
万歩計大阪城は花ざかり
電話ベル妻にともだちたんという
スマイルが大事私の守備範囲

河内天笑

流行歌といっしょに記憶たぐりよせ
何かするたんびにへマをやっている
はてどこへ仕舞たんやろか免許証
やんわりと私を縛る女郎蜘蛛
守備範囲広い女房に任せきり

橘高薫風

目を据えて目の定まらぬ敗戦日
羅漢さんには撫子を摘んできた
今日の暑も涼も天神祭りかな
象までもこまつしゃくれてきた童話
目に見えぬ指にもエンゲージリング

前号のこの欄の執筆者、藤村亜鈍氏の実姉の嫁ぎ先、船場の羅沙問屋に大坂形水さんは丁稚奉公をして、今、OSKという紳士服の製造販売で大を成しておられる。

谷町は丁稚車につらい坂 形水氏は商売柄若者に理解があつて、早くから私をおだて、

「薫風さんは路郎先生を追い越して頑張っているのは、えらいもんや」

「私の小さいことばかりして、せわしながつてただけです」

と恥ずかしい答をしたものだが、川柳塔主幹ともなれば大仕事であること、年を取るとだんだん消化しきれなくなることを自覚したので、一度この一ヶ月間を振り返って見た。

呼吸不全の再検査と治療の三十六日間を終えて退院したのは五月三十日であった。

◇31日NHKリンクウ教室（13時—15時）、

◇6月1日NHK梅田教室（10時—12時）、

◇2日川柳塔常任理事会（1時から）ホテルアウィーナ、◇3日産経学園梅田（10時—12

時）、南海電鉄サウスウエーブ柳壇整理完了。

◇4日ライオンズ柳壇（12時—16時）於難波神社、話「アリンズ国について」（これは調べる時がたのしい）◇6日家に居て川柳塔誌

への文章と、角川春樹事務所からの依頼の原稿「芭蕉の一句の現代的鑑賞」（俳句現代

8月号掲載）を執筆。◇7日NHKリンクウ教室、夜は本社6月例会（ホテルアウィーナ）

散会後、編集仲間と乾杯交歓。◇8日土佐市の海地大破さんと寺尾俊平居へ、仏壇に合掌と墓参、岡山国際ホテル泊り。◇9日林荒介

さんの墓と仏壇に合掌のため米子へ。（戒名を彫るため寺の墓石は石屋に移しあり、石なき墓に礼拝はじめて）仏壇のたたずまいま

だなまなまし。◇11日全日本川柳協会の総会と川柳大会へ。日本青年会館は雨の中七百六十名の出席、第二次選者の役目。黒川紫香さ

ん高齢者表彰を受けらる。次女幸も参加。散会後、板尾岳人、板尾創路夫妻、幸と私の五人帝国ホテルで会食、帰阪。◇12日病院診察

日。◇13日山陽新聞柳壇の選はじめる。

◇14日藤川一馬氏の葬儀に参列（倉敷市へ）

◇15日NHK梅田教室、午後永沢寺への吟行あるも予定変更して榎本蔭児氏葬儀に参列。

◇16日山陽新聞柳壇選評草稿発送。朝日なにお柳壇の選。◇17日出雲行き、松江到着後、

観光、紙すき場、荒神古遺跡大賀連見事也。島根ワイナリー。前夜祭あり参加者に好評。

◇18日川柳会75周年記念大会は百八十八名を越す（於出雲ロイヤルホテル）。◇19日

キリスト教月刊誌「声」、大阪都市協会発行『大阪人』、大阪府警発行『なにわ』誌の各

川柳欄を執筆。◇20日松坂屋文化教室、高杉鬼遊さんの代講。朝日なにお柳壇選評終了。

◇21日NHKリンクウ教室。◇22日毎日文化センター教室（10時—12時）川柳塔同人の選にとりかかる。◇24日横浜へ。あおは川柳会

前夜祭（於ホテル青葉台フォーラム）。◇25日あおは川柳会5周年記念句会、参加者九十名。

◇26日朝日カルチャーセンター教室（10時—12時）、寺尾俊平句集の選と序文、事情あつて先行の依頼。川柳塔の選を後にして鋭意集

中する。疲労困憊。◇27日葉文館倒産の報、悲し。28日俊平句集の選終了、大野風太郎氏

に送る。29日NHK梅田教室のあと大阪人クラブ役員会。30日西村梨里さんと尾道へ。市

の西岡文化振興課長はか五名の方にあつて。

川柳太平記 (267)

川柳の群像

伊藤 定子

東野 大八

「平城の会の皆さんが師と仰ぐ伊藤勢火さんと定子さんは、人も羨むおしどり夫婦で、川柳については定子さんの方が少し先輩と聞いているが、そこは賢夫人のこと、夫を立てることは忘れなかったようである。

勢火氏が定年退職して奈良に落ちついて川柳平城の会(昭42・5創立)を設立してから活動は夫婦共有のものであったような気がしている。わっか吟社の雑詠欄を担当してもらい、指導を受けたことは職場川柳からの脱皮が出来たと思うし、勢火氏死去の後は定子さんが担当して頂いたことは忘れることはできない。(中略)勢火氏を失ってからの立ち直った定子作品には目を見張るものがあった。これが女性本能かと注目したものであった。」以下略——「ふあつすと」黒沢かがし

勢火さんといえば、定子さんと共に大陸川柳同窓会(昭40・4創立)の育成には、心からの支援をうけたことは今だに忘れない。

「その片手は戦争ですか。戦争はイヤですね、二度と起してはいけません」

と定子さんがしみじみと私に述懐された日のことは今だに忘れない。そして

新妻も両手の夫に抱かれてる夢 定子
という句箋を頂いたことは望外の感激であつたし、勢火さんもその頃はお元気で

「何でも申しつけて下さい」

と心からの新大陸派の台頭に期待されているようで、その集りには献身的だったことだ。

定子さんは大正7年8月1日神戸生れで、昭和10年三越百貨店の支店で森夏生が創立した波止場川柳会に参加。この会の育成に熱心

だった山本麦一(芳伸)らや鈴木九葉(ふあうすと吟社幹部)の直接指導を受けた。

この頃勢火氏を識り結婚。川柳平城の会創立に当り、勢火氏と共に所属吟社の別なく、川柳人と識れば献身的な指導を惜しまなかった。昭和43年3月夫婦句集『途上』の刊行。

昭和52年10月句集『平城』を夫君勢火氏も加勢されて定子抄を刊行。昭和43年1月『女流コーナー』をふ誌に新設の際リーダー選者と活躍。その間「ふあつすと賞」を受賞、理事となり、ふあうすと運営委員として刮目すべき協力ふりを發揮。特に『全国川柳作家年鑑』には力を入れた。

筆者の親友大井正夫や増井不二也の三人を「三人のサムライ」と呼称したのもたしか定子さんだったように思うが、その代り、伊藤定子、金沢伸子、土岐貞子をふあうすと女流三羽鳥と呼称したのは大井正夫だった。三越百貨店の幹部で川柳リーダーだった鈴木九葉が相好をくずして「けだし適言……」とたいこ判を押した懐かしい一コマもあったわけだが定子さんはどちらかといえば山本芳伸の放埒な句流がお気に入りであつたらしい。

勢火、定子夫妻にもいろいろな事件があつたらしく、お子さんの死は一方ならぬものがあつたらしい。

水仙の白さひとしお長子の死 定子
逝った人美化する月日捨てられず 〃

などの名前は、今も筆者の記憶に新しいのである。

「山形市の東方にある金山松の千歳山に、うつつらと白雪が被り一幅の墨絵に見立てていただいたのは十一月のわっか大会のときであった。選者としてお招きした当時のふあうすと川柳社主幹去来川巨城氏にお伴された定子さんと前川千津子さんであった。

大会が終って駅前の鉄道クラブに宿泊して川柳談義に花を咲かせた思い出が走馬燈のように浮かんでくる。天王寺での鉄川大会の帰途に、奈良に立ち寄って勢火氏の仏前で平城のみなさんと語り合ったのが定子さんとお会した最後であったような気がしている。」
(黒沢かかし、前記悼文のつづき)

ふあうすと社の女性作家の貌として、同社を引っぱってゆく親しみ易い彼女の相貌は、黒沢かかし氏独りだけの想いではあるまい。亡き勢火氏も男らしい寡黙なお人柄だったことを思い、この稿を認めながらつい涙する筆者である。

平成11年12月13日没。本誓院釈慈恵、享年82。

「わたしね、いい歳をして七十の貌で初め

て源氏物語を読みはじめたの、大器晩成のくちなな、フゝゝ」

とふくみ笑いた定子さんの面影を追いつながら、つい、すると光源氏は夫君の勢火氏のことじゃあないのか、といいかけてこちらはそしらぬ顔をきめこんだものだが、突如として少女趣味的発言をして愕かせるのがこの人の得手のようであった。

定子さんの句柄はみんなキチンとしているのだが

風さえも傷夷の箱をなでていく 定子
の昭和27年頃のお作は、まぎれもなく筆者との対話のあとに作られたものと推定しているのだが、その頃横行した列車内の白衣の献金ばやりにも、定子さんはキチンと小銭の喜捨を忘れなかったそうである。それが筆者への心やりとわかるたびについて熱い臉にしてしまふ当方であった。

終りに『ふあうすと』二月号掲載の伊藤定子句抄を沢山並べて、定子ご夫妻への供養としたい。

米櫃に米あり夫に逆らわず

晩に起きる勤めを夫も子も

わら灰を作るひとときのぬくみ

日焼止めぬる愚かさに馴れはじめ

静かなる冬のひと日を嫁に書く
なまぬるい水ふるさとのない身にも

映画見て枯葉のごとき夫婦像
夏へ向く日向の中の乳母車

新聞をひろげ読む刻夫は去れ

りんごの花夜目にも白く村を去る
本を買ふ本屋の冬があなたかし

灯を消して故郷の蚊帳の匂うこと
一冊を読み終え深い空の色

野鳥の名一つおぼえの森となる
余寒まで墓の後ろを撫でてみる

思い出は不意納豆の糸とくる
相聞歌のひとつぐらいいはわが胸に

真夜中に戸を叩くほど燃えはせぬ
文学碑心おきなく蟬が啼く

道ばたの菜の花みんな忙しい
少うしは光るどんぐりの中に居て

肚立てることもなければあるがまま
盆供養ひとりの夜を彩りぬ

年寄りのさびしさ知らぬ介護聞く
夫婦とはおでんに似たり笑えてき

耳鳴りのきこえるしじま夜がくる
新緑にわが手をすかすハイキング

▼次号は「奥谷 弘朗」

誹風柳多留二四篇研究 20

橋本秀信・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾

清 博美・佐藤要人

142 三囲で気のそれたのを付けのぼせ

橋本 気がそれるは、気持ちちが他方に向かう。
よそ事を考える。つけのぼせは、江戸時代商家で雇用人を解雇して上方へ帰すこと。(以上『日国』)

かこつけの三囲稲荷参詣も終わり、さあ吉原へという段になったが、行く気のない人間は、つけのぼせのように帰してしまふ。三囲稲荷は越後屋の信仰が篤かったので、その縁語として「つけのぼせ」を持ってきた。『川柳吉原志』には、「越後屋の番頭」とあるが、特に擬する必要があると思ふ。

三めぐりで日くらしのなくい、時分

つけのぼせ母はにくさとなつかしさ四?

一七二〇

後の月吉原で見るつけ登せ
長局中でをしがるつけのぼせ

第四二二

露丸詳明四・八・28

伊吹 三囲稲荷の参詣もそこそこにして、吉原へ行つてしまつた番頭・手代を越後屋が解雇して上方へ帰した、と素直に解してしまふが……。

小栗 同。吉原へ行く気がない方が真当で、行く方が「気のそれた」奴なのだと思ふ。

清 同。三囲だから越後屋でなければならぬ。『川柳吉原志』の短註可。

佐藤 同。

143 い、取組だがふしやうに天気なり

橋本 取組は相撲の取組。両国回向院ほかの

勸進相撲。不定は一定しない。定まらない。当てにならない。不詳は、②運の悪いこと。不運。(以上『日国』)の二通りが考えられる。前者を取ったが、『川柳江戸砂子』などは後者の字を当てている。

調べたところ、相撲興行は春(三月)冬(十月)、深川八幡と回向院で行われており、晴天八日が十日になったのは、諸説あるが、

近年は二日裸に余計なり

寛元柳1

十日の雨にこまるのは大男

寛元整1

の句があるので、『平日閑話』の安永七年(二七〇)三月廿八日、深川八幡社にて相撲興行、晴天十日。今迄は晴天八日なりしに、十日と定るは是れを始とす」とあるのが、定説のようだ(『武江年表』その他にも同様の記述あり)。とすると、主題句の出典は、天六(二七〇)梅1であるので、十日になつてからの句と考える。「興行は以前より江戸中番付を商ひ、また興行の前日毎に太鼓を廻す」(『東都歳事記』)句意は、手元の取組表によると、今日は好取組が並んでいるが、天気が怪しいので中止になりそうだ。(後者なら、あいにくの天気で中止になった、となる)

そもく相撲のはしめより降そつ 拾九7
御免のかうむつてまづいそらにする

天五義1

江戸中へ太鼓で雨をふれ歩行 田草一八

青空を見つけてたいこかつぎ出し 一六九

清・佐藤 賛。

144 生酔をいつそけいはくして寐かし

橋本 けいはく(輕薄)するは、相手の機嫌

をとるような言動をすること。お世辞。追従。

おべつか。(日国)とかく酔つ払いは始末に

負えぬもの。ぐでんぐでんになってからんで

くるような酔つばらいは、なまじ注意するよ

り相手をおだて上げ、いい気持ちにさせて寝

かせるのがいちばん。

生酔に安イ分別かしてやり 二九

生酔をおかしい内にかへすなり 九五

ごまめうり猫に一正けいはくし 二三五

万歳ハみなけいはくにふしをつけ 五三六

清・佐藤 賛。

145 おいしいもの、ふをひやそうめんにする

橋本 片桐は豊臣秀吉の遺臣、片桐市正且元。

秀吉没後、方広寺の鐘銘事件以来、大坂方と

関東方の和議を図ったが、淀君の猜疑心と大

野治長等の奸策に陥られ、病と称して大坂城

を退き、居城茨木に籠った。(川柳大辞典)

冷や素麺にするは、素麺を冷やして食べるこ

と。この成語は見つからないが、且元を冷遇

したことを指すと思われる。『和漢三才図会』

「素麺」に「和州三輪古より名物と雖も佳な

らず、摂州大坂最も多く之を造る」とある。

その産地が茨木。

この句、初め解らなかつたが、『史伝』十

八に「素麺は茨木の名産」とあり、片桐且元

の関連句が例示されており、納得。前記の語

釈はそれによる解。

あたら惜しい忠臣を、茨木に冷遇してしま

ったという句意。

ちつきよしてそうめん斗喰て居ル 一五三七

まんちうハくわすそうめん喰て居る 一七一五

粕谷 普通は「冷飯を喰う」といいますが、

茨木の素麺に掛けて洒落たのでしょう。

小栗 塩井梅仙『拾遺詳解』では、布引の滝

の難波六郎経俊の句とするが、片桐市正のほ

うがよさそうである。

清・佐藤 同。

146 うれいでもい、とちう三ぬかすつら

橋本 張見世に座っている昼三女郎は、「売

れなくてもいいよ」と言いたげな顔で、「お高

くとまってやがらあ」と素見野郎の印象。

無イものハ金ちうさんかうれのこり 一六二

ちう三ンはかうの座に居てうれのこり 一九二

清・佐藤 賛。

147 うぬばれをやめれば外に惚てなし

橋本 自分でいい男だと思っている男。そつ

思っているのはご本人だけで、その自惚れを

取つてしまえば、誰も相手にしないけちな野

郎だ。

うぬばれでかく日ツに刺る地紙つり 八二四

うぬ惚は三度我身を省ル 五二三

粕谷 賛。男女どちらともとれる。

山田 自惚は文字通り自分に惚れることで、

その自分が惚れることを止めてしまえば、他

に誰も惚手が居ない、といった言葉遊びの句

と見たが……。

伊吹 礎賛。素直に解していいと思ふ。粕谷

兄同様、男女どちらでもいいように思ふ。

清 「うぬばれ」などという語を使うのは男

であろう。

佐藤 賛。

秀句鑑賞

同人吟 河内 月子

17月号から

リズムよく、日常語で、そして如何にやさしく一句を表現して居られるか。

そんな作風にいつも魅せられて川柳をたのしんでいる私です。その意味では元気をくれる作品、たのしくさせてくれる作品、くったくのない作品はとも好きな川柳です。

そういう作品とお喋りしながらいくつかを選ばせていただきました。

新茶の香癒しの時間くれました

山本 希久子

世の中の動きがやたらスピードアップしてきて私にはついて行けないことがいっぱい。

パソコンも英語教育も小学校から始めるところもあるとか。急激な変化で心を病んでる人も増えてきて、それでこのごろ癒しという言葉をよく聞くんだね。アロマテラピーと言うので、コーヒーの香もいいけどやっぱりお茶の香が落ちつきます。それも新茶、時間を止めてゆっくりと羊羹をいただきますながら。

まなうらに煙く故郷の青い海

村上 剛治

そういえばもう長いこと海を見ていません。平成四年にハワイアン仲間とワイキキの浜でちやぶちやぶしましたが、日焼け止めクリームなどで海水が汚れていたのを思い出します。鳥取の海も山口の海もわたしの幼児体験の海は、いつも剛治さんの海のように煌いていました。

巣立つ子へ育てられたは母の方

宮尾 みのり

私の場合もまさにその通りで、ずいぶん子供達から教わることの多かったことを思い出しています。忍耐力を培ってくれたのは子供たちでした。感謝、感謝。

目が覚めてオヤ生きている生きている

高瀬 霜石

明日の目覚めがすこやかであるという事に何の保証もない人間たち。それなのに明日は五時半起床だ、なんて勝手に決めてるのも滑稽と言えは滑稽。でも目が覚めて「オヤ生きている」などと、感じとるのは生に最大の感謝をしているあらわれのような新鮮さを感じ

ます。

寝る時は涅槃像より丸くなり

玉置 英子

左を下側にした涅槃像。両脚をすらりと伸ばされた寝姿は美しい。それよりも心持ち体を丸められた作者は涅槃像と自らをくらべられているところが面白い。このスタイル私も子供の頃から愛用の形で。

何分にも素人できて柏餅

田中 みね

お孫さんの初節句なんでしょう。久しぶりに腕をふるったおばあちゃん。来客や、ご近所に、手づくりの柏餅をふるまううれしそうな姿が目につく。何でも売っているこのごろですが、やはり大ききの微妙に違う手づくりの味は有難い。

銀行へ行くとき一寸着替える

山本 正光

何でもない日常を詠むことをモットーにしてる私。

この作品に出会ってとても共感致しました。作品からは作者の生活の姿勢がうかがえるし、やはり同世代の女性として見習わなければと思います。

ヒザの破れたジーンズの若者は若者としてそれなりに美しいですが。

完全に灰汁が抜けてはいない喜寿

久保正剣

灰汁の抜け切っていない自分をあたかも喜んで居られるように私は受け止める。「まだ若いものにや負けへんで」とも言いたげな正剣さんがこの句に居られる。いつまでも灰汁よ抜けないで。

対称的に「句いまで抜けた女と差し向い」という菊澤小松園先生の句を思い出しました。寄せ植えのひとつがそつぽ向きながら

細川稚代

「添わしても根じめの花はあっち向き」

これは西出一栄さんの作品です。寄せ植えと活け花の違いこそあれ、川柳作家の目は同じところを見ていた。

ガーデニングが大変なブームの昨今、私も平和な世を享受しながら、友達にいただいた「イエライシヤン」と「月下美人」をだいに育てています。

節約を楽しんでいる割烹着

鷺見正子

何か目的をもって節約をプラス思考に切りかえているあたり、アタマのいい主婦像が浮かびます。

目的があるから節約してもストレスを溜めないのがミソ。何でも楽しみに切り替える

技術は修練のたまものでしょう。

ケイタイで二階へ御飯知らされる

宮川珠笑

ここまで世の中もかわってきたなと改めて知らされた作品です。二階でテレビゲームでもしていたら、相当に怒鳴っても聞こえないでしょう。家族全員ケイタイをお持ちの家庭もザラにあるそうで「こはんですよ」も電波があつちこつち行つて帰つて二階でキャッチするという塩梅です。

夫婦喧嘩もケイタイではじいたら。
人生のおまけ楽しむ喜寿傘寿

門谷たず子

「余命」と言わずに「おまけ」とされたところに感動。このおまけ気分で楽しめば米寿も卒寿もなんのその。藤村メ女さんは横浜青葉五周年の宴で、主人にダンスを申し込まれ一曲を見事に踊られたそうです。メ女さんは来年卒寿になられます。日川協二〇〇年東京大会では、黒川紫香先生が長寿の表彰を受けられましたことはご承知の通りです。おまけのくらしがなんばでも続きますように。

ホーホケキヨ今朝も窓から富士仰ぐ

渥美弧秀

あこがれのくらしのかたち、ウラヤマシイパンが焼けてコーヒーが入つて、サラダもス

克蘭ブルエッグもおいしそうにテーブルに、大きなガラス窓全面に富士山。おまけにホーホケキヨ。あんまり出来すぎやないですか、この作者ピアノの先生、このお部屋でいっぺん聴かせてほしいものです。

保津川も嵯峨野も宅の庭先よ

井上森生

恵まれたお方のたくさん居られること。嵯峨野が庭先とはなんと贅沢な風景でしょう。空気も水も美味しくて言うことなし。こんな自慢はなんとなく許せます。憧れです。よく食べてよく眠るから大丈夫

木村富美子

眠るにも体力が必要。そのためにはよく食べないとね。遠くに住んで居られる子供達へのメールの一部でしょうか。省略の効いた元気な作品です。

岡本太郎の鯉幟なら揚げたいな

結城君子

芸術は爆発だ。疲れを知らない子供のように八十歳を過ぎてからも素晴らしい作品を次つぎに製作された。

芸術家の元気を少しでも見習いたいものです。岡本太郎の鯉幟、どこかで売つてるといいですね。探してみようかな。わたしも来年は鯉幟を買うことになりそうです。

水煙抄

河内天笑選

大阪市 亀井 円女

最高と言わせて奏む法の華

どん底から這い上がるのは先ず女

雨の夜はバティーページをしんみりと

もう八十まだ八十と揺れている

嫁や娘に温いりモコンされている

河内長野市 大西 文次

楽隠居言われる程に楽でない

どっこいしょこらしょ九十の剣が峰

土砂降りが相合傘を叩きつけ

結び目がおかしくなった倦怠期

鼓笛隊衣裳の方がよく揃い

横浜市 北沢 街湖

皮下脂肪つまんで誓うダイエツト

厚化粧壊れぬように笑ってる

おしやれ靴待ってはくれぬ発車ベル

遅刻した事は許そう顔の汗

野良犬の振った尻尾に情が湧き

出雲市 青山 久子

寝て起きて六畳ひと間パラダイス

神様の一喝ほしいことばかり

きれる子の親を育てたのはわたし

八十の友がいまでも駄々をこね

王様になりたい人を持てあます

出雲市 城多 喜

野地蔵の耳のお掃除してあげる

なんだって雷様は大嫌い

愚痴なんか言うまい口が可哀そう

幸せのポーズなかなか肩がこる

カーテンを替えて心を浮き立たす

堺市 和田 つづや

メロンより真桑の方がうちらしい

言い訳をすると訛が強くなる

こぶし咲きまた傷心を撫でられる

川の瀬を二人サングルぶら下げて

不況戦士に少々の羽目許されよ

鳥取市 有 沢 せつ子

大阪市 中 澤 伽 羅

乗り換えた職場は硬い椅子だった

家中の電子音には世話になる

開店の花輪に歩道占拠され

無駄遣い直してくれた不況風

夕立が止めば蛙が騒ぎ出す

堺市 梶 本 哲 平

蛞蝓よおまえに生命ある憐れ

靴の下プチッと果てる根切虫

シンビ根分けえいやと気合いかけている

夏の日よサウナも遠くなりにつけ

無理すまいすまい言いつつきりをつけ

島根県 菅 田 かつ子

小窓からあら見てたのねお月さん

粽巻く殆ど人に上げたくて

菜園へ無断で杉菜手を広げ

熟年のコンパへ今朝はうす化粧

飼い犬の散歩へ野犬ストーカー

鳥取市 録 沢 風 花

不祥事のお仕置き少し緩すぎる

一万歩雲雀の声を道連れに

歯科眼科診察券が忙しい

膏薬をいっぱい貼って虹を追う

魂胆があるにつこりが見抜けない

寝ころんでいい考えは浮かばない

ママを画くいつもピンクの服着せて

コーラスのお揃いではなく赤い靴

お掃除が楽しくなった初夏の風

大口の保険かけられ不眠症

鳥取市 田 賀 八千代

ふる里と同じ色した風捜す

この山を越えたら虹をつかめそう

忘れ去ることで明日へ息つなぐ

もう歳といいつつ赤い紅選ぶ

少年に鬼が住みつき悪さする

神戸市 木 村 忠 義

黙礼をされはてどの奥さまか

断りがあると騒音気にならぬ

少年に声をかけられ嬉しいな

どうか邪魔しないで欲しい上り坂

定年後スローボールを武器にする

松山市 山之内 八重美

ニッコリと可愛い乳歯覗きかけ

新生児抱いたナースが慈母に見え

新名所生まれ変った町おこし

浄土へはいくら有っても皆手ぶら

体裁をかなぐり捨てた餅拾い

野田市 那賀島 雅子

セピア色の写真に深き縁あり
花褒めて庭までほめるたのみごと
握手した掌の汗嘘でないような
夫とは逝かれて知ったこの重さ
きき流すことにも慣れて無事な日々

静岡市 中西 雅

ボランティア尊い汗が光っている
恋心爪の先まで光らせて
四畳半心ひきしめおうす飲む
シルバーグレー染めぬあの艶うらやまし
落人の血の涙みるつつじ炎え

静岡市 大村 正雄

幼児と指さし仰ぐ天の川
しばらくは親子巴の水鉄砲
稲びかりさつと飛込む蚊帳がない
かなづちと河童が並ぶ海開き
シャンソンが流れて近い巴里祭

浜松市 岡本 まち

電子音伝言入れず受話器おき
遠州の浜風受けて風祭
年金で良いじじとばば演じてる
小面の裏にひそんだ夜叉の顔
いつの日も輪の中心にいる貴女

札幌市 三浦 強一

山菜のおまけもついた山女釣り
千羽鶴つうの気持になつて折る
年金日ちよつとめかしてマイバンク
ご近所のことに精しい妻の耳
モナリザの本心がまだ分らない

八王子市 井上 京一郎

青春を古本市に掘り起こし
オジサンは昭和一桁アナログ派
会長を退けば相談役の椅子
いい話だった受話器をそつと置く
ママの顔口が大きいクレヨン画

東京都 吉田 土風

忘れてた笑い欲しくて寄席に来る
鬼教官孫の前では好好爺
いい女的笑顔男を迷わせる
子に合わせ朝のコーヒー飲んでいる
俺はそんな馬鹿ではないと又も言い

横浜市 巖田 かず枝

ブランターの苺に食べる順があり
ありがとう夫に言われこそばゆい
定年もリストラもない主婦してる
読めるけど書けない文字が増えて来た
曖昧に濁し諍い避けている

横浜市 秋 元和 可

一日が終りビエロの服を脱ぐ
性格の相違と指輪外される

成功に指輪も回るダイエツト

広告の間取りへ家具を配置する

娘が着ない服を鏡にみてもらう

横浜市 近 藤 道 子

繰り言も母が言うなら許される

花散らす風とにらめっこして暮れる

なぜどうして青いりんごが突走る

がんばれのぜんまい強く巻いて出る

しまいまで聞くつまらない長電話

横浜市 鈴 江 純 子

空っぽのお腹に響く始業ベル

一年がどんどん短くなってくる

泣き所握られ帰宅早くなり

正夢と信じた籤を買って待つ

自分史に薄れる記憶閉じ込める

横浜市 長 島 亜希子

好物の横にメモあり妻は留守

渋滞の車が歩行者に抜かれ

病状が好転庭が手入れされ

高齢の母に昔を戻したい

病臥しているとほこりが目にあまり

横浜市 伊 藤 ふ み

退院を待ち構えてるベアグラス

残酷なことと言いつつ肉を食べ

ゴミ箱をはずれて拾い直さされ

オアシスが横丁にある曲がり角

横丁の歴史を駄菓子屋が語る

横浜市 山 梨 雅 子

世話役のなりてがなくて会閉じる

雨の中犬のおしゃれなレインコート

五十年よくまあ咲いた梅つつじ

病む父の背中流しに子が泊り

梅雨晴間すぐに飛び出す三輪車

横浜市 豊 田 羊 子

梅雨の泥はねてキャリアの娘が帰る

雨降りの歩く姿を娘に諭す

ペランダの風玄関で行き止り

若いからと初老らしきに席もらう

少年法弄んでる十七歳

横浜市 川 島 良 子

素顔なら可愛い十五歳なのに

風船に乗って貴方に逢いにゆく

エアロビへ五十の脚がまたもつれ

猫の死体にも南無阿弥陀仏なむあみだ

お喋りな歯医者で治療進まない

横浜市 保田絹子

大欠伸子への苦言は忘れよう

更年期恥ずかしいほど汗をかき

どうしてと孫の攻撃容赦なし

暗証の番号忘れ立往生

一笑に付されてからの根が深い

横浜市 布山嘉信

ボランテアの汗は真珠のように落ち

先は闇笑えるときに笑っとく

ふくよかと言われ肥満が苦笑い

単調な水車が誘う旅心

定年離婚対岸の火事と思えない

横浜市 田中笑子

カラフルなマニキュアの色夏走る

ヘルパーも一緒に流す汗の量

朝起きがつかなくなってる五月病

夫婦してなすり合ってる探し物

行きずりで貰うティッシュに助けられ

愛媛県 安野案山子

農薬の洗礼受ける夏キャベツ

夕立に流してやろう今日のウツ

永遠の色で溢れる岩清水

向日葵の笑顔に惚れてプロポーズ

愛妻にボイ捨てされるかも知れぬ

愛媛県 中居善信

狒犬の阿吽の息にまだ遠い

一滴も飲まず言いたい事を言う

クローン牛次には人が狙われる

机上論知ったか振りをしてござる

女ひとり口説けぬ顔で縄のれん

愛媛県 黒田茂代

花好きでもドライフラワーなら遠慮

人のよい顔にもあつた裏表

肩凝りが取れたらわたし翔べそうだ

不器用な生き方だけど変えられず

いつになったら身辺整理できるかな

今治市 塩路よしみ

セールの粘りをえらいなと思う

太陽にこんがり焼いた歯が白い

朝市の素顔さわやか宿の下駄

ふるりの訛しみつく母が好き

よくもまあはしゃぐ熟女の露天風呂

今治市 中村好恵

一日一善すこうし皺がへったかな

短いのを選んで並ぶレジの列

父ちゃんの背中を借りる隠れんぼ

賑やかな人で案外淋しがり

村中が総出で踊る盆おどり

鳴門市 八木芳水

足跡が新しすぎて湧く疑念
散らし鮎桜花に負けず花盛り

税金を死ぬまで納め墓地へゆく

惜しまれた人のよいことのみに触れ

陽だまりに夫の髪刈る妻の技

唐津市 岩崎 實

大方は変わらぬ顔が出る選挙

磐石の礎ほしいこの国の

思いきり剪定 若さで明るさを

スケジュールこなす身辺整理中

やめとけと声かけくれる妻がいる

北九州市 岡田幸生

友情にしこり残した保証印

またとないチャンス貰って凡打する

脚色をされて噂が舞い戻る

コンマ以下脳がまごまごする金利

いい人と言われて増える役の数

宇部市 高山清子

潮時を見て妥協する歳の功

記憶力自慢出来るは今のうち

無い袖は振れぬし見栄はほりたいし

母さんの小言は裏に愛があり

ご近所は本音隠してお付き合い

松江市 山根邦代

留守電話申し上げます味気なさ
可愛さに負けて孫守りひきうける

足腰の痛さ忘れる孫の顔

赤ちゃんのやる気に心奪われる

元気で可愛い笑顔くれるから

松江市 銭山昌枝

神様もミステークする赤い糸

運命と受け止めてからよく笑う

道連れにしたい一句がまだ出来ぬ

辻褄を合わせることはもう止めた

涙腺の緩い女に油断する

益田市 岡田たけを

同病とバスで病氣の話する

藤棚をくぐる墓参の行き帰り

ボランティアで汗を流して友ができ

川柳の集いネクタイ締めて出る

ペダル漕ぐうちに自信が満ちみちる

出雲市 佐藤治代

あらあらと二人で笑う斑ばけ

平凡に生きるあなたと居る時間

お金には薄い縁のまま暮れる

それなりの暮しの中の豆ごはん

美容院の鏡の中で年をとり

出雲市 伊藤玲子

ふり向けば母が手を振る曲り角
黄泉にたつ母にご飯をたんと盛る
通夜の皿母の思ひ出盛っている
やまなみを借りて私の庭豊か
軒に來た燕 親戚かもしれぬ

島根県 多々納 テル子

再会の思ひ出を干す蛇の目傘
共通の話がはずみ夕日落つ
御柱へ古代の風が吹く出雲
年輪が心の襷を丸くする
冗談のように本音をちらつかせ

島根県 持田 多輝子

花道があるから引き際考える
誘われて好きな踊りの輪に入る
かしこくて只者でないやんちゃぶり
生と死が背中合せの娑婆に住む
すみ古りし我が家気楽な午前午後

島根県 松本 聖子

独り居の七十路意地で乗り越える
メロディーに思ひ出ハラハラ涙呑む
携帯の電池切れたかしっぱ切れ
肥り出し頬にえくぼが出来たよう
花博で体をそつとツネってみる

岡山市 大森純子

生活を痛みにコントロールされ
恋占い吉と出るまで夜更けまで
ここ三日胃の存在を意識する
お茶を飲むように湯どうふ冷奴
指を折るつもりがトラを見てしまふ

倉敷市 家守政子

不揃いな石が吐き出す自己主張
脳裏からまだ消え去らぬきのこ雲
百歳がそろりそろりと増えて来る
この身体盆栽ならば値打もの
森総理 永久に尾を引く神の国

倉敷市 撰喜子

自転車洪水のごと中国路
日の丸の波がさざめく二重橋
人波をわけて通つてリストラに
趣味がふえ交わる友の幅広さ
久々にホーキで掃けば隅残る

倉吉市 大下智子

デートする前に白い歯チェックする
歯並びは悪いが顔にあっている
うちの嫁白い歯みせてよく笑う
母の日に選んできた服を着る
噂よりずっとよかった隣の娘

米子市 森 脇 麗
体力がないと検査も受けられぬ
ストレスをいっぱいためた胃もダウン

肩の力抜いて生きよと夫が言う
嫁がきてさわやかな風吹きぬける

料理好きキッチンの方シェフの技

米子市 猪 森 スミエ

凡人のままでいいのさ中ジョツキ

畳紙あの日模様抱いたまま

ちぎり絵の和紙ボツボツと里自慢

老姉妹元氣確かめあう電話

ほどほどの元氣小出しに明け暮れる

鳥取市 福 永 ひかり

土日には休む身体になっている

九十が持つてる売れた土地の金

お裾分け良いものばかり選って行く

相談も愚痴もごはんを食べてから

有言の実行骨が折れてくる

鳥取市 田 村 邦 昭

生きるため多少の妥協知っている

親の脛かじる気ままは許せない

七色の虹と重ねて未来みる

うるさいがこれも愛だと誤解する

野望なき男の貌の小さきこと

鳥取市 山口 千代子
八十路過ぎ派手を承知で着るお古
娘より婿に気安くものが言え

我慢にも慣れてしまえば平凡よ
誕生日誰も気付かぬ八十二

あれこれと気配りするもボケ防止

鳥取市 田 中 憧 子

政治家の妥協我が身を守るため

冷凍庫いっぱいにして旅仕度

友からの温い一句に病癒え

飲み過ぎはおまえのつまみ旨いから

家計簿を閉じてやれやれ湯につかる

鳥取市 宮 脇 道 子

新薬もうっかりミスにききません

おろかさにつける妙薬今もない

捨て場ないゴミくずつまみ持ちあるく

他人ごとと聞いた介護がすぐ隣

ごった煮か癖ある人も味を出す

鳥取市 近 藤 秋 星

男女混浴老人ホームは別世界(介護入浴)

だんだん嫁の彩に染まっていく息子

虹消えるごとく生命も終りたし

いつまでも元氣じゃ困る人もいる

どこから来たのか毛虫廊下を這っている

鳥取県 藤山弘子
新茶良し味も香りも初夏を告げ
山菜が初夏の味覚を主張する

便利すぎ気づかぬ事が多すぎる
バラの花とげのないのもいいものだ
ミニバラとしっかり会話育てます

鳥取県 河本照子

検査後の楽な呼吸の有難さ
飾り気のない心から出た言葉
終りまで読まない内に次が来る
おひらきの後が美味しい酒となり
バイキングのお粥で元氣取り戻し

鳥取県 西冲彰雄

老いてなお旬を食べたく野菜苗
相槌を打たされ敵の思う壺
金と職無いが良心まで売らぬ
祝宴の中で淋しく本音飲む
涙雨妻一周忌降り止まず

鳥取県 平井栄翁

弾の下潜り還って墓建てる
大世帯妻のタクトが乱さない
一雨が旬のわらびの山にする
古ノートいろんな知恵を持っている
なまぬるい法の裁きに根が切れず

鳥取県 澤裕子

岩田帯巻いてのぞかす母の顔
きっかけは煽てに乗った二重唱
単純で二重人格などなれぬ
念願がやっと叶った富士登山
愚かだと知りつつ過保護断ち切れぬ

奈良県 渡辺富子

青白く光る螢に思慕つのる
無念無想 雑草を抜く雨上がり
緑のシャワー浴びて私を取り戻す
しなやかに紅一点が流れ変え
一枚を抜くと空になる財布

檀原市 居谷真理子

雨の夜リンスはしない洗い髪
雨音に慰められている独り
決断を雨のポストに落とすこむ
古ポストいつも味方でいてくれる
高速で回る地球に育つ恋

滋賀県 中宗明

ハイキング野苺食べて童心に
家計簿にパソコン予算いつ組める
退院後強気の妻も丸くなる
くどい程お願いしてる選挙戦
ぎりぎりの譲歩で続く夫婦仲

京都市 勝山 美千代

年忌終えひとりでひとつ坂を越す

雑事から抜けて一息新茶呑む

糠床の塩ととのえてナス キュウリ

五月晴れ痴呆の姉の童女顔

母の日で洋服増えてどこへいこ

京都市 三宅 満子

すだれ よしず クーラーよりも涼を呼ぶ

晴曇 時々雨という予報

セーラー服の白がまぶしい衣がえ

蚊取線香のにおいへ去年よみがえる

初成りのビワの実鳥に差し上げる

和歌山市 上地 登美代

花よりも団子庭には夏野菜

インターネット アイラブユーで病んでいる

一喝がとんで仕事が活気づく

動物に劣るヒト科の子の躰

車間距離置いても足を掬われる

和歌山市 和田 美寿子

体重計そつと乗っても同じ量

飛んできた種一つぶが土を抱く

酒ぐせは悪くないわよからむだけ

またきてね昔も今もおあいそで

まず一杯コーヒを呑んで酒をのむ

和歌山市 木村 親 躰

すれ違う十七歳に身構える

悪い事した子が厚く保護される

政治にも起つて欲しいビッグバン

アベックの一部始終を見たトンボ

万雷の拍手に音痴歌い出す

和歌山県 坂東 和代

古希すぎて五感の冴えがにぶり勝ち

茶柱が立った本日句会です

ころぶなよ卒寿の母に注意され

性格が風にゆれてる物干場

外は雨気分転換花を描く

和歌山県 中村 君 枝

ラッキョーチャンスなどはそうそう望めない

侘び住まい段差が呆けを予防する

延命治療生きながらえてゆく課題

人情味なにわ女が勝つてゐる

漫画好き親の期待も軽くなる

和歌山県 村中 悦男

二人とも失せ物さがすことが増え

世の乱れ孫十七歳が気にかかり

相談を受ける私も目が潤む

人を恋う心抱きつつ草をひく

ああ言えばこう言う癖のある男

和歌山県 森 下 順 子

紫陽花が目立つそろそろ走り梅雨

見て見ない振りを通して恙なし

あるだけの鎌研いだからする朝餉

どんぐりの主張を聞いてくたびれる

適当なストレスならば呆け防止

尼崎市 清 水 久美子

阪神が勝つと夕餉が長くなる

給与日をもう待ち兼ねている中日

虫のように小鳥のようにレタス食む

ケースバイケースでしますイエスマン

私の強い女が好きなのさ男

尼崎市 松 下 比ろ志

新緑の山を抜けると里の駅

父に似た遺伝子の笑い顔

母系父系二ツ合わせたA B型

夕焼けが今日一日を消してゆく

一駅ひと駅と思ひながらの余生かな

尼崎市 野 瀬 昌 子

傷口は癒えたのだらう話しだす

リストラをしつかり妻が受けてくれ

セールスが墓はあるかと問うてくる

後継ぎにやっとお嫁が来る祝い

爺ちゃんの鞆に飴がいつもある

姫路市 勝 間 タツエ

ナフタリン匂わせ私五月晴

にっこりと優しく呼ばれグミもらう

私には深みないけど幅がある

湯の旅の疲れがとれる家の風呂

美しい命切り取る花ばさみ

川西市 西 内 朋 月

娘のいない庭に咲いてる桃の花

保険金貰わん運と貰う運

ネクタイを締めた男に騙される

腸検査テレビに写る赤い髷

黒白をはっきりさせず生きている

兵庫県 安 達 厚

道の駅 葉つき玉葱買ってくる

寒いけど草の芽を見て野菜播く

着飾って出かける妻を見る野良着

平凡に過す日記の暇なこと

民衆がくれる勲章ならもらう

兵庫県 徳 平 穂 子

山里の風連れて来る露だより

健康と流れる星に手を合わす

一病と仲良く歩く初夏の風

七転び八起き重ねて珊瑚婚

保証書を患者が欲しい医療ミス

兵庫縣 広瀬房江

リラの花 香も賞められて立話

わだかまりとけてはればれ風通る

金婚式妍を極めて下り坂

幸せな時の不安がよく当る

空しさにブラウス赤い方を着る

大阪府 尾崎黄紅

まんなかの車輛に乗ると決めている

女医さんのほうがはつきり言うてくれ

腐っても鯛ごうまんな東大出

母方のふるさがある有難味

磨り硝子他人はみんな知っている

大阪府 一本勇太

日本三景知らぬヤングのハワイグアム

不愛想な店で自慢の味を食べ

惚け防止銭は溜めない事にする

二番煎じのお茶からポロリ出た本音

つながれているから翔べる奴唄

大阪府 中村忠敬

人つれて散歩している犬がいる

オムツまだとれないくせに口達者

消毒とうがい兼ねてビール飲む

新築すタバコ吸う人招びません

何べんもきいて初めてきいたふり

大阪府 大川道子

店員の売る気のなさに買うのやめ

お行儀の悪い総理でポロポロと

心まで老いてどうするオイわたし

座ぶとんを五枚あげたいような絵馬

靴ひもを結び直して坂降る

大阪府 小泉ひさ乃

母の日にふたりの心届く幸

懸命に生きる余生は褒美かも

頼られてひとりで背負う荷の重さ

点滴の雫は母の涙かも

線香の香の菓子が出るご命日

大阪府 中村叡子

夕映えに似て輝いて君は逝く

総会の知らせ粗品を取りに行く

市のプール泳ぐ人より歩く人

免許証もう更新はせぬつもり

回る寿司夫婦で十皿未だいける

大阪府 奥村五月

卒業後始めて出会う強い風

徳儀に乗って命を永らえる

保険より家族の介護身に染みる

新宗教ずらり名士の広告塔

ほろ酔いに妻をほめたりけなしたり

大阪市 榎 本日の出

人生に越えねばならぬ橋があり

旅プランウズウズしてる未だ喪中

花が散り何もしない日が続く

少子化で公園デビュー数もする

欠点があるからみんな面白い

大阪市 辻 川 咲

京菓子の優しさ食べるの惜しくなり

子のない娘 親の心がわからない

優しさもふくまれている茶の香り

孫くれた温もりのある守り鈴

紫陽花のコバルトブルー空に溶け

堺市 村上 玄 也

耳鳴りで聞き分けられぬ蟬の声

お茶うけに祖母の自慢の一夜漬

醜くて可愛くもあるビール腹

へば将棋王が裸で逃げまわり

向日葵は汗かきそうに咲いており

堺市 斎 藤 さくら

掃除してストレス癒す梅雨晴れ間

角度変え世間覗けば面白い

あらメロン思わぬ人がプレゼント

咲き誇る花もいずれば地に還る

まだピンク似合う私と自惚れる

堺市 大 橋 錦

二センチの段差またげた一歳児

白い手に初めてさわる砂遊び

腹いっぱい食べてスタイル気にしてる

夕餉時灯火ついた我が家あり

生きがいに主婦が趣味する忙しさ

柏原市 永 浜 加津子

窓をうつ雨音激しああ独り

嫌なことスルリとかわす技覚え

干し草の香しみじみ母想う

公園に駅弁二つ旅気分

梅の香が部屋いっぱい梅雨の入り

八尾市 田 中 トシエ

間引き菜の母が自慢の一夜漬け

冗談で打たれた鞭が痛すぎる

養殖の蛸を飛ばす町おこし

来客へ用の無い猫先に出る

掃除機にゴロ寝のパパは吸われそう

八尾市 中 島 春江

三億円当れば困るから買わぬ

衣替え園児のバスも塗り替えて

近頃の嫁の返球きつい事

押売り注意十七歳が家にいる

リング剥くナイフ幸せだと思っ

八尾市 井尻 民

想い出の日記を辿る老眼鏡
終章をいたわり合つて水ぬるむ
言い過ぎた佗しきひとり酒を酌む
あの人のルーツ物腰から匂う
淋しい日迷惑顔の猫を抱く

八尾市 與田 明

生きている証に払う市民税
湯煙に化粧を落す熟女たち
二子山越えて流れる武蔵川
脈拍を美人ナースに乱される
梅雨晴間一二の三で車椅子(介護)

八尾市 山本 宏至

熱いのが効くと言われて我慢の湯
冷蔵庫掃除が好きな食べ盛り
丸腰に男の自信のぞかせる
杜若すつくと立つて自己主張
ご近所に自慢を盛つたお裾分け

東大阪市 田中 美弥子

憎しみもひとつぐらいは丁度いい
湿っぽい話は竿に掛けておこ
夫と老母 秤にかけて許せ老母
わたくしの知らぬネクタイ切り刻む
浮気鳥 今宵いずこのとまり木に

東大阪市 今岡 真人

年金の行く末思う来世紀
組織には要る陽の役と陰の役
携帯のマナーおじけぬ現代っ子
新卒に不景気風が呻く世に
返り咲く望みは捨ててない机

吹田市 木下 敏子

旬の味体にそつと蓄える
美しい老いをさがしている散歩
向日葵が咲いていいことありそうな
はつきりとした嫁が来てついて行く
与野党が味方のようにする握手

吹田市 大谷 昌子

売り物にできる女はとうに過ぎ
湯治場で賑やかすぎるクラクション
出初めの空豆若さピカピカと
公園に人恋しくて咲く桜
ほめられてふんわり私蝶になる

吹田市 須磨 活恵

疲れたら故郷へ帰ろう海がある
帰郷三日 都会の灰汁を抜いて来る
墓参り若葉しずくを浴びながら
淡い夢まだ捨てきれぬ夏帽子
言いたいこと言えずに小石蹴つてみる

吹田市 二宮 栄子

三回思もう泣かないと決めました
せっかちを反省してるサロンプス
冗談の好きな家族でやかまし
留守電はにが手でハローだけに
疑似体験ますます老後考える

摂津市 もちづき 遊美

引揚げて来て祖国幻滅させないで
個性つぶし教育しといて無個性とは何ぞ
マインドコントロール抜けていないなモリさんは
八百長首相 棚ぼたニヤニヤ止まらない
半島 列島 昔地続き同人種

豊中市 江見 清

暇はある金にゆとりはない老後
準備中札を横目にひとまわり
死ぬ覚悟なんべん死ぬる気かいな
済んでから甘いプランと思ひ知る
身体より会社元気が訊いてみる

豊中市 みき わきみ

読書欲まだ呆けまいぞ呆けまいぞ
テレビ漬け思考低下を自己欺瞞
大型ゴミ捨ててあの世へゆく準備
捨てもせず使いもせずにもつたいたい
苦笑とは弔辞の中のほめ言葉

高槻市 生田 義一

家よりも大きな鯉が泳いでる
通る人みんな隣の牡丹賞め
いい便り来ていないかとポスト開け
天龍峡しぶきを浴びて魚かじる
少子化で孫は大事な宝物

高槻市 乙倉 武史

快い朝の目覚めにするポーズ
台本にない人の世のメロドラマ
人生の節目に器量試される
人は皆大小マグマ抱いている
タイガース勝った負けたで日を送り

枚方市 二宮 紫鳳

銀婚へ娘がくれたペアシューズ
三室戸寺 あじさいぬつて夫婦傘
パソコンがやつと我が家になじみ出し
梅つける季節が来ると母恋し
童歌歌うと愛がわいてくる

寝屋川市 井上 すみれ

くやしさをプラスにさして大勝利
蒼天に生かされているよろこびを
窓に來たトンボに過ぎし日の平和
生命線見ながら生きる八十七
休刊日時計の針もゆつたりと

花文字に切り口上の妻の乱

富田林市 中井アキ

灯明に嬉しい便り読んでやる

リハビリの足を囲んでいる家族

大胆な靴にはらはらついてゆく

生意気な私へ神の大目玉

富田林市 山原昭水

川柳が好きなマスターいる喫茶

大好きなたこ焼食べて仏顔

信心が半分花の寺めぐり

ハーモニカ吹くと旧友集まった

母さんのかやくごはんを友が褒め

富田林市 中崎深雪

愛しても離れてみたい倦怠期

ていねいに生き生きがいを見つけてる

装いがうまく決まると弾む足

人のこと見えないようによく見てる

縄文に思いをはせて土ひねる

富田林市 大橋鐘造

四面楚歌窓を少うし開けておく

さよならと他人の顔で言う別れ

次の世も一緒に建てる生前墓

騒がれてやっとながつくお人好し

慰めてくれるお酒に礼を言う

のっけから本音吐かれて泡を食う

ガミガミと雷落とす貴重品

悪戯の数だけ残る灸の跡

雲行きが怪しくなつて立つトイレ

生き甲斐を見つけて妻が強くなる

岸和田市 不破仁緑

ときどきは息抜き出来る雨もよし

トラ連敗スポーツ欄も見なくなる

紫陽花の雨に張切るかたつむり

公約通りなら今は気楽な生活だが

回覧板提げて一票頼まれる

岸和田市 田口穰一

道草を食って人生艶が出る

選挙前疎遠の人から来る便り

与党まで手を焼く首相の軽い口

大君のへにこそ死なめと言いたそう

日本の進路を決める女性票

泉佐野市 備後三代子

梅雨晴間けんけんばあの下校生

一病に更に一病雨ざんざん

向き合つて別のさくらを眺めおり

絵巻見るように鶉飼に極まりて

孫が来て軍艦みたい靴並ぶ

河内長野市 水谷 正子

情報の洪水防ぐ無関心

医長回診 卵 ぞろぞろついて来る

故郷は口笛吹いて帰るところ

暫くは無口でいよう菖蒲園

ワープロの次にFAXおもちゃ増え

大阪狭山市 矢野 梓

叱り役だけ父親に振ってくる

その話老婆心だと受け止める

淋しさを気楽といつも言い聞かせ

空元氣でも毒舌の出るパワー

天候を恨まない傘持つて出る

大阪府 澤田 和重

昼ぬきでガーデニングに凝る夫

言い訳はしないと決めた仏頂面

あなどれぬ敵だと笑顔みて思う

辛党の土産 地酒を提げてくる

骨埋める覚悟が届く新住所

大阪府 東 文江

我が一人つゆの晴れ間を忙しく

カタツムリぬれた葉っぱの一軒家

子の古着想い出多く捨てられぬ

孫が言うしんみりせず元気出し

植木屋さんの鉢の音で夏が来る

青森県 福士 トキ

満開の花に微笑む津軽富士

病室の窓からだけの花見かな

花の季にわたしも逝きたい母のよに

病床に今朝も聞える遠郭公

秋田県 湊 修水

クレヨン画下手でも愛がほとばしる

白い雲みどりの中を車椅子

どの絵馬も笑ってほしい春の風

手さぐりのケアを杖とも柱とも

新潟県 高野 不二

定刻の朝食ドラマに合せてる

健康法テレビの知恵をまず試す

週刊誌向きの事件がまた起きる

賞味期限に追われて今日もまた肥る

日立市 加藤 権悟

蓄財はないが鱗を光らせる

素面では言えない妻にありがとう

言い訳はきくと聞きたくない桜

ドンタクの佳境ここまで聞こえそう 富山市 沢江 和代

山門をくぐると過去が語りだす

念願の土地をすっかり踏み仰ぐ

夕焼けに明日を託す平和主義

ひと仕事終えたぬけ殻はめてやる

富山市 松 見 た え

ライバルの乾杯音頭頼まれる
押し入れがそろそろ悲鳴あげそうだ
未来の夢絶好調の子に託す
マージャンの誘いに乗ってかにもなり

東京都 井 上 つよし

倒産のホテルのつつじ一人刈る
ネクタイのしみに残った苦い酒
どう見ても元気のコツは粗衣粗食
シルバーパスで東京中を駆けめぐり

横浜市 三 村 八重子

万緑の滴りに命の讃歌
旅先で不仲の夫婦に好奇の目
やがては涙に変わる笑い上戸
恙なく過して神仏忘れてる

横浜市 福 田 由美子

ドラマより介護番組チェックする
同居した当座本音はかくしとく
見切り品仕分ける主婦の目が厳し
Tシャツの着こなしかたもくさされる

横浜市 荒 井 広 和

曼荼羅のよう紫陽花が咲き揃い
絵手紙に悲喜交々が埋めてある
ど忘れの脳も冴えてる悪企み
生き甲斐を見つけて夢を膨らませ

横浜市 芦 田 鈴 美

白薔薇に鼻の奥まで覗かれる
遺影用とピースの顔が笑ってる
このまんま逝くのも子には孝行か
亡父さんに私の好きな供え物

横浜市 生 坂 サト子

辛い事も老化防止といい聞かせ
遠巻きに立候補者の裏にふれ
突然にリズム狂わす勇み足
無農薬野菜高級車で届く

横浜市 吉 田 裕 峰

恋愛もこなした五体不満足
ところ天つるんと夏を流し込む
肉太に団扇に一句したためる
年金もやっぱり妻が主導権

横浜市 金 森 徳 三

老い二人ハイテク音痴つつがなし
仲の良い夫婦喧嘩を自慢する
万歩計ナースつけたらパンクする
デイケアー日帰り介護なんだって

横浜市 平 達 也

起きがけの冷水歳に活入れる
錆びたのか打って響かぬ鐘になる
頑健な人羨ましく触れてみる
忘れたり思い出したり流れる日

高知県 近 森 功

梅雨晴れにだまされたのか忘れ傘
ゆらゆらと水に沈んだ一円貨
停年で重い仮面を一つ取り
満腹の財布男の顔が出来

高知県 桑 名 孝 雄

カーナビで安易に育つ子の謀叛
片仮名は苦手セクハラ ストーカー
ボールペン程度の軽いご仁だな
百までの三十年をどうしよう

高知県 百 田 幸

播く種の一粒ずつにある命
脳死した臓器頂き生かされる
背伸びした付け傘寿までついてくる
無口だが孫の優しさ感じて

香川県 瀧 井 勝

義理に出す右手しつかと握られる
世間体武器に女房攻めてくる
人騙す文を奇麗な文字で書く
平凡を少し抜きたいだけの欲

香川県 清 川 玲 子

帰省した風呂に蛙が聞こえてる
パンダほど人気上昇佐渡のトキ
腹立ちも一緒に入れて米を研ぎ
味のある言葉だ胸に刻んどこ

出雲市 岡 あきら

初物のぶどう仏に上げてから
風は初夏薄着の胸が喋りだす
悩みばつりいつも仕合せそうな友
年金を節目ふしめが脅かす

出雲市 川 島 和歌子

皺の手も使いこなした農の跡
噴煙に残り火燃やすSL車
旅先で俄かガイドの訛り節
学ぶ孫出世払いと無心する

島根県 武 島 ちよえ

小さい輪になって温みを通い出す
有頂天になって石段踏みはずし
突き詰めてみたが他愛のない話
ためらっている中消えた五割引

米子市 足 立 由美子

平凡という倅せの中にいる
びちびちの世代の声も耳に入れ
びちびちも一人仲間に入れてある
いざという時には出すよ助け船

鳥取市 河 田 のり代

笑顔して交わした挨拶誰かしら
唄好きも震えの止まぬステージだ
ニュース聞く度に世界が狭くなる
歯切れ良い嫁の一言家とむ

さっぱりとした忠告に胸開く

鳥取市 横田 春名

少年の闇に寄り添う人欲しい

雨の日はアノネもしもし糸でんわ

愛児連れ里へ手ぶらのいい土産

倉吉市 牧野 芳光

こだわりの目で選んでる既製品

宍道湖をひとり占めして蕎麦食べる

言い切った後で私を責めている

漸くに五十のしかめっ面になる

鳥取県 山内 芳江

太陽と共に働き共に眠る

植樹した山がだんだん活気づく

我慢にも限界があり打ち明ける

歯切れ良い話だきつと嘘はない

鳥取県 山岡 久枝

のびのびと生きる余生にボール打つ

出来るなら挑戦したい若返り

お粗末と言えど丹精こめた膳

鼻歌が朝の空気によく響く

鳥取県 西垣 美知子

この土に生きる勇気をいただこう

歯を磨く悪夢を全部消したくて

川柳会辞書と遊んだ小半日

一番に心が癒える妻の酌

ささやかな願い鳥居に小石乗り

岡山市 清水 金太郎

早朝に祈る拍手よくひびき

宝くじ切なる願いこめて買う

神様よ正直者に味方せよ

倉敷市 森本 文子

芍薬が昨日の夢のように咲き

孫に料理教えて孤独から逃れ

老いても大きい縁の夏帽子

自分に暗示掛けた幸福でも良しと

岡山県 国米 きくゑ

故郷の峠に祖父の樹が聳え

風の子も火の子も産んで母達者

新しい命産まれる窯の火

いじめ等無い分校の元気な子

海南市 堂上 泰子

鶯の音色に浸る露天風呂

琴の音にお抹茶うまし菖蒲園

雑草を夢中に引いて悩み消す

アメリカの恐い事件も輸入され

和歌山市 福重 美子

孫とやる拳玉 勘を取り戻す

俯伏せに地球を抱いて寝息たて

歳の差が老人ホーム見学す

要点も先ずは碎けた話から

和歌山市 土屋 起世子

ぴちぴちのトマトに価差をつける

紫に光るなすびにあった刺

悔いのない人生父に遺産なし

健康な家族で部屋がかたづけぬ

和歌山市 前岡 健三郎

激流に竿の放列解禁日

プレスII求めフイーバー長い列

腹黒も皆同じにレントゲン

水郷をのどかに巡る手こぎ船

和歌山市 武本 碧

アロマセラピーで心のさび落とす

対岸の火事では済まぬアイラブユー

流されぬようにそうつと棹をさす

うっかりと波紋の小石投げた罪

京都府 前上 英一

遺言状作り減法高くつき

踏ん切りをつけよと開くジャンプ傘

遠雷に洗濯物が身構える

会いに行く歩幅が少し若くなる

奈良市 上村 李世恵

淡路島 世界の花が競つて

孫育ちお役ごめんの祖父の膝

介護する人も腰痛かかえて

アルバムに若き日の彩とどめて

奈良県 古手川 光

原子炉の疲労が怖い発電所

人間が軽うてついついおどらされ

偽金に札を言うてる販売機

雉が鳴く声の聞こえる里に住み

奈良県 江波 正純

葬式に金使うなと遺書に書く

茶髪にも心の窓を開けておく

生ビール涸れた心にしみわたる

残された時の用意に料理する

尼崎市 森 安夢之助

トントンと茄子切るように解けぬ謎

坪庭をおもちやにしている老い二人

背伸びした分だけ肩を凝らしてる

外食のメニューは妻に任せて

尼崎市 河津 正治

寝たきりの妻が聞き耳立てて待つ

几帳面な顔で遍歴繰り返す

晩学にまた肩書きが一つ増え

ほのぼのとガイドが包むバスツアー

伊丹市 延寿庵 野鶴

ロボット犬やんわり癒す五月鬱

輪の中へ拍手で踊る鬼がいる

海を越えウィルス遊ぶコンピューター

タイガースいつもの位置で上睨む

伊丹市 樫谷郁子

兵庫県 山本泰子

古稀過ぎて若さが残る急ぎ足

急がせた靴に礼言う停退日

横文字のメニユー写真に助けられ

夏の恋強い日射しも何のその

三田市 久保田千代

適量が明日への力造り出す

買う気などなくてもちよつと触れてみる

鍵穴で聴いた噂に苦笑い

人の心善意の傘で試される

川西市 田中喜俊

老いたれどコンピュータに挑戦す

雑談で痛い病も忘れてる

いつの日も阪神戦で残り風呂

何よりもやさしい言葉ほしい老い

姫路市 服部一典

家と城見える所へ妻の墓

妻の遺品身に着けて見るレオタード

献立が呆けを遅らす老い一人

番組が今夜のお経遅らせる

宝塚市 飯西ミサヲ

一つ聞き二つ忘れて今日元氣

見栄はった嘘が悲しい坂の道

布団干す力残して今日を生き

衣替え又の機会があるや無し

異状なしはればれ告げる電話口

旅の宿苦勞話で夜があける

別れの曲弾けば亡夫がかすみ出す

恋は吉観音さんに逢いに行く

高槻市 執行稲子

甘く見ずみんなで渡ろ交差点

横文字の表札ごく平凡な日本人

物差しが鞭にも変る師の躰

順風満帆あなたの背中がかくれ場所

高槻市 西谷治三郎

選挙戦違反予定し本部置く

みな同じばあやの後をじいや行く

歳出増 罰金増でトントンか

孫競争回転寿しの皿の数

高槻市 左右田泰雄

探しものばかりで過す小半日

まな板の凹みで拗ねているトマト

汽車の中世間話がしやしり出る

懇々と論す相手は糠に釘

四条畷市 吉岡修

信念を逆なでしたと気がつかず

やんわりと昼寝を起こす風も秋

腕白が帰りリズムを立て直す

挨拶を目と目ですます仲となる

女房に叱られている猫庇い

吹田市 穴 吹 尚 士

風向きを読みさりげなく避難する

募金箱見て見ぬ振りで通り過ぎ

荒れた野は企業誘致の夢の跡

吹田市 後 藤 志津香

腰据えて話を聞こう選挙戦

遊歩道汗をみどりが抱いてくれ

船上で花嫁入場見てる風

べールの娘父と静々腕を組み

交野市 森 本 益 弘

石筍のようにむくむく雲の峰

始めての夜は眠れぬブリュッセル

湯気の立つ若い夫婦も旅の友

二枚舌使い分けてる選挙戦

門真市 矢 阪 英 雄

増水で川海老捕れず商えず

鬼貫の伊丹を後に大江まで

駅頭で駅弁買えずものたらず

丹波越え丹後の細い雨になる

大阪市 榎 本 舞 夢

八十になっても背筋シャンとして

風雪に耐える古木に父を見る

船の旅家に着いても揺れている

次々と楽しみが増し死ねません

たこ焼きは千枚通しで丸くする

大阪市 伊 藤 博 仁

居眠った僧も普通の人だった

父の日はなにもしないと決めておる

とりあえずその場譲るも一つの手

大阪市 熊 代 美智子

旅に来て妻をみなおす露天風呂

ウツ詰めてとばしてやろう紙風船

三回忌母がだんだん遠くなり

親切の押し売りどうぞお断り

大阪市 岩 崎 公 誠

回る寿司かげでモーター唸ってる

自分史の隠したとこに厚化粧

屑箱にへそくり隠し捨てられる

三男坊風の吹くまま遊ばせる

松原市 和 気 慶 一

落ちつくところにやはり落ちつくタイガース

ガングロで男言葉でお年頃

オジサンも負けず携帯だす車内

失言にもう慣れました総理殿

堺市 喜 多 美 波

舞の海娘の花束は土俵下

しなやかな血管願う献立表

若い娘のファッション見るも面白い

青春をギターで燃やす地べたの子

南無阿弥陀仏よろこびもかなしみも
興奮がさめないナマの吹奏楽
堺市 田中 紫

若いねと言われ浮かれて紅を引く
吠えまくる齒に衣着せぬ真紀子節
堺市 荻野 像山

三角にぎり老母にもあつた力こぶ
食足りて角張った顔少のなり
堺市 荻野 像山

角隠しとればやっぱりあつた角
結ばれた昔を偲びする介護
堺市 荻野 像山

国なまり遠いふるさと近くする
古傷が同窓会のネタになる
和泉市 横山 捷也

雲一つない青空が味気無い
腕白の頃を知ってる寺と川
和泉市 横山 捷也

家一步出ると足腰しゃんとする
夏めいたアメリカ村に腰おろす
八尾市 平川 幸枝

たくましく初夏の胸なる交差点
青蛙喉ふるわせてものを言う
八尾市 高橋 明子

忍び寄る老いの坂道如何せん
宮の杉樹齡千年何樂し
八尾市 高橋 明子

有難い駅と病院600歩
晴れた日は屋根の温水ガスいらず
八尾市 高橋 明子

花の名も忘れて嘆く万歩計
医者巡り終えて出かけるフルムーン
羽曳野市 森田 四三郎

介護法結局金でけりがつき
過疎の村働き者に嫁が来ず
羽曳野市 森田 四三郎

電話口二人の恋がもれてくる
孫が来てすべてのペース総崩れ
羽曳野市 川口 信子

おばあさん昼寝小さい足の裏
懐かしい手を取る名前出ないまま
羽曳野市 川口 信子

若葉恋い水上バスに乗ってみる
お隣は外国旅行 茶漬食う
河内長野市 印藤 智子

お一人様言われ寂しいレストラン
故郷も様変わりして道迷い
河内長野市 印藤 智子

お迎えは何時来てもいい負け惜しみ
首からの紐が見えてる家の鍵
河内長野市 杉谷 カズエ

トイレ有るとこ迄行こう行楽地
食べさせてひげそってやる車椅子
河内長野市 杉谷 カズエ

政治屋の失敗のつけ庶民持ち
行く先の日の準備する七十路なり
岸和田市 亀井 皎月

糸通し妻へのみやげ喜ばれ
だんじりの走る勢い涼を呼ぶ
岸和田市 亀井 皎月

東京都 清原悦子

賑やかな声を実家においていく
メル友に何でも言えるこの不思議
温もりの中で真っ直ぐ育つて

静岡市 増田扶美

真夏日が三日続いて風邪を引き
護岸した小川を嫌う鮒 蜆
单身赴任ゆとりがあつて落ち着かず

今治市 渡邊伊津志

人癒す嘘が得意になった老い
トップの座守る努力を知らぬ雑魚
月と潮満ちて静かな係船場

今治市 野村清美

いい時に来て孫が背な搔いてくれ
新緑を縫って楽しいバスツアー
横丁の地蔵を拝む丸い背な

香川県 松村輝夫

こつそりと呉れてにつこり会釈する
ソックスを脱いで我が家の顔になる
年金も使うと景氣押し上げる

松江市 小川注湖

引退という花道に走馬灯
孫の守り付いて走って休めない
秋まつり一日元氣過疎の里

松江市 松浦登志子

保険金安くてゆっくり生きている
母娘孫一〇〇パーセント太い幹
二十八度 蜘蛛が店出し夏が来る

出雲市 榎ミツエ

真夜中に雷光つて夏が来る
赤いバラ私に想いを語っている
川柳のノート鉛筆夢の中

出雲市 加藤スズコ

仏前に先ず手を合やす子の姿
温かい手作り並ぶ道の駅
今見頃手ぶらで来いと花便り

安来市 原煩惱児

忙しいだから仕合わせかもしれぬ
ティータイムだんだん長くなる老いか
無罪論告 私の過去にそれはない

島根県 福岡博利

廃道にまだ生きていた土の橋
今日もまた黒のネクタイ友がへり
この町が好きで山から眺めている

米子市 小塩智加恵

行く先によって指輪をきめている
弟へ叱責手紙親代り
我が家にて命終えたし老い二人

鳥取市 西尾敬之介

春玉子溢れて値段急降下

浜風に烏賊の開きが舞い踊る

連発のくしゃみが笑い誘つてゐる

鳥取市 岡田信恵

信じてた友の裏切り恐かつた

リハビリで出口が見えた一人だち

リハビリに望み託して鬼になり

倉吉市 猪川由美子

句会出てマンネリの聞晴れ上がる

負の遺産火の手だんだん追ってくる

心の糸ニュースに日がな打ち震え

鳥取市 橋谷静江

早起きで見回り楽し自家菜園

自家菜園もぎたて野菜朝の膳

梅雨空へ蛍の光る宵の口

鳥取市 鳥羽直市

美しいみどりは核が大嫌い

四捨五入できぬ大正生きにくい

花冷えの宴を踊りが盛りあげる

鳥取市 鳥羽玲子

寝たきりになって命の重さ知る

懐がぬくぬく笑顔かくせない

コマーシャルおいしい話ばかりする

鳥取県 加藤公子

ヘルメットかぶった案山子雀見る

つかみどりされる稚アユが放される

水浴びをしてる小鳥を脅すまい

鳥取市 高尾京

南天の花房雨に活きかえる

最新の便利さ我が身に縁遠く

政党名似過ぎてわからぬ年齢となり

三重県 尾崎勤

母と来たうどん昔のままの味

四つ角の酒屋で家を聞けと言う

駅名が仲裁案で長くなる

京都府 丹後屋肇

初デートダフ屋の券を一枚買う

ひとときを二人で占める観覧車

新聞を配る途中の雨宿り

八幡市 桑野和俊

こんなにも綺麗な花の名を知らぬ

赦し乞いしおれた花に水をやる

子どもらと施設訪ねて花送る

奈良市 田中賢治

神の国禪問答で幕降し

園児にも田植教える良いニュース

児の舞台親はどきどき逃げられず

和歌山市 吉村さち子

世話好きの友が偉大に見えてくる
ナメクジへ憎さいっぱい塩を盛る
ほどほどに折れて時代の差を縮め

尼崎市 内田美也子

花屑もいつしか土へ風の葬
梅雨明けを告げる雷雨の触れ太鼓
老母介護我が未来図を重ね見る

尼崎市 軸丸勝巳

花博の壮拳を見せる駐車場
盆栽展小さき巨木われを圧す
保険料上がるせつせと医者通い

尼崎市 尾宮弘治

ヘルパーが事務的過ぎる嗚呼介護
呆けてるとみたかセールス食い下がる
囁りにそおっと開ける厨窓

篠山市 谷田多美子

三人の孫に浴衣を縫う夜更け
いい雨だ田畑水浴びしてるだろ
腰痛を慰め合って藤の下

姫路市 北条てる代

真っ直ぐに歩いて嵌った落し穴
今日の罰ひきずるように夕陽落つ
善人の貌で鮮やか芥子の花

兵庫県 黒崎美紗子

花活けて四季ある国の有難さ
風邪引いてしみじみ思うおもいやり
その時は別れと気付かぬ紙おむつ

吹田市 木村無緑

高齢化俺も一役買っている
不景気は何処吹く風 of 行楽地
公害の一つでしようか花粉症

大阪市 星野きらら

錆びついた頭へワープロすすめられ
背かれる子もいるだろうつばくらめ
想い出は良い事だけにする昭和

大阪市 中井正秀

木蓮の白さに暫し立止る
リッチだねそうですかねと生返事
もうひとつ地球あればとふと想う

大阪市 三浦千津子

夏近し道を横切る蛇の伸び
始まりは言葉のキャッチボールから
存在感溢れる人だ信じよう

堺市 藤井一二三

ドローゲーム悲喜交々の雨が降り
競馬欄軒借りて読む走り梅雨
洗濯機音くたびれて梅雨晴れ間

藤井寺市 岸 本 寿 代

ストレスを新茶でほぐす昼休み

とっておきの言葉 先に言われちゃった

年とれど赤い色好き気にしない

八尾市 鷺 見 章

静かなる初夏をいろどる鯉のぼり

思いだす事ばかりなり病むベッド

花の名は知らず初夏を咲いており

羽曳野市 永 田 章 司

ぼんぼんが遅しくなるこの不況

へそくりの枚数合わず思案する

利便性エコ社会とは相容れず

羽曳野市 山 本 たけし

二十年薬漬けて生かされる

クラス会名前出て来ぬ照れ笑い

四分の一に黙祷クラス会

河内長野市 木 太 久 正 一

マイカーを捨てて心も軽くなり

セリーグのドングリ夏の楽しい夜

長生きを芸のひとつと自覚して

泉佐野市 稲 葉 洋

会えたらと空想してる時が花

夕茜明日頑張れと言う色に

無所属がよろしおますと母丸く

千葉県 大 川 晚 翠

大仏の胎内入り厄落とし

百歳はだれも飲まない葉っぱ飲む

香川県 原 賢

一枚が欠けて歯車軋む音

寂しくてそとと受話器を上げてみる

愛媛県 宮 本 末 子

末っ子で姉が三人兄ひとり

貸し借りの話へ飛んで来た火の粉

島根県 毛 利 幸

もやもやをぶつけて叩く荒れ太鼓

ほろ酔いで帰る約束宙に浮き

鳥取県 山 下 節 子

ピリピリがコーヒーのんで落ち着いた

新米のお医者説明くわしすぎ

鳥取県 竹 森 富久江

繕ったピアノが控えめに喋り

妻のエゴ濁ることばが出てしまふ

鳥取市 谷 岡 清 子

美少女が厚底靴で背伸びする

自然保護叫びつ消える自然林

檀原市 西 本 保 夫

リストラで家計は楽で無い筈に

増改築せぬ方針がうらやまし

人間に生れたのに神の国だった

炎天やあちちちちち あちちちち

大阪市 櫛田周作

毎日が怖くなったよ老後だないいかげん営業電話悟れよな

ビル街の壁に当って風が舞い

紫外線きついが地上風薫る

母の里訪ねて知った母の恋

人哀れわがままのまま好かれない

初孫の鼻の高さを見届ける

愛し息子に疎じられし今の老い

二賞選考応募は最終ページの応募用紙で！

①川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上、出句した人に応募資格を認める。

②平成11年9月号から平成12年8月号までの入選句

路郎賞―同人・川柳塔欄の入選句から8句

川柳塔賞―誌友・水煙抄欄の入選句から8句

③ 8句を楷書で書き、8月15日必着のこと

第12回兵庫のまつり
―ふれあいの祭典―
川柳祭

とき 11月26日(日) 午前10時半開場・正午開会
ところ 西協市民会館(西協市郷瀬町605)

電話 0795-225715

各題1句・未発表作・五名共選

紙
L
春城武庫坊・濱邊
淳・淺雛美智子

真殿舍句里·泉比呂史

走る」 平山 繁夫・助川 助六・山内 一軒

佐藤美子・去来川巨城

音 〔 〕 褶 島 直 球 卜 音 昨 美 前 川 干 淳 子

安川 一 酢、小村所須介

心算方法 所定の用紙、または400字詰原稿紙

半分の作品、左半分に郵便番号・住所・氏名（ふ

りな。性別・電話番号・大会の出欠を明記。

心募締切
9月3日(日)

応募先 7715 西脇市西脇 771-1-7 西脇市生涯学習ま

〒6-00
ちづくりセンター内 祭典実行委員会

当日投句 各題2句・大会出席者に限る

「味噌」 渡辺良比呂 「近い」 大森 一甲

「足」西口いわるゑ

出句料 500円
出句締切 正午

主催 ふれあいの祭典実行委員会・兵庫県ほか

—水煙抄

秀句鑑賞

—7月号から

江口 度

ひと呼吸おくれた返事見のがさず

飯西 ミサヲ

会社でも家庭でもこれ位きびしい観察眼があつてこそだまされずに暮していけます。ただし、目に角たてずに笑顔で対応していきましよう。

ノックただけで終ったお茶お花

大森 純子

三日坊主をノックしただけとはうまい表現です。

じゃあまたね言いつつ続く長電話

久保田 千代

もう切れるかも切れるかとしびれきらしける主人の様子が目に見えるようだ。

次の日にふっと笑えるいい話

江見 清

暗いニュースばかりの世の中こない話
がほは笑ましく思います。

左利きを悩ませている改札機

和氣 慶一

右利きには分らない。切符買うにも右側に投入口があり悩んでいるのかも、見付けの
良い句です。

犬掻きで乱世渡つて来た親父

山本 たけし

犬掻きが面白い表現。親しみの湧いてくる
お父さんですね

読めるけど書けない漢字ばかり増え

中澤 伽羅

全くその通り、共感を呼びます。

喜んでばかりおれない長寿国

木村 正剛

年金赤字とか、これからの青年にはつらい
ことだろう。

落ちこぼれていろいろ知った人間味

須磨 活恵

判官鼻眞の人がたんといましたね。

誘われて見たいと思う臍月

大橋 鐘造

ストーリーには気をつけましよう。

常識の尺度が分かりにくくなる

安野 案山子

IT時代、若者の常識も分かるよう、うん
と勉強しましよう。

サウナ風呂我慢くらべになつてゐる

牧野 芳光

人の心の動きがうまく出ている。
幸せが逃げる愚痴などもうよう

山内 芳江

この向上心に共感します。

まあいいさ妻の記憶に妥協する

井上 京一郎

典型的な恐妻家。家庭がうまくいくなら、
これでいしましよう。共感を呼ぶ。

モナリザに負けない妻のよい笑顔

岡田 幸生

うらやましい。奥さんののりけかも。

悔いのない人生なんてあるもんか

梶本 哲平

あつさりと言つてのけたこの叫びは、ずし
んとこたえる。みなさん悔いのない顔して生
きてるが、本当は……。

どうあろうと平均寿命生きてやる

安達 厚

前向きの気持が出てて良い。私にもやる気
を出せと言われてるよう。

脇役に回り胃袋軽くなる

声田 鈴美

何事にも主役から外れる方が、長生きのコ
ツのよう。

愛染帖

波多野五楽庵選

マツチ棒の記憶のなかの深緑
老人と鳩群れている無音の昼
灰になるまでの時間を歌う骨
泣くものかわたしも意地を持つている
義理一つ果して傘の雫切る
裏表紙告発状を持っている
遠巻きにじつと見ているわが極
終章を飾る言葉がきまらない
寂光をためた海には海の怨
模写つづくモノの世界はまだ知らず
砂吐いて凡愚の穴に閉じ込め
扉の向こうは紛れもない砂漠
異域同舟ポストは昔から赤い

和歌山市 木本 朱夏
今治市 塩路よしみ
富田林市 池 森子
鳥取県 小西 雄々
堺市 桜沢 千世
和歌山市 川上 大輪

砂時計仕切り直しは許されぬ
直ぐ金に見積る癖がなおらない
行間のかすかな揺れを見逃さぬ
花散ってすこし理性をとりもどす
アドリブもジョークも好きな春の風
美しく羽化してみたい姫鏡
紫になろうと脱皮くりかえす
洗われて自信高めていく白よ
二捨三入や々と私もぶらさが
満天の星のシャワーで身をすすぐ
まず橋を渡るそれから考える
快食快眠支えてくれる人がいる
隧道を出ると迷いが深くなり
毎日の不首尾を埋める穴を掘る
ポケットのジョークいつでも取り出せる
試行錯誤の末の答が響かない
泥水が澄むまで息をひそめよう
自由という港で仮面などいらぬ
禁断のいちごのトゲは痛かった

弘前市 高橋 岳水
八尾市 高橋 夕花
松原市 玉置 重人
米子市 政岡日枝子
羽曳野市 徳山みつこ
弘前市 高瀬 霜石
和歌山市 西山 幸
吹田市 山本希久子
鳥取県 田村きみ子
鳥取市 録沢 風花
鳥取市 録沢 風花

炭酸水で割ると美味しくなるわたし
紫陽花のころろ変りは許される
掛け引きは利かぬ一途な砂時計
風の椅子ねずみ花火に火をつける
終章のシナリオ無傷ではすまぬ
SEE YOU AGAINでんどん虫にメール出す
ブラックコーヒーこの身ひとつが読めぬまま
幻想自由大胆に切る鯖の首
じゃんけんの相手がほしい雨三日
爽やかな緑おにぎりがおいしい
神様のいたずら私寡婦となる
懷に澱む昨日の酸性雨
プライドが衿を掴んで引き戻す
傷ついて戻って来ないブーメラン
十和田湖の藍は藍より深からん

和歌山市 楠見 章子
米子市 光井 玲子
岡山県 山本 玉恵
砂川市 大橋 政良
西宮市 門谷たす子
大阪府 吉本 智子
羽曳野市 吉川 寿美
枚方市 寺川 弘一
鳥取県 さえきやえ
米子市 青戸 田鶴
倉敷市 家守 政子
堺市 和田つづや
横浜市 鈴江 純子
和歌山市 福本 英子
弘前市 斉藤 島

東京都 播本 充子

蛇いちご熟れて昼寝が長くなる

和泉市 西岡 洛酔

檜山に旅のカバンはまだ空っぽ

松原市 小池しげお

縄のれん勝負はないと自認する

倉吉市 野口 節子

言いたい事ごまんと持った白い紙

川崎市 和泉あかり

路線バス閉じる日傘へ寄ってくる

大阪市 神夏磯典子

むずかしい言葉は要らぬ胡瓜もみ

海南市 三宅 保州

フロッピーディスク欲張りすぎないか

札幌市 三浦 強一

毎日が日曜という生あくび

寝屋川市 籠島 恵子

解凍しても元にはもどれない

今治市 渡邊伊津志

無器用で芝居の出来ぬ深海魚

八尾市 高杉 千歩

珈琲お代り友の再婚祝う午後

横浜市 菱田 満秋

幸せも過ぎれば詩も出てこない

横浜市 山下 省子

死ぬという大事な仕事まだ残り

八尾市 村上ミツ子

気配りが過ぎて傷口でかくなり

今治市 野村 清美

コロコロとはしゃいで消えた蓮の露

和歌山市 青枝 鉄治

ヒーローを支える舞台裏の汗

香川県 木村あきら

一杯の麦酒で夏を泳ぎ切る

鳥取県 岩崎みさ江

大風呂敷を畳む潮時見失う

鳥取県 土橋 螢

大脳の誤作動五体不満足

大阪府 小林 周信

頬杖にロダンの像も草臥れる

八尾市 村上 剛治

のびきった輪ゴムがあくびばかりする

尼崎市 田辺 鹿太

保護色の男に油断召されるな

唐津市 井上 勝視

水はけの良さでなんとか生きている

米子市 白根 ふみ

別れ上手でなかなか橋を渡らない

富田林市 藤田 泰子

出世魚何度名前を変えたやら

八尾市 生嶋ますみ

バリアフリー付けて用心深く生き

黒石市 相馬 一花

ライオンと同じ塩気のない食事

和歌山市 榎原 公子

友人を過去形にする夏木立

大和高田市 鍛原 千里

切り捨てた尻尾が悪さして困る

横浜市 川島 良子

堪えられる器か神に試される

三重県 尾崎 勤

口笛を吹くとゆつくり日が暮れる

和歌山市 上地登美代

わたくしを磨いてくれるバラの刺

寝屋川市 平松かすみ

弾み癖あるので尻尾つかまれる

岡山県 矢内寿恵子

裏の裏読めて傷つくことばかり

高知県 桑名 孝雄

漢和辞典日本の匂い嗅いでみる

今治市 越智 一水

冬木立闘争心に燃えている

京都市 都倉 求芽

候補者の葉書にしてはうまい字だ

寝屋川市 森 茜

うつうつとした日カトレア開くなり

愛知県 早川 盛夫

サンプルのような子供を抱いてくる

横浜市 金森 徳三

忘れたこと忘れずにいる辛さ

大阪市 本間満津子

プロポーズご冗談をといなされる

弘前市 蒔苗 果林

功德積むように一台列に入れ

岸和田市 宮野みつ江

青臭い奴アボカドの手巻寿司

鳥取市 美田 旋風

二人きり沈黙続くエレベーター

米子市 林 瑞枝

たましいの浮遊している亡夫の椅子

和歌山市

吉村さち子

ゴシップと傘の雪を強く切る

海南市

谷口 義男

値切られる積りで書いた見取り書

豊中市

田中 正坊

出世には縁なし高所恐怖症

倉吉市

米田 幸子

あやふやな儲け話が命とり

弘前市

相馬 銀波

言い訳が墓穴とぼくは気付かない

米子市

小塩智加恵

他所さまの嫁姑を復習中

羽曳野市

西村りつえ

腹立ちに浪費をしたが惜しくなり

茨木市

藤井 正雄

人生の節目決意の駅に立つ

横浜市

近藤 道子

横這いで登るしかない老いの坂

出雲市

園山多賀子

目の鱗落して本音覗かせる

日立市

加藤 権悟

職安で出合つエリートらしき貌

岡山県

小林 妻子

スキャンダルそろそろ止めにしませんか

高槻市

乙倉 武史

亡き妻へ綿々便り綴る筆

横浜市

吉田 裕峰

抜かないで間引かれそうな葉がすねる

倉吉市

山中 康子

生と死を越えた絆はこわされぬ

和歌山市

古久保和子

すり減った指紋で歳時記を捲る

横浜市

巖田かず枝

言い過ぎて味覚障害起きてくる

奈良市

米田 恭昌

すぐ切れる子を持つ親のかずら橋

鳥取県

土橋はるお

欄干を跨ぐ男の児を選ぶ

宇部市

平田 実男

立ち止まるたびに苛立つ万歩計

西宮市

牧渕富喜子

私に気概ない日の水たまり

西宮市

奥田みつ子

内股の野良猫歩く梅雨の朝

弘前市

宮崎ヒサ子

垣根の火消して夏へと移行する

寝屋川市

堀江 光子

人去って花やすらぎを取り戻し

富田林市

中井 アキ

弟の名前が大きくなってきた

横浜市

長島亜希子

保険料元をとるぞと医者通い

吹田市

石原 靖巳

一枚の歩でも流れを変えらるる

倉吉市

淡路ゆり子

三つある眼鏡はみんな宙プラーン

米子市

木村富美子

うっかりと生きてうっかり山へ行く

鳥取市

岸本 孝子

貸した金うるさいほどに念を押す

唐津市

相葉 あき

ヒロインという役一度はしたいもの

大阪市

三浦千津子

方便の嘘効いてるなこそばゆい

富田林市

大橋 鐘造

下り坂みんな他人の顔になり

和泉市

横山 捷也

紫陽花に合わせた壺を見繕う

米子市

門脇 晶子

背凭れの椅子をねらった猫がいる

美祿市

安平次弘道

ブランド品妻は旅行に行きたがり

大阪府

榎山 隆盛

公平にメロン五つに切った母

東大阪市

北村 賢子

太陽を丸ごと抱いて露天風呂

泉佐野市

稲葉 洋

少年期の影が残っていた郷里

唐津市

宗 水笑

何人の手垢の果てや諭吉さま

和歌山市

山口三千子

悔いのない余生わが身の置き処

和歌山市

田中 みね

三人三様孫の個性を楽しまん

八尾市

山本 宏至

耐えること知らず育った身の不幸

横浜市

保田 絹子

追悼に知られざる師のプロフィール

松江市

川本 畔

運命と片付けられた流れ雲

受賞体験記

おお 富士は

日本一の山

黒川 紫 香

全日本川柳協会より六月十一日、東京神宮外苑にある日本青年会館で催す第二四回全日本川柳二〇〇〇年東京大会に於て、永年川柳の向上指導をされた功績と長寿を祝い表彰をしたという通知を戴いたので出席をした。年齢九十二歳を越え単身での上京は無理だと娘達の申し合わせで三女夫婦と、もう青年になつてゐる孫の三人が付き添ふ事になり、それも周囲の反対を押し切り自家用車で行くので少し揉めたが、混雑の中階段を行き来するのは辛いという私の意見を汲んで車にした。東京まで片道五百五十キロの道程、梅雨の最中とはいえ渋滞を想定し、大阪を六時半に出てそれも東名高速は混むというので小牧から中央高速を走った。南北アルプスに挟まれた天竜川沿いを飛ばしたが、降りしきる高原

の中では景色は見えなかった。

昼食で寄った諏訪湖を眼下にしたエリアで小雨になった故もあり、広大な眺めが良かった。トイレ休憩二回を入れてもスムーズに走れて宿のある新宿に着いたのは午後二時半だった。七時間で走れた。

翌日の大会も雨、十時開場という日本青年会館の大ホールはもう一杯だった。昼食後、約八百近い参加というマイクを聞いて幕が上がった。参議院議長、文化庁長官、其の他の御臨席で大会が開かれ型の如く会長の挨拶、臨席の方々の祝辞があつて表彰式に移る。表彰されるのは全国より十数名と発表されたが、出席したのは私を含めて九十六歳を頭に三名、皆さんご高齢で止むを得なかったのでは。

仲川日川協会長から表彰状と記念品を贈られ満場の拍手の中を幕が下りる。しみじみと



長生きをしていて良かったなと思つた。

少憩の後、幕が上がって大会の本番となり、各選者から入選句が読み上げられ佳句優秀句が発表されたが、私等は其の夜箱根泊まりと決めていたので、少し早目に失礼して車に飛び乗りまた雨煙の中を東京から離れた。

少し小ぶりになり、やや視界が開けたので二時間弱で東名高速道を御殿場を下り、箱根山中、地図を頼りにさまよいながら走る。深い緑の樹木が覆いかぶさり不安になつたが、乙女峠のトンネルを抜けた途端、「アツ富士山だつ」

と誰かが叫ぶ。気が付くと目の前に大きくて濃緑色の衣をまとい下半分をふわりとした白い雲に身を隠して正に霊峰富士がくつきりと姿を現していた。

「ソレツカメラだ、みんな集まれ」

思いもしなかつた富士の出現に慌てふためき、気がつくとも暮れかかる箱根の空の雲が少うし割れて明かりをさしていた。

旅好きの私が長い年月の間に新幹線や飛行機の窓、海を隔てた伊豆の海岸または三保の松原、富士五湖から見た富士とは違つた味わいのある富士だった。

正に富士は日本一の山である。
いや世界一だとも思ふ。(平成十二年六月末記)

苜蓿のむ

宮西弥生選

苔の花の慈悲いだいて無縁墓
シャボン玉嘘をつけないから壊れ
洗うたび昔の傷が出る白よ

ふつつかな妻の形で生きている

さくらんぼ熟れるこの世を見直そう
曲り角を上手に曲れセブンティーン

わたしにも舞台下さい花菖蒲
切り傷の二つ三つは人並みに

極楽というにはせまい空間だ

大きさを言えばあなたの海の青
夢のまた夢と知りつつ夢を追う

樹をゆする答ばらばら落ちてくる

たった一度の風に蹟く親不孝
頼られて姑は母になっっている

おしゃべりの輪からいたかく生きる知恵

どの針もさびて女を置き忘れ
姉を見る私の未来見るように

おとぎ噺となった山菜採りの夫婦

好奇心道草ばかりしてしまふ

鳥取県 岩崎みさ江

和歌山市 福井 桂香

米子市 政岡日枝子

藤井寺市 太田扶美代

和歌山市 西山 幸

藤井寺市 高田美代子

八尾市 高橋 夕花

羽曳野市 吉川 寿美

鳥取県 土橋 睦子

富田林市 池 森子

大和高田市 鍛原 千里

吹田市 山本希久子

倉敷市 小野 克枝

尼崎市 内田美也子

横浜市 保田 絹子

岡山県 山本 玉恵

富田林市 藤田 泰子

米子市 林 瑞枝

芦屋市 黒田 能子

トンネルは近道だったはずなのに
眉落としその日その日の顔つくる
それからは強くなれよと泣きボクロ
あのひとに返し切れない借りがあ
窓ガラス拭いてやさしい顔になる
不器用な靴で近道まだ知らず
モデルハウスは見るだけに入るもの
噂していそうなかを通り抜け
さよならをした訳ではないがでも疎遠
それぞれの器で仮の世を泳ぐ
一杯のコーヒーからの会者定離
合わせ鏡うなじの鬱を見してしまう
手ごたえはないけど歩く道がある
相槌を打ったばかりの不整脈
何となくほっとしている第五週
美しい文字美しい人だろう
夢分析こんな私がひそんでた
いつからか影が他人の顔をする
雨三日雨のつぶやき聞いてやる
紫陽花の時間で乗り切る更年期
許される許す人の世落けて住み
苦労性すぎて魚をまた焦がす
あやめ見る日の雨は苦にならず
母を見るほとんどの笑顔出さきつて
胸に充つ郵便受けのぬくい風

倉吉市 淡路ゆり子

横浜市 清水 潮華

倉吉市 野口 節子

八尾市 井尻 民

八尾市 生嶋ますみ

和歌山市 吉村さち子

寝屋川市 平松かすみ

八尾市 宮崎シマ子

寝屋川市 籠島 恵子

鳥取県 石谷美恵子

熊本市 永田 俊子

出雲市 園山多賀子

鳥取県 西原 艶子

岡山県 矢内寿恵子

羽曳野市 徳山みつこ

寝屋川市 坂上 高栄

池田市 栗田 久子

米子市 澤田 千春

鳥取県 さえきやえ

和歌山市 楠見 章子

伊丹市 榎谷 郁子

寝屋川市 岸野あやめ

富田林市 片岡智恵子

鳥取県 田村きみ子

西宮市 門谷たず子

じゃがいもの毒の芽何を拗ねている
 言いたきを振り切る朝の換気扇
 人の字の支えであつた夫が近く
 心の奥へ忍の一字書いて置く
 領けば明日も晴れることだろう
 味方でも敵でもない気がかかる
 断りをはっきりと言う片えくば
 許されぬことをしたいおじぎ草
 気忙しいお方だ話食べられる
 ゴムバンド締めて緩めてもつゆとり
 笑いなさいホーラ美人になりました
 法話から許す心を諭される
 半惚けの母と気長い旅の途次
 コンバクト閉じて成算ついた顔
 老いの身に未知の峠が待っている
 梅干しの甕が正座を崩さない
 筋道を通せば孤独深くなる
 何もいらぬといいながら買う日焼けどめ
 火傷せぬ距離で身の上話聴く
 信じてる人へ幸せ演じきる
 賑やかな声が聞こえる墓の中
 言い負けた薔がやつと芽を伸ばし
 子守歌ホームシックな船だろう
 でたために作つたおかずおいしゅうて
 怒ってる女のハサミ良く切れる

今治市	野村	清美
西宮市	牧瀬富喜子	
大阪市	川久保睦子	
和歌山市	上地登美代	
和歌山市	桜井	千秀
西宮市	奥田みつ子	
和歌山市	福本	英子
藤井寺市	鴨谷瑠美子	
大阪市	渡部さと美	
堺市	桜沢	千世
堺市	志田	千代
米子市	小塩智加恵	公子
和歌山市	榎原	公子
寝屋川市	堀江	光子
倉吉市	山中	康子
和歌山市	古久保和子	
大阪市	板東	倫子
尼崎市	春城	年代
鳥取市	植田	一京
八尾市	高杉	千歩
横浜市	川島	良子
東京都	後藤	早智
松江市	川本	畔
大阪市	本間満津子	
東京都	播本	充子

化粧する何かいいことありそうな
 ばあちゃんの繕ったシャツ着てくれる
 水切りが下手で根腐れする愛よ
 芽を摘んだ鉢に罪はないけれど
 ぴちぴちのコギヤル私も来た道だ
 雷の無い日は妻が威張ってる
 一城のあるじ頑固の枷を履く
 爽やかな愛をかじって熟れる桃
 均等法夫に増えた化粧品
 一杯の紅茶に脳が蘇る
 戻れなくなるかも知れぬ角曲がる
 お互いに気づかぬふりをする素顔
 洗たくがすっかり乾く風の彩

西宮市	西口いわゑ
寝屋川市	森
香芝市	大内
今治市	塩路よしみ
米子市	木村富美子
大阪市	神夏磯典子
大阪市	津守
羽曳野市	西村りつえ
川崎市	和泉あかり
倉敷市	家守
横浜市	鈴江
東大阪市	北村
貝塚市	池田寿美子

みさ江さんの句―何とも安らぎのある句。騒然とした世の片隅に眠る仏の自然のいきづかい。これぞ仏の慈悲であろうか。特に「苔の花」と「無縁墓」の結びつきが最高によい。桂香さんの句―瞬メルヘンの世界に導かれたものの、七彩の物体はあくまで憧憬に過ぎない。だから美しいし、手が届かない。虚偽の仮面もない。また、何時までも消えずそのへんにさまよっていれば気持ちが悪いかも知れない。日枝子さんの句―忘却という逃げ道があつて人間は救われるが、生身に受けた傷は消えない。そうは言っても脱皮して解決しなければ道が開かない。作者は結局、洗つても洗つても消えない過去と共に生きるのが人生だと達観している。流石です。扶美代さんの句―驕りのない育ちの良さと、出来の悪さを一生懸命努力して、ひたむきに妻の字からこぼれず生きている。努力賞を差し上げたいと思う。



訪ねる



— 96 —

遠来の友へ地酒の栓を抜く
お手紙拝受梅雨の晴れ間に訪ねます
訪問者減って気楽に年をとる
ふびさに訪ねて命温める
ふるさとが訪ねるたびに他人めく
ふるさとを訪ねる鍵は錆びたまま
思い出を訪ねた恋は消えている
お寄り下さい転居通知の小さい文字
投票の前夜訪ねてくる忍者
陳情で訪ねた市長無口なり
ヘルパーの訪問を待つ寒い部屋
単身の夫を不倫のよう訪ね
陳情書持って訪ねてくるという
遍路道訪ねる足に欲が解け
病室の扉の前で深呼吸

岳水 陸子 無緑 富美子 宏章 ツネ 邦昭 さち子 一花 四郎 芳水 俊路 螢 洛醉 たず子 しげお はるお 保州 隆風 妻子 日枝子 雄々 川上太輪

泥

井上勝視選



泥沼の深さ知らずに借りにゆく
女とは涙ぐましい泥バック
泥だらけの人生だけと悔いはない
泥んこの中にこどもの夢がある
夏休み田舎の泥が待っている
わたし焼く煙はきつと泥臭い
まだ懲りずどうにもならぬ泥バック
地下足袋の泥はノルマを語らない
泥仕合終わり離婚の判を押す
恋泥棒あの日の君は若かった
和を学ぶ泥だ子供ユニホーム
泥遊び知らず育って十七歳
水害の泥水洗う水がない
泥なめた日から大人の貌になる
泥いじり好きで蕾の数増やす
甘い水に誘われ乗った泥の舟
泥舟にすぐ乗せられるわたしです
泥舟と判った時はもう遅い
あなたとなら一緒に死ねる泥の舟
泥んこの中で覚えた処世術
泥かぶる覚悟夫の手離さない

美津子 富美代子 剛治 典子 隆風 剛路 俊野 遠野 柳弘 正雄 あやめ 千代 霜子 康子 俊子 ミツ子 あきら さち子 しげお みつこ たず子

泥舟の中でも二人信じ合う
母親は泥を被って子を庇う
泥水の上澄み見せる総選挙
泥水をかぶる覚悟の石を投げ
泥かぶる覚悟が出来たとき男
泥かぶる覚悟の上の上申書
ひと握り泥のいのちを歎く知る
大型の泥除けがいのちの公用車
国債の汚泥積もっていくばかり
裏話たっぷり泥のなすり合い
泥かぶる道だが敵は正面だ
泥はねの車が詫びた白い杖
肩書きについた泥から強請られる
胸底のヘドロは愛の骸かも
人生の泥舟しかと棹をさす

シマ子 雅城 哲男 芳水 朝美 寿論 愛論 啓子 英子 四郎 靖巳 ツネ 勇太 勇太 正剣 たもつ 岳水 洞庵 満秋 扶美代 保州 川上太輪

初歩教室

題 一 軽 い

吐 田 公 一
は だ きん いち

この教室の方々からいたたくお手紙の中に、よく私は私なりのマイペースで学んで行きますのでよろしく、との文面をお見受けします。勿論このことは大切なことで私も大賛成。

人はそれぞれその歩幅が違うように、人生経験が異なり、考え方も異なってくるものです。ただ、その経験なり考え方が特殊（地方性や特異環境など）な表現となると、選者といえども未知な世界のこととなり、その内容を捉え難い場合があるので、作句に当ってはご留意いただきたいのです。

添削句

○介護する妻が軽くて未だ背負い 輝夫
下五の中の未だに引っかかりを感じる。

▽介護される妻が日毎に軽くなり

○怖い世だ軽い言葉でセクハラに 周作

上五が大きな表現

▽セクハラを軽い言葉でふれまわり

○寝たきりの母逝きわが身軽くなり 好勝
本当の気持を詠まれたのであろうが、母の死を下五のように詠むのは私としては同感でしかねる。修さんの佳句をご参考

▽寝たきりの母の柩の軽いこと

○ことの起りは軽い気持でついた嘘 泰雄

着想はいい。原句に拍手か

▽予期しない波紋ひろがる軽い嘘

○軽い風邪たかをくくって肺炎に 敬之介

具体的でいいのだが

▽入院へたかをくくった軽い風邪

○喋り過ぎ人柄軽く見られてる

上下を入れ替えてみると

▽人柄が軽く見られる喋りすぎ

○ナイフから軽い命にされぬよう

下五で説明句に陥っている。

▽十七が軽い命にするニュース

○おしげなく捨てる気になり軽き身よ タツエ

下九音字がなおざりな表現

▽ひとり身の気軽さおしみなく捨てる

○宰相の軽い言動も余し 純

（八重子さんの佳句をご参考に）

○子の心お手軽食事じゃ育たない 洋子

少年の非行を採り上げるとするなら——

見付けはいい。

▽お手軽な食事で育つ子の非行

○鏡のねが軽く遠くに夏まつり 民

鐘の音が——ではないのでしょうか。誤字

や不用意な仮名表現は読む人を迷わせます。

○早や一年軽いジョークが少し出る 幸枝

上六の表現内容が不明。読む人に分るよう

に具体的に

▽病み上り軽いジョークが少し出る

▽死別から一年軽いジョーク出る

○少年法刑の軽さを感じさせ 文江

下五を

▽少年法刑の軽さが疎ましい

○中立の相槌軽くながしとく 栄翁

上五が安易。言葉探しには苦勞するが

▽相槌は軽く打つとく保身術

○口止めし言った相手は軽かった 三美恵子

全部を読み込んだため説明句となった。

▽口止めをふれ廻つて軽い舌

○骨壺の軽さ偉大な父忍ぶ 舞夢

骨壺の軽さへの情感がでていない。

▽骨壺が軽い遺業に比べれば

○荷を担ぐ友の数だけ軽くなる 勤

担ぐ人数が多ければ荷が軽くなるのは当然

▽責任を軽くしている合議制

○軽はずみでは済まされぬ首相の座 尚士

説明句に近い。

▽失言が続く首相の軽い口

○頼みごと輕い返事に胸さわぎ たえ

下五が遊離。誤字のないように

▽頼まれて輕い返事をして悔いる

○人生は輕いものだね生きている

下五がなおざり。着想は面白い。

▽人生を輕くみている影法師

○輕率に釣った魚が外れない

輕率にややひっかかりを覚える。魚を擬人化すれば 象山

▽輕い気で釣った魚に餌とられ

○氣をつかわずに話の出来る輕い人 円女

お孫さんを詠んだ句の方に輕口が使われて

いたので、これを活用すると

▽輕口をたたき合つてゐる老い同士

○惡友へ断りの種輕い風邪

てにをはの添削 一典

▽惡友へ断わるねたの輕い風邪

○一枚の輕い葉書に愛を盛る

一枚・葉書とあれば当然に輕い。 深雪

▽一枚の葉書へ熱い愛を盛る

○輕い気でどうぞと余り云わないで幽雅子

具体性に乏しい。句意は異なるが

▽シルバースhirt輕くすめて断わられ

○身輕さと久しく無縁親九年

中七が冗長で、下五の表現が雑

▽身輕さと無縁同居の三世代

○梅雨晴間輕い風にも撫ぜられる 志津香

人間を詠むには撫でるより、うつ(鬱)な

ど具体的に詠めばよかったのではと思つ

▽梅雨晴れ間うつ忘れさす輕い風

○待ち兼ねた給料袋の輕いこと 知華子

○リストラで給料袋も輕くなる

この二句は類想句の一例。この外にも母が

輕い、身輕さ等々の句が多かつた。

▽リストラで地位も給料も輕くなり

○心辺の整理をすませ身が輕い よしこ

誤字に氣をつけて下さい。心辺↓身辺

▽整理してひとりぐらしの身の輕さ

○輕いけどずつしり重い契約書 裕峰

ずつしりが冗句といえる。

▽一枚だが中味は重い契約書

○ダイエツトすこしは輕くなつたかな 羊子

ダイエツトで輕いが含まれる。

▽期待したほどに進まぬダイエツト

○輕い靴はいて旅行に出かけよう 美寿子

全くの説明句。期限内に到着するように

▽輕い靴はいて出かける老いの旅

佳句

輕くジャブ出して相手の出方みる

輕いジョークが重い會議を和ませる

両まぶた輕く閉じれば亡夫の顔

酒の口輕く本音が滑り出し

連休に弾む揃いのスニーカー つよし

それ以上言うなと妻の輕い咳

お氣輕においでください福の神

百円のビールで憂さが晴れるなら

プレゼント輕い箱だが愛こもる

輕々と押して破滅の保証印

ケセラセラ明日は明日の風が吹く

ギブス取る足安定のない輕さ

氣まぐれな噂を輕くないなされる

言い勝つたセリフに輕い嘘もある

茶柱を信じて朝の輕い靴

神の国いさめられても輕い舌

啄木と同じ思いで母を背に

ニュース聞くたびに命が輕くなる

念押した約束輕く破られる

約束を終えた帰りの輕い靴

一枚のカードに残る重いつけ

欲一つ捨てると心輕くなる

賛成と輕い手上げてから迷い

火がついた輕い氣持でついた嘘

夕焼けに消したい今日の輕い嘘

(着想がいい)

こんなにも輕い極の母送る

(母への思いが如実に)

私の句

鴻毛のいのちと思う医療ミス

無縁

美智子

鈴木

宗明

トヨ子

宏至

榮子

芳江

和可

セツ子

サト子

あきら

君江

梓

敏子

伊玲子

美弥子

修

わたしの川柳行脚

高瀬霜石

わたくし、生まれも育ちも津軽・弘前、川柳人の末席に名を連ねてまだ十数年、ましてや「川柳塔」の同人になったのはつい最近の新参者です。これを機会にこれからもよろしくお願い致します。

十五年ほど前、他界した父の小さな会社を私が引き継ぎました。そして父の一周忌も終えて、仕事もまあどうにかやれるかなと少しは自信みtainなものを持ち始めた頃のことです。高校の先輩で日頃いろいろお世話になっているS氏に突然川柳に誘われたのでした。

その頃の私は、「川柳なんてそんな爺くさいものはまっぴら御免。俺の身体はビートルズと手塚治虫で出来ているんだ、冗談じゃねえやい」と思っていたのですが、なにせ敬愛するS氏の頼みでは断るわけにもゆかなかったのです。後で聞いたのですが、実はS氏もまたある人にずーっと前から句会に誘われていて、「億劫だが」一回は行かなくては義理が

悪いし、どうせなら誰かを道連れにしよう、そうだ、高瀬君なら結構それ向きだし、多分僕の頼みを聞いてくれそうだ」ということなのでした。S氏から見れば、私に川柳のセンスがちよっぴりでもあるように見えたらしく、つまりは氏に私が選ばれた(？)らしいのです。そしてやむなく、一回限りという約束で渋々おつきあいましたのでした。

着いたところは某医院の厚生会館、それなりの年配の方がずらり居て、皆腕を組んだり、頭を掻いたりしながらもシーンとして、ロツクンロール世代の私から見れば正しく異様な光景でした。

「宿題(関西では兼題でしたか)作ってききましたか?」と聞かれたので、「えっ、宿題なんてあるのか。これはヤバイ所に足を踏み入れたぞ」と内心思いました。元来「宿題」と聞いただけでジーンマシンが出るタイプなのです。そのへんを素早く川柳社の先輩が察したか、「ではそれはいいですから、席題を作りたいなさい」というので、「証拠」という題で生まれてはじめて作り、運良く抜けたのが「中年の証拠に深いへその穴」という句でした。あ、恥ずかしい。

「川柳って面白ければいいんだ、ちようど今のサラリーマン川柳みたいなものがすなわ

ち川柳、そんなものならチヨチヨイのチヨイさ」と思っていた私が「本物の川柳」に出会い、頭をガーンと殴られて一念発起、長い長い川柳の旅に一步踏み出すのは、それから間もなくのことでした。

出稼ぎの父の長靴履いてみる

或る日、先輩が「これが川柳というものだ」と言って私に見せてくれた中学生の作品だというこの句に出会い、私の川柳観は一八〇度変わったのでした。

この句の作者は、出稼ぎに行つて家に居ない父さんの長靴を履いてみてどう思ったのだろう。あんまり大きくて、ついため息をもらしたのだろうか。早く大きくなって僕も働こう、父さんの手伝いをしよう、そうすれば家族一緒に暮らせるのに、と思つたのだろうか。それとも、出稼ぎからしばらくぶりに帰ってきた父さんに会うのがなんとなく恥ずかしう、ましてや弟や妹のてまえ素直に甘えることもできず、玄関に脱ぎっぱなしになっている長靴に足を入れてみて父さんの体温を感じたろうとしたのだろうか。

正解は作者のみ知るところでしょうが、どっちにしろすでにこの句は作者の手から離れて読み手に委ねられているのです。つまり、

正解なんて無いってことがわかった時、私は川柳の神髄に触れた気がしたのです。

だいぶ経ってから、この句は全国のこども俳句大会とかで大賞を取ったものだと言明したのですが、私にとってはそんなことはもうどうでもよく、川柳の魅力に首までどっぷり浸かり、県内は勿論、東北各地の大会を駆け回っていたのです。

そして時は流れ、若かった(?)私も中年男になってしまいました。「弘前川柳社」「青森県川柳社」は当然としても、誘われるまま「かもしか川柳社」「川柳展望社」そして「川柳塔社」に所属していて、毎日あっちこっちに駄句を書きながら、はじめは川柳を追いかけていたはずの自分がいつの間にか逆に川柳に追われる日々を送っていることに気づきました。

平成十二年正月、今年はずいぶん二〇〇〇年、そして私もちょうど五十歳。この際、世間のしがらみをあえて断ち切り、二千年(二專念)に因んで二つのことにひたすら専念しようとして誓ったのです。

ひとつ目は勿論おまんまの種である仕事、そしてもうひとつは私の一生のパートナーになるであろう「川柳」を再度追いかけてみる

ことにしたのです。

そんな時、この三月から弘前にミニFM局が開局することになり、私が川柳番組を受け持つことになったのです。毎日(月から金まで)十分間、週一回ならまだしも、毎日っていうのは結構大変なのですが、なにせこの会社の社長が私の同級生なので断るわけにもゆかず、どうせやるなら楽しくやるべいと、思い切って引き受けたのです。

いままでの私は川柳誌が届いた時だけザツと目を通して、後はほったらかしが常でしたが、この仕事を引き受けてからは随分キチンと中身をチェックするようになりました。私が最近読んだ句の中で、今一番惚れている句は「川柳塔」から拾ったこの句です。

おとなしい動物だから角がある

田中 正坊

正坊氏の句集『ペンシル』は傑作です。いつも句集を読めばすぐ眠くなる私が、氏から頂戴した『ペンシル』に限りは何度でも何度も読み返したものでした。

恥ずかしい国だがやはり僕の国

この句は「古くとも僕には仁義礼智信」と共に、私の愛唱句になっています。そんなわけで、氏は私にとって「理想の背骨の持ち主」なのです。

昨年の「川柳塔まつり」にお邪魔して、大会の翌日、大阪の句碑巡りを楽しみました。その時一緒に一緒したのがウイットにとんだ紳士、高杉鬼遊氏と観音様のように優しい西出楓楽さんでした。鬼遊氏は川柳塔の大御所ということは何論知っていましたが、なにせ「鬼」が付いている分、恐そうな方だと思っていたのですが、半日一緒に居てすっかり人柄に魅せられてしまいました。そして、こういう方々に毎月句会でお会い出来る関西の人たちはなんて幸せなんだろうと、正直思いました。その時以来、お二方は私の憧れの人になりました。

数年前から私が勝手に兄貴分と慕っているのが鳥取の人、新家完司氏です。氏の『平成五年』の後書きにある「平明で深い句を理想としているが『平明』を想えば平凡に、『深く』を指せば難解になり勝ちなものである」の一文を私はいつも反芻をし、川柳作句の基本として肝に銘じています。氏の『平成十年』の紹介文を氏からの依頼(命令)で『川柳塔』に書かせて貰ったのは光栄でありました。

こうしてみると「川柳塔」の諸先輩は私にとっても大きな存在の方々ばかりです。これからも諸先輩に学び、「平明で深い句」を目指していくつもりです。多弁多謝。

いずも川柳会七十五周年記念川柳大会

尼 れいじ

記念大会は一年前から計画し、再々会合を開き、その都度飲むことも忘れず準備を進めてまいりました。

題は原章峰さんが私の父縁之助の句集の中から、句に使われている文字を選んで決定、選者の方々に電話で依頼し、快くお受け頂きました。会場を出雲ロイヤルホテルと決め、最初の話し合いに章峰・ちかし・れいじが出向き、大まかな事を決め、早速案内状を作り川柳塔社をはじめ、他の柳社へも配布をお願いし、多数の参加を心待ちにしておりました。

最初に本社及び堺川柳会で二十余名参加予定とファックスが届き、幸先の良い足に喜び、この柳社から何名、あの地区から何人を取らぬ狸の皮算用、私の勝手な予想で百八十名の御参加と決めました。その後、参加者がふくらみ二百名を超えるのではと、嬉しい悲鳴をあげた時もありましたが、急の不参加などで最終的には奇しくも予想通りの百八十名の御参加となり、かつてない大盛会にしていただき心から厚く御礼申し上げます。

さて、大会前日最初の御一行様大阪より松江駅に着かれ、薫風主幹・天笑理事長をはじめ、顔馴染みの方がつきつぎに改札口を出て来られました。出迎えた川柳塔まつえの恒松町紅さんと私は章峰さん手配の車に私が頼んだ運転手が待機している所まで御案内し、先ずは天笑さんと深い交遊のあった柳楽鶴丸さんのお墓にお参りました。

それから皆さん御希望の紙漉きの里・安部栄四郎記念館へと向かい、見学後、待望の紙漉体験に満足されたのではと思います。

紙漉きの里から歓迎会場までには時間があまり過ぎ、時計と相談しながら帰り道にある出雲風土記の丘へ御案内して古代人の暮らしに触れていただきました。荒神谷遺跡から出た銅剣が展示されており、しばし楽しめたので、帰りに少し横道になりますが荒神谷遺跡に寄り、出土した場所をつぶさに見ていただきました。

また、その出土場所までの五分程の通路の右側一面は三段・四段になっている棚田で、

有名な大賀博士が発見された二〇〇〇年ハスが広大に咲き誇りと言いたいのですが、残念ながらその時はみんな蓄でした。その二週間後、行ってみましたら穴割近く開花して見事でした。

それはそれ、五時半会場着という時計とのにらめっこ。まだ時間があるし、明日は無理だろうからと、左利きの方御愛用の島根ワイナリーに御案内し、たっぷり試飲して楽しんでいただきました。

五時半歓迎会場着、会場では大いに盛り上がり、地元柳人共々、久しぶりに関西の方々と一緒に一夜が過ぎましたこと本当に嬉しく、思い出のページとなりました。歓迎会も和やかで賑やかなうちに閉会、明日の大会に天をとることを夢見て、旅の夜を過ごされたことと思います。

大会当日の朝は地元柳人全員八時集合と声を掛けてあり、私は昨日御案内できず今日に約束してあった出雲大社・日御碕を観光していただく車を用意して八時前に着くと、地元

の人々が多数集合していました。ベテランの多賀子さん・昌枝さんに観光案内をお願いし、関西の方々には八時に出発されました。

その後、受付準備・大会幕・賞品の展示・花活け・来賓・選者の接待・昼食の手配・司会との打ち合せなど、てんやわんやするうちに参加者の方もボツボツ来られました。

何か落ち度はないかと心配しているうちに席が足りない、昼食が足りないということになり、その補充などに手を取られていると、出雲市長が来られました。

衆議員選挙の真つ只中で御多忙ということもあり即刻開会。最初の挨拶は私でしたが、殴り書きの原稿は持って出たものの、目線が合わず、原稿なしで思うまま話して、司会の草丘さんが早く終るよう合図しているのも目に入らず、ついつい長い挨拶になってしまいました。この大盛会に浮かれてしまったのかも知れません。

次に出雲市長・西尾理弘さんの祝辞、力強い話し方、また今後とも出来る限りの支援したいというお話に誠に有り難く思いますと共に、文芸に非常に力を入れている市長に期待しているところです。

いよいよ薫風主幹のおはなし、場内シーンとする中、物腰やわらかくおはなしが始まり

ました。私は次の段取りやら、軽い食事でもしておかねばと失礼をまかえりみず、中途席を立ちましたが、多分父縁之助のお話が出るだろうという気持ちから何か居づらい気分です、申し訳なく存じました。その後、いずも柳人の方々から主幹のお話を聞き涙が出ました等伺い、薫風先生の心あたたまるお話に改めて御礼申し上げます。浅学菲才な私、こゝろが三代目会長として会を継いでいることを今更ながら恥入ると共に、川柳塔社はじめ各地柳社の方々、またいずも川柳会同人の皆さんに支えられているお蔭と心から感謝申し上げます。

さて、いよいよ披露、川柳塔まつえ吟社恒

いずも川柳会75周年記念川柳大会



挨拶する尼れいじ会長

松町紅選に始まり、本社理事長河内天笑選まで滞りなく進み、最後に特別賞遙山賞を七題の天位から薫風主幹に選をお願いし選んで頂きましたが、嬉しいことに、いずもの同人佐藤治代さんに決定。

大夕陽逆立ちしたくなってきた 治代

主幹より特別賞授与、かさねがさねの喜びでした。

句会は無事に終了、隣に準備している懇親会会場へと移っていただきましたが、懇親会に出席されない方々には御礼も言わず失礼したことをお詫び申し上げます。

懇親会では四絡婦人部の有志による出雲名物どじょうすくい踊り、とんぼら川柳会景山かずこさんの踊りと賑やかに会を盛り上げていただき感謝、感謝です。

会場内も不手際が重なり、御迷惑をおかけしたことを申し訳なく存じています。

懇親会の途中で帰りを急がれる方もあり、ロイヤルホテルの送迎バスで駅までのピストン運転で皆さんをお送りし、当日泊りの夢草さん一行と二次会で大いに語り楽しい一夜をすごしました。

帰宅後、楽しかった夢を見ることもなく、ただ、ただ、ぐっすり眠らせて頂きました。みなさま、本当に有難うございました。

あおば川柳会五周年記念句会

五周年記念句会を

終わって

菊地政勝

首を長くして待っていた記念句会もあつと言う間に終わりました。今まであちこちの句会へ顔を出していましたが、お客の顔での参加、今度はお客をお迎えする立場で緊張しました。そもそも昨年の川柳塔祭りのあと満秋さんから構想を聞かされ、大会を開いた経験のない私たちは戸惑うばかりでした。私たちは一致団結してやれば何とかなるさと、お年を召した方にもそれぞれ役割を分担していただき準備に取りかかりました。

私たちは経験が無い、能力も無い、その上カネも無いの「三無い族」ですが何とかなるさという満秋さんの言葉に励まされ、気楽な気持ちでいたのですが、その満秋さんが肝臓に何かあると言って入院してしまい遂方に暮れたものでした。会場も交通に便利で青葉区の住環境をアピール出来る場所ということで青葉台フォーラムに決定しました。

また開催日は、あおば川柳会の年度が六月

で満ちると、他所の句会日となるべく重ならないように考慮して第四日曜日の二十五日と決めました。そして記念品には毎年一年分の成果を問うべく発行してきた『青葉若葉』の第五集を差し上げることにしました。準備は着々と進められておりましたが、満秋さんの手術が四月三日と決まり正直言って私は「大丈夫かいな」と思いましたが、あとは神に祈るばかりでした。まだ面会謝絶のICUに居る満秋さんを見舞った時は満秋さん不在でも大会は開催しなくてはならないと覚悟を決めたものでした。

それが何と術後半月で退院、近づく期日に次々と指示をされたのに私たちが励まされた感じでした。

いよいよ句会当日、会員全員が役割を分担しているのを少し早めに集合、駅頭の案内、句会受付、懇親会受付、誘導係が配置について案内しましたが、ご不満も聞かなかったので順調にいったと思っております。

私は後藤早智さんと句会の司会を受け持つておりましたので、河内天笑さんの講演も半ば上の空、入選句のご披露も他所事のように聞いておりましたが、会場の雰囲気は今まで

に経験したことがないくらい和やかで、且つ初心者も真剣な顔つきに緊張を覚えるほどでした。披露もほとんどん拍子という言葉が当てはまるように進み、定刻に句会を終わることが出来る司会者としてはその責任が全うされたと思います。初めての経験にも拘らず役割を分けて担って協力して頂いた会員諸兄姉や、配慮の不足にも不満をおっしゃらなかった句会ご参加の川柳家先輩達に改めてお礼を申し上げます。

五周年を記念することがこんなにも難しいこととは思いませんでした。終わってみて、やれば出来るものだなと会員みんなで言っておりますが、この力を川柳にも応用して薫風主幹の言われた「いのちある句」を遺すべく努力したいと思えます。

懇親会の

司会を終えて

小野 句多留

緊張の中で進められた入選句の披露が終わり司会者が閉会を宣言した時から、いよいよ私の出番となった。句会場を懇親会場に衣替えする三十分に、最終打合せをしようと思っ間もなく準備完了。六十名の宴会となりました。司会を仰せつかった時から、いかに緊張を解きほぐすかを考えておりましたが、本人の方がコチコチになってしまいました。幸い

清水潮華さんが前半を受け持ってくださったので気を落ち着ける時間があって助かりました。自己紹介のあと、あおば川柳会を代表して菱田満秋氏が遠来の方々に対し謝辞を述べるとともに、二十一世紀をにらんだ抱負として十周年にも記念句会を開催すると宣言して開会、神奈川県川柳人協会会長唐沢春樹氏のご発声により乾杯、フルートやギターの演奏を聞きながらお料理に舌鼓をうつ人、隣人と句会成績など歓談する人や、久しぶりに会う遠来のお客さんの席へ挨拶に伺う人と、会場はたちまち社交場となりました。演奏も芸術的なものは一曲ぐらいにして古賀メロディなど馴染みのある曲で肩の凝りをほぐしてくれました。アルコールは制限なしとのことで各テーブルのボルテージもかなり上がって来たところで、宮村ちよ路さんの謡曲高砂を皮切りに隠し芸のご披露となりました。



菱田満秋会長

三唱。十周年記念句会に薫風主幹、満秋氏の出席をも祈願しての万歳となりました。

今日の天笑氏の講演に有りました川柳との出会いには共鳴させられるものが沢山ありました。川柳人の穏やかな眼、人柄に接して今日の自分があるという。私があおばで川柳を愛する方達の優しさや気さくさに誘われるからで、川柳塔まつりに大阪まで出掛けて全没になっても懲りずに参加しようと思うのも、私のような者にも別け隔てなく穏やかに優しく接してくださる川柳人が居るからです。

今回の五周年の会に際してあおばの会員が一致団結して準備を進め、盛会の内に終わることが出来たのも遠くから馳せ参じて下さった大勢の柳友のお陰と感謝しております。翌日みなとみらいを見学し港の見える丘公園

園に行き、千代さんや千春さんと歌った歌詞の花びらが午後宵夜で揉めている。句多留とお互いの記憶の頼りなさを嘆いたものでしたが、また会える日を楽しみに再会を約してお別れしました。遠路お疲れさまでした。

五周年を過ぎて

菱田 満秋

光陰矢の如しと申しますが、青葉区青少年図書館で川柳初心者教室を開講してはや五年の歳月が経ちます。その時応募してきた受講者三十名のうち十人がこの会で作句を続けていることは、川柳がいかに魅力のある文芸であるかの証左とも言えましょう。その後毎年教室が持ったことも、年々会員が増えたこと因となっています。そして会員を川柳の虜にさせたものは他ならず川柳塔誌だと思っています。句会の課題吟に馴れてきた方々に購読を勧め、購読したら投句を勧めてきました。日常茶飯の出来事や、身辺雑記でよいから十七音字にまとめて見なさいと言って水煙抄に投句をさせました。これが川柳の面白さに取り付かせることとなり、現在四十名を越える会員を擁するまでになりました。

五周年を機に会員の手助けを得て、川柳塔誌を教材として近隣の施設で教室を開き、川柳の普及に尽くしたいと思っています。

第10回「太平記の里」全国川柳大会

日時 12月3日(日) 午前9時半
会場 太田市民会館(☎0276・45・8291)
群馬県太田市飯田町818

第一部(当日参加者)

課題と選者(各題2句・投句締切11時半)

「顔触れ」 東京 今川 乱魚

「手心」 栃木 川俣 喜猿

「緊張」 東京 竹本 瓢太郎

「欲張り」 群馬 荻原 柳絮

「楽しい」 群馬 羽田 桐柳

「滑らか」 群馬 田中 寿々夢

「さわやか」 茨城 太田 紀伊子

「絆」 埼玉 てしま 晩秋

「明るい」(特別課題) 群馬 木村 伊須夫

参加費 2000円(昼食・発表誌呈)

第二部(郵送での参加者・9月30日締切)

宿題「喜劇」―選者9名による共選

北海道 斎藤 大雄・神奈川 関 水華

新潟 大野 風柳・愛知 加藤 翠谷

大阪 橘高 薫風・大阪 磯野いさむ

大阪 山本 翠公・兵庫 小松原 爽介

熊本 吉岡 龍城(便箋に2句)

参加費 1000円(小為替・現金書留)

投句先 群馬県太田市飯田町818

〒373-0851 太田市文化振興事業団

「太平記の里」全国川柳大会係

残暑お見舞い申し上げます

川柳ねがわ

会員一同

残暑御見舞

季刊『川柳展望』

年間誌代 四、九六〇円

〒563-0102 大阪府とよの町ときわ台

三丁目四一七

TEL〇七二七―三八―一八四五
FAX〇七二七―三八―六七七〇

川柳展望社

第31回 奈良新聞川柳大会

日時 8月27日(日) 午前10時開場

会場 奈良県文化会館小ホール

(奈良公園内・バス「県庁前」下車すぐ)

お話 「百歳を元気に」

奈良県薬剤師会会長 喜多 稔氏

席題 「芯」 黒川正之進氏

宿題 「売」 福田 秋雄選

「ゲスト」 北野眞生夫選

「夫婦」 鶴本むねお選

「残る」 宮口 笛生選

「骨」 杉森 節子選

「魅力」 西村 茂選

各題2句・出句締切午前11時半

会費 3000円(昼食・発表誌呈)

出席申込 8月18日まで左記へ

〒630 奈良市三条町606

奈良新聞社文化事業部川柳係

欠席投句 500円(発表誌) 同封左記へ

〒630 奈良市北市中町71

杉野睦朗宛(8月14日まで)

主催 奈良新聞社

第52回 西日本川柳大会

とき 9月3日(日) 午前9時開場

ところ 久米南町中央公民館

JR津山線弓削駅下車

岡山県久米郡久米南町下弓削

電話0867-28-2711

兼題と選者(五十音順)

「メ」 神戸 大森 一甲選

「鳴」 鳥取 門脇かずお選

「花」 広島 小島 蘭幸選

「沖」 大阪 西出 楓葉選

「軽」 岡山 西川けんじ選

「吉」 久米南 貞岡信太郎選

当日席題一題 岡山 小野真備雄選

特別課題一題 入選句全員に呈賞

出句締切 午前11時半

◎兼・席題は各題2句、特別課題は1句。

投句 はがき大の用紙に各題毎に2句連記

裏面に住所・氏名を明記、会費同封の上

8月20日までに弓削川柳社大会係宛。

会費 出席者2000円(昼食・記念品呈)

投句者1000円(発表誌)

主催 弓削川柳社

〒709 岡山県久米郡久米南町下弓削

電話0867-28-2531

平成12年度相生市文化祭

第8回相生市もみじまつり川柳大会

事前応募の部(各題1句・詠みこみ可)

「指」 神戸 土井喜久栄選

「声」 加古川 吐田 公一選

「道」 神戸 赤松 隆男選

応募料 1000円(定額小為替)

応募方法 原稿用紙または便箋に、句と共に郵便番号・住所・氏名・年齢・性別・

電話番号・大会当日の出欠を明記。

応募締切 9月20日(水) 当日消印有効

応募先 〒0031 相生市旭1-2-10 相生市教育委員会生涯学習課川柳係宛

発表大会の部

日時 11月5日(日) 開場10時半・開会1時

会場 相生市総合福祉会館4F

相生市旭1-6-28(☎0791-227125)

相生駅北口下車、相生港行きバスにて

相生市役所前下車(約10分)

宿題と選者(各題2句・欠席投句拝辞)

「約束」 神戸 廣嶋 英子選

「伸びる」 西宮 奥田みつ子選

「開く」 神戸 武田 森茂選

「自由吟」 加古川 泉 比呂史選

出句締切 11時50分 参加費 無料

路郎忌

本社 七月句会

七月六日(木)午後五時半

アウイーナ大阪

七月初旬にしては記録的な暑さが続いたが、六日定刻開催された路郎忌本社句会には百十名の参加者があった。

番傘川柳本社より交換選者として森中恵美子さんを迎え、同社同人多数の方が出席をして下さった。

はじめに六月亡くなった同人榎本路郎氏の冥福を祈り、一分間の黙祷を捧げる。

お話は理事長の河内天笑氏。

本題に入る前に、津山番傘の土居哲秋氏の句集紹介、川柳塔わかやま誌上大会参加の呼びかけ、又最近老いの句が目立つことを慰め、年長者紫香氏、メ女さんの若々しい句を例にとり、心まで老化させぬよう作句してほしい等と話す。

路郎忌に因む話としては、句集『旅人』から、穿ちの句、七七の句、正月の句、酒の句、旅の句等に分類し、抜粋して鑑賞をする。

代表句「俺に似よ俺に似るなと子と思ひ」

は、大正十五年七月十一日の柳壇会にできた句であり、この日は奇しくも橘高薫風主幹の誕生の日であると言う。

月間賞は榎本吐来氏(羽曳野市)に輝く。

(司会―遠野) (記名―朝子・澄子)
(受付―義子・かすみ) (清記―義)

席題「サミット」 後藤正一選

百一の国旗サミット盛り上がり
行列のひとつとサミットしてる蟻
サミットだトキもメダカも寄つてい
沖繩サミット海鳴りに聞く反戦歌
サミットは揃えの服を着てるだけ
井戸端サミット議長はいつもの妻
女のサミットホテルでキーバイキング
サミットは七時からです縄暖簾
女のサミットまず洋服を決めてから
町会のサミット地藏盆の打ち合せ
母と娘のサミットババは蚊帳の外
おしやべりが長屋サミット取りしきる
サミットで痛みを見る島の人
沖繩へサミット効果の金が落ち
エイサーで歓待サミットの成功祈る
サミットで地球大事にする誓い
サミットを避けて帰省は秋にする
サミット開催沖繩の空雲が舞う
サミットに摩文仁の乙女たちはいま
サミット音頭ジャミに踊りの足軽く
沖繩の酒にサミット輪が和む

笛生 天笑 たもつ 恭昌 瑠美子 保子 弘一 大輪 希久子 柳弘 森子 柳宏子 章久 聴一 ルイ子 利武 たつお 武庫坊 愿 笛生 隆盛

首脳方泡盛の味どうですか
サミットの前後にある戦
サミットで一期一会の握手する
サミットで強気弱気が交差する
サミットに歩調を合わせ平和論
サミットで結んだ握手あたたかい
サミットの顔ぶれ敵は本能寺
サミットへ各国首脳の面がまえ
沖繩へ小淵執念実らせよ
サミットの成功総理神頼み
サミットを笑顔でしめくりたい日本
サミットに聞き耳立てる珊瑚礁
サミットのつけを国民気にかける
サミットでまさか失言せんやろな
サミットをどこから見てる小淵さん
サミットへ未だ続くのだらうお詫び
サミットにお辞儀ばかりをせぬように

金太 扶美代 房太 鹿太 雀舎 紫香 鹿太 聴一 柳宏子 遠野 信治 信治 月子 文秋 昭子 あや子 たず子

神の国見たく集まるサミットへ
サミットで少しはやせる森総理
軸

兼題「夕日」 池 森子選

沖繩の夕日血の色ではないか
童謡が空から降ってくる夕日
おやすみと夕日ウインクして沈む
少し狂って夕日見ていたふたり
落ちる陽に今日のいのちを擦り合す
浜の夕日はトリックだった愛終る

金太 弘一 一步 義 つづや 英壬子

夕日背に甘い話に乗りました
 饒舌な都会になってゆく夕日
 なだらかな空間夕日はまんねりに
 病状にはふれぬ窓いっぱい夕日映え
 伏せ字の中に人を許した日の夕日
 残照をあげる明日にかけてみる
 スリリングな予感夕日背に受ける
 鮮烈な夕日私を呼び止める
 明日は晴自信に満ちている夕陽
 夕日墮つ今日の私を丸洗い
 死ぬ時に夕日擱んでいる男
 陽が沈む通過儀礼もあとひとつ
 打ち明けてからの夕日が美しい
 もう年やなあと分かつてきた夕日
 無為の日の背中すべって行く夕日
 明日があるあるぞと夕日笑ってる
 夕日から微かな呼吸洩れてくる
 夕日から情熱しかと受け継ごう
 裏切りもなく今日をドラマにする夕日
 再会を契り乱れてくる夕日
 陽は沈むやはり忘れることにする
 失敗も大きく包む夕日影
 叱られに行くのに夕日美しい
 決断をせよと追ってくる夕日
 ああ夕日未来の中にいるような
 真ん中に夕日国境とも知らず

佳

弥生 英比古 美代子 扶美代 勇太 ゲン吉 重人 愛論 柳宏子 完次 大輪 愿 靖巳 信治 緑 寿子 春 あや子 賢子 義 みつ子 美代子 靖巳 いわゑ 留美子 昭子 紫香

くすぐったい話を聞いている夕日
 鍵っ子が一人夕日に包まれる
 タやけ小やけを歌う女を逃げられぬ
 人
 夕日背につるりとうまいところてん
 地
 わたくしのリセットボタンを押す夕日
 天
 ふるさとの夕日は未来吊っている
 軸
 夕日から花の時間を急かされる
 兼題「黙る」 前たもつ選
 ホスピスの鏡は何も語らない
 知っていて傷つく友がいて黙る
 黙ったまんま過ちを繰り返す
 雪印のマークへ黙ってはおれぬ
 黙ったら熱がでているうちの孫
 争いへ猫は黙って部屋を出る
 遺言状まん中にしてみな黙り
 夫婦げんか九官鳥は喋らない
 見たことは決して言わぬ辻地蔵
 上等のケーキを出して黙らせる
 哀しみを許して黙る夏帽子
 真空の世界タルマの眼がにらむ
 黙黙と我が道を往くカタツムリ
 拾い物黙っていればわからない
 黙って下さい私の決心に
 友達をかばう頑固な黙秘権

英比古 笛生 惠美子 雅文 新一 新一 惠子 充子 庸佑 螢 惠美子 茜 シマ子 ますみ 岳人 鹿太 英子 岳人 新一 冬葉 しいお あやめ 昭子

沈黙がつづく足音遠ざかる
 形勢が悪いうしろで黙つとこ
 三猿になってしまえば仏様
 黙ってる耳がこそこそそはゆい
 口止めをするぐらいなら黙つといて
 徘徊の父に黙ってつぐぬビール
 口止めはもうてないけど喋らない
 黙秘する今喋ったに負けになる
 黙ってる人が大きく見えてくる
 黙ってることが一番苦手です
 黙ってて言いたいことはわかるから
 介護法の話になると老父母無口
 税金は払つたらんが黙つとれん
 寡黙が絵になる高倉健である
 沈黙考野村語録が書けぬ記者
 黙っておこきみの泪を見たからは
 それだけのことかと言ったたり黙る
 故郷は黙っていても美しい
 ふる里の山は黙って僕を待つ
 佳
 弁解しても黙っていても叱られる
 黙ってて良かったなあど苦笑い
 体調が良く黙っては居られない
 黙っててポンと出したいのはお金
 黙ってる父が一番悩んでいる
 人
 職退いて生家の月に黙しおり
 地
 勉強ができて寡黙な子が恐い

節子 英子 春 とし子 柳弘 柳アキ 天笑 柳宏子 周信 舞夢 菜月 恭昌 修 保子 正雄 たず子 美代子 金太 昭子 洋文 保子 留美子 武庫坊 愿 セツ子

天
軸
寂然なる大地は人を許さない
千里

黙々と歩みを残すカタツムリ

兼題「スピーチ」 阿萬萬的選

スピーチに祖母ハンカチを握りしめ
拍手で攻めてくといスピーチ止めさせる
スピーチの原稿民話からもらう
スピーチも結局自分のピーアール
花嫁の名を間違えたハブニング
優勝旗スピーチ少し長すぎる
なれそめを暴露スピーチ品が落ち
美辞麗句はめられ過ぎたお人形
失敗談聞く気にさせたスピーチだ
笑わせて泣かせるスピーチ国説り
スピーチをきれいに締めた一行詩
マスコミから洩れる時効のエピソード
スピーチから洩れる時効のエピソード
立て板に水のスピーチ素通りする
スピーチの叔母一豊の妻に触れ
スピーチはうまいが赤字経営者
丁度いい談話ワサビの効くうちに
栓抜きをおくれスピーチもつええわ
飾り気のないスピーチに引き込まれ
スピーチが上手いやつぱり女傑だね
花園のスピーチ香りたつぷりと
代読で一枚飛ばし祝辞読む
スピーチは苦手と言いつつよくしゃべる
菜月

洋
たつお
美代子
たつお
弘一
セツ子
寿美
聴一
勇太
完次
いわゑ
かすみ
菜月
朋月
靖巳

寂聴の法話は人を放さない
ら抜き語のスピーチ歳の差が覗く
スピーチであまり褒めるの嘘になる
スピーチの刺通訳がやわらげる
スピーチは上手いが家庭では無口
失言を見張る黒子が要る総理
スピーチ延延噛みこらして生あくび
五ヶ国語話せて宇多田の歌が売れ
スピーチにジョークの花を丸く添え
活発なスピーチ底の厚い靴
スピーチを読んで自分の顔がない
スピーチは三分妻の走り書き
スピーチで部下がもらした夫の癖
メモを読むスピーチ誰も聞いてない
花嫁の酒豪がばれた披露宴

佳

真紀子節言いたいことを言うてくれ
当選のスピーチきこちない世襲
スピーチのところどころに女ぐせ
秀

寂聴さんのスピーチ似合う古都の庭

いいとこばかり拾うスピーチ物足りず

兼題「糸」 森中恵美子選

小さな節に味わいが有る糸糸
糸切れた風携帯で探し当て
綴じ糸が切れる女の時代とか
ゆかた地と糸は揃えたままに夏
満津子
庸佑
充子
瑠美子

パッチワークしあわせな糸はじいてる
右脳と左脳結んだ糸が弛みだす
糸を引く納豆ほどの夫婦仲
糸電話好きというのに使ったな
糸底の丸さは母の耐えたい道
風糸の長さは風を信じてる
太い糸だから強いと限られない
一本の糸にやんわりしばられる
糸と針優等生は持っていた
成人をしたなと思っしつけ糸
ダルマ糸不器用な母でした
着たままで針をつけて糸切り歯
引つ張れば引つ張り返す赤い糸
もつれ糸他人になつて解けました
妻の糸女の糸とからみ合う
親に泣き男に泣いた三の糸
針供養糸は通らぬ針の山
思慕の糸つむいだ蚤やせていく
もつれ糸はぐす古老の肌触り
鞠かがる独り住まいの佗びしさに
するくとは解けぬ不粋な木綿糸
よくらむ糸だ世代交替する
子供らと宇宙へつなぐ糸電話
もつれ糸水平線を抜け切れず
白いまま少女の糸が開花する
引つ張つたらあかん糸だと引つ張つてみて分る
荒神さんの参道糸通しを母に
抜糸する朝はジョークにすぐ溶ける
からくりはこの一本の糸にある

満津子
庸佑
充子
瑠美子

恵子
大輪
靖巳
嘉章
たす子
典子
笛生
いわゑ
房子
紫香
千代
利昭
大輪
諷云
度
たつお
英千子
睦子
金太
アキ
弥生
あや子
寿子
雀舎
握夢
信治
新一
美代子

マリオネットの糸から情緒不安定
釘ぐらいつけます男糸通す

雅文
笛生

佳

糸切り齒或る日男の嘘を切る

雅文

墨ツボの糸棟梁も年をとる

信治

綾取りの糸が縫れる母の死後

寿美

金糸銀糸少し饒舌すぎないか

英比古

糸くずをとってあげても片想い

愿

人

六月の花を咲かせる赤い糸

節子

地

くもの糸にぶら下がっているフリーター

扶美代

天

み仏のつかいのごとく糸トンボ

朝子

軸

七色の糸と危く生きている

兼題「未練」 橘高薫風選

七夕に別れた人の名を記す

みつ子

未練捨てると気力までなくなつた

文

遮断機の傍で足踏みする未練

剛治

白骨の章に未練を残すまい

螢

グッドバイ三遍言つたグッドバイ

とし子

もう一度傍で聞きたい高軒

哲男

追伸がくどくど長くなつてくる

アキ

時どきは未練にも虫干しをする

義

未練ではないが一読株の欄

一志

催促は出来ないけれど惜しい金

篤子

お茶漬けに未練サラサラ流し込む

隆盛

溜め息が未練ばかりを積み上げる
少々の未練あるから夢を持つ

大輪
武庫坊

未練持つ男へ女あつからん

房子

未練などないが別れる理由もない

倫子

一切れに未練が残るグレイエツト

桂香

お化粧に未練残さず生きている

千代

煩惱がときどき吠えている未練

朝子

耳障りな言葉となつてゆく未練

英比古

住所録まだ消し兼ねている未練

澄子

負けて来た未練知つてゐる駅の椅子

勇太

男の未練鎮静剤を飲んでゐる

冬葉

パンの切り口までがあの娘に見えてくる未練

握夢

牛乳をゆつくりと飲む未練だな

恵美子

ドライフラワー少し未練の朱を残し

朋月

未練かな瞳のバラが濡れてくる

澄子

慰謝料をどつさりもろたのに未練

典子

骨壺に未練一つを持ていく

義子

結婚をあきらめている逢うてゐる

恵美子

あつさりと未練はないと言ふなかれ

瑠美子

未練などないが欲ならたんとある

鹿太

未練などないと自分へ二度三度

柳宏子

断ち切つた未練埋めるのは時間

ますみ

佳

しがみつく未練秋冬春夏へ

修

吹っ切れた未練西瓜にかぶりつく

握夢

未練捨てて出かける事が多くなる

紫香

百歳を生きて未練は残さない

三郎

炎天へ未練の丈を夾竹桃

茜

人

未練など何もなさそう羅漢さま

洋

地

てのひらの胡桃この世にまだ未練

信治

天

半生の未練が疼く預金帳

榎本 吐来

軸

敗戦忌男の未練まだ続き

在地牡丹

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

富柳会(前月分) 池

森子報

水割りの底でリストラゆれている
密入国するほど日本棲みよいか
髪形を変えて女将が板につき
言いかねた言葉地雷がもう一つ
板の間を光らせ泣いてしましそ
う
気晴らしの旅で孤独が身にしみる
酒一合あれば至福の風の中
組板で私の意地をみじん切り
風の谷で迷うマグマを抱いている
嘘ついた女とわさびに叱られる
乱調のピアノと姑の子守唄
吊り橋の十歩のゆれと花の風
アドリブへ気づかぬ客が多すぎる
合板のような家族にならざるが
春告げるカタクリの花咲き始め
気遣いの通じぬ胸の生乾き
板一枚のベンチと昔ばなしする
ウンという階段ひとつ降りてみる
受精卵も七七癖が刻まれる

たかし 森子報
一夫 勝子
扶美代 けい子
和子 夕子
初太郎 晴美
信子 春蘭
千歩 かなこ
東雲 三和子
あかり アキ
哲矢

嘘ついたことなどないと言
十年前叱られたのが良い薬
気晴らしに母を連れ出す春の宵
伝言板甘い誘いの裏を知り
気晴らしに買ったドレスで踊る
極上のところで一献気を晴らす
気晴らしに昨日を今日に変えてみる
ゆっくりと舞えばゆっくり蝶になる
メルヘンが並んだ春の観覧車
参観日親の力を風の詩
チンブアイブイ今日一日は風に乗る

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

バラ一輪思いをこめてドアの前
好きなバラ刺のあること忘れてた
人生のバラにかこまれ暮す幸
定退の夫に記念のバラ植える
バラ真つ赤一輪心に炎を灯す
客潜るバラで作ったアーチ抜け
珍品種バラの芸術競い合う
咲き誇るバラにもあつた羞恥心
ミニバラとしつかり会話育てます
気安くは高貴なバラに近よれぬ
カルメンの口するバラを問うなかれ
一期の風抱き戯れのバラに逢う

川柳後楽吟社

従野 健一報

義清水 昭水 紅紫朗 文恵 治恵 冬虹 花梢 登子 欣之 信博 森子
公美枝 静江 鈴枝 久子 豊枝 信敬 和代 智恵子 弘子 康女 正光 雄々
美智子 拓治

井戸が涸れた大きな樹も枯れた
うまい米作る気力で糠を蒔く
本心を隠す笑顔が疲れ気味
注射針いやな予感の血を取られ
束の間の心が騒ぐ通り雨
門灯にふわりと亡母の泣いた顔
少しずつ上手な嘘を混ぜている
溜つて写真整理が捗らぬ
路地裏の花に珍客迎えられ
エニシダが黄の電飾つけたよう
終着の話にしたい人頼む
花好きの妻は花屋で苗を買
完璧を期して戦う砂の塔

岸和田川柳会

長谷川呂万報

冷や酒に親の意見も混ぜて飲む
ウインクの効き目が出ないサングラス
母さんの呪文が効いて痛みとれ
監察にまた監察が必要の効き目
鼻薬次第で効き目変わります
鼻薬効いたか孫が愛想よい
苦心した手品うしろでばらす孫
苦心の句女房何かとケチをつけ
すれ違ふ夫婦に愛のメモがある
良い品は景品なしでよく売れる
景品の同じ傘行く交差点
景品の時計チクタク各部屋に
クジ運に減法強い孫を連れ
景品で貰った金魚冬を越す

草風 秋月 道博 桃風 邦季 まさお 信善 柳五郎 佐加恵 照路 博友 哲郎 鮫虎狼 盛之 基 呂万 辰郎 甚一 柳宏子 武 東吉 洞庵 昭二 弘子 鹿太郎 白光子 さよ子

飲んべえと知らずに出した極上酒

高級品顔と相談してほしい

高級な薔薇より野辺のれんげ草

高級な時間をくれたコンサート

汗かいて毛皮のショーに見入ってる

イミテーションの高級品がよく光る

お祭を先取りしてる試験曳き

末っ子に先取りさせる兄の知恵

心音の胎児に買ったベビー靴

パソコンを先取りすると変わる機種

先取りの言葉藪から蛇を出し

極楽を先取りしてる寺まいる

大原川柳社

矢内寿恵子報

今ならば照れずに言えるありがと

好い加減が受けて正義がうとまれる

好い加減出来ぬ自分が責められる

いい加減に聞いてしまった介護法

照れ笑い昨夜の酔いが醒めました

新婚の照れてた頃の古日記

好い加減の話半分聞いておく

丸木橋好い加減では渡れない

いい加減に聞き流して老いの愚痴

ババになりそうと抱きあげ照れている

好い加減がすぐ尻馬に乗って酔い

照れ臭い思いが胸をつき上げる

スピーチに照れて可愛いゴールデン

照れていた妻も今では大いびき

洋

東雲

仁緑

みつ江

苑子

路子

萬的

穰一

蛙城

假子

けい子

富志子

狸村

矢内

あやこ

さちこ

玉恵

辰江

悦子

喜美子

巴子

こふゆ

しず

敏子

南花

美佐子

みさえ

口数の少ない照れ屋で先に嫁ぎ

照れているところに母の助け舟

煽てられ一寸照れるがい気分

人前で照れて意見も言えぬまま

義理人情いい加減では越せぬ坂

ライバルだなんてお膳が照れている

インタビュ照れて自慢が一寸出る

照れている二人をひつつけけるカメラ

好い加減になる盃のおき所

川柳東大阪同好会

森下

新世紀へ続く雄しべを抱く蕾

姉の恋つばみのまんま幕を閉じ

年頃の蕾を父が手放さぬ

純白のドレスに秘める罪ひとつ

その中の黒いドレスが動く華

ひばり館ドレスがいまに歌いそう

ドレスよりエプロン似合う妻でした

公園に怖い話が落ちている

公園でいっつも出会う万歩計

呼び捨てにされる悪友がい人と旅

呼ぶ声に答え命を握り出され

再会の声はトーンが先にゆく

美肌のために最後まで読む説明書

肌の色違っても親切に

水はじく若い素肌に目をそらす

男気があつて一肌ばかり脱ぐ

内面の若さが光る肌の色

ひでの

昭子

絹子

静子

はるみ

あすなろ

地佳平

はじめ

寿恵子

愛論報

シマ子

とみを

晋吾

美弥子

弥生

朝子

度

たもつ

萬的

太一

千里

文秋

雅文

頂留子

東雲

和代

湖風

愛論

尼崎いくし川柳会 春城 年代報

開かない貝にもあつた自己主張

ハマグリの酒蒸し好きな亡夫でした

冷凍のしじみ故郷をど忘れ

ジャンボンと飛び出た自転車横

グログロと不眠一ぱい蛙達

小心の俺へどばんと慕蛙

親の背中見て育つ子は今いはずこ

丸い背に生きた苦勞が詰めてある

背に負うた娘に今は介護され

背が曲り小さくなつてゆく妻よ

蝶タイの似合った夫もくの字の背

祖母の背でいつも見ていた汽車ポッポ

全彦

ヒサコ

しづ子

保夫

夢之助

弘治

紫香

佳句地十選 (7月号から)

寺川弘

肩書きを外せば不精髭伸びる

父の樹に父の疲れが吊つてある

そのうちに忘れてくれるのも他人

さくら色ついでいいですね君の爪

クレヨンの色が足りない花畑

一本道なのに迷つてばかりいる

じつくりと檻の中から人を見る

生きている証のごみを少し出す

玄關のインターホンでする取材

手応えを確かめながら釘を打つ

一代

美代子

しげお

ばっは

遠野

楓楽

次男

みさを

亜成

泰子

春愁のおとこひとりを背開きに
みの虫が貴方まかせの風に乗る
診察券とカード財布をふくらませ
割り算で余った物はへそ繰りに
水平線限り無く海は漲る

頂点で神話にふれて叱られる
血族やひとりふりが欠けてゆく
一人芝居血管ばかり浮いてくる
紫陽花が明日の天気を気にして
どんな日が始まるだろう鏡拭く
菖蒲湯にふわり無心の刻が浮く
人生を推敲しているしまい風呂
まだ動く十指で何をしてきたか
手鏡をするりと抜けてゆく素顔
見ましたか風が流れてゆく道を

京都塔の会

都倉

求身報

十畳のひと間で老いの羽根のばし
つかの間と思うが十年住んだ家
ポケットの小銭はろ酔い春の音
黄砂まみれの髪が逆立つ帰り道
水室池 緑とまじる花菖蒲
泥沼に睡蓮が咲く古代から
青葉風 温い言葉持つて来る
追伸を書き終えさめた茶をすす
八十八夜ご先祖様にます新茶
年寄りがいるのか茶殻干してある
不意にお茶出されて俄雨に遭つ
一生を番茶の妻と恙無し

芳子 寛之 糸子 一笛 比ろ志 十四郎 光穂 恵子 昭三 澄子 義芳 沙置子 武庫坊 久子 静

お爺さんお茶にしましよ草むしり
茶髪の子だまって席を立ててくれ
熟っぽく人生語るティーカップ
お茶点でる心の棘を抜くように
カリスマも法の光に裁かれる
カリスマにだまされずが不安な世
カリスマに心酔 夢を追いつ続け
カリスマと言われ人間逸脱す
カリスマ性持たない分は努力する
座布団が温みをくれた無人駅
好意でもそこまでやればストーカー
好意まだ届かぬらしい拉致の国
下り坂他人の好意身に沁みる
程ほどの好意素直に受けてみる
かくし味のような好意に涙ぐむ
茶柱を信じた靴が弾んでる
ふるさとして変らぬ好意もろてくる
ひと駅を歩き送ってくる好意

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

吉之助 美穂 澄子 楓 高 満 庸 芳 幸 英 益 求 正 百合子 寿美子 柳宏子 美智子 紫香 澄子 紫香 靖巳 庸佑 活恵 秀夫 晴美 治三郎 義一

年の功ゆつくり追い風待つとする
泣き笑いで世の中が見えて来る
天国にいたので悟れそうにない
水平線の広さへ愚を悟る
ビーポーがお待ちなさいと交差点
十七歳交差点での道迷つ
年上の人妻と待つ青信号
発進がおそい女の交差点
合流の出来ぬ女の交差点
交差点じつくり風を読んでいる
かくれんぼ赤いリボンがゆれている
人妻とかくれて犬に吠えられる
玄関の靴かくすのを忘れてた
いつだつて飛び立つ羽根を隠し持つ
国会は他党をけなすこと知る
春なれや鬼にも休暇出してやる
この人にも少し砂漠がありそうだ
男専用待合室の週刊誌
孤独にはさせてくれぬ影という
真相に近づく箱のなかの箱
物忘れ笑えるうちはいいけれど

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

あやめ 尚士 雅文 慶太 五月 砂輝守 泰雄 満寿蔵 節子 波留吉 スミ子 吉之助 柳宏子 求芽 磔 武庫坊 半蔵門 しげお 諷云児 宮崎シマ子 慶子 能子 欣史子 香住

見上げれば真一文字の男坂
温室で四季を忘れた味が出来
お財布と頭交互に空っぽに

川柳塔なら

坊農

柳弘報

膝抱え貧乏ゆすり老父のくせ
補って庇って妻はついていく
病室の気配を覗く三分粥
補助席で風の動きを読んでいる
また阪神今年こそはという気配
めらめらと燃えるさつきと写さんか
母の愛補う父の重い愛
膝ポント叩いて男に良い思案
運開く気配いつもの歩で歩む
叱られた涙ばたばた膝小僧
よく膝にきた温もりがまだ残り
百の罪補い切れぬ数珠をくる
定年とともに離婚の気配あり
坂道で急かされ膝が笑い出す
補佐役の母はどこかでラッパ吹く
家出の気配妻が荷物を整理する
キッチンにそつと姑の紙包み
補っているのは美しい言葉
ごめんと一言補えばすんだ傷
どの子にも温み与える母の膝
補足した一行本音のぞかせる
貧乏神居直る気配のすきま風
無に還るいのち膝から崩れ落ち
ミニの膝若さこぼれている正座

弘直 清芳 喜美子 李世恵 美和子 久峰 義 春 國治 聴一 真理子 秋泉 春蘭 孝子 むつみ あやめ とし子 水魚 絹子 美代子 洋子 富子 道子 弥生 秋雄 和夫

先生の筆で牡丹が蘇る
傷心を仏の膝にしがみつく
苗代の隅にさつきの神だのみ
振り向いてくれる気配にこけたまま
家計補う妻の軍手が干してある
超満員右も左もミニの膝

川柳大阪

坊農

柳弘報

ビデオ持つ子供と共に走ってる
母親の大きな声がよく目立つ
タンス中売りたい服が並んでる
ハイハイと男は安く売らぬもの
奥深く問わぬも友へ思い遣り
ひやかしても買う気にさせる口八丁
安売りのチラシ見るのも日課です
年金においていい話売りに来る
奥深く趣味の世界に迷い込み
壺を売る足底を売る天の声
奥の間へ通された深い訳
すんまへん何ぞ仕事はおまへんか
警察の上から下まですんまへん
胸算用孫への愛も計り売り
交換のエル球児の汗が飛ぶ
売り込みの声はなんなりと朝の市
応援を誰にもしない神の鈴
ライバルを失いゆるみ出す奥歯
恩を売り無理やり服ますかぜ薬
十七歳心の奥に鬼が住む
応援の風が押し込むホームラン

千歩 眞生夫 美千子 直子 章久 柳宏子 すがお 高3 多香 信醉 雅果 民子 芳香 いつみ 楽子 美花 聴笑 川童 青道 洛醉 朝子 希久志 比呂志 本蔭棒 章久 鉄心

夜中まで母起きていたうどん来る
追伸に心の奥を覗かれる
応援の馬はいつでも二三着
万歳におかしな男写っても
お姉さんすんまへんなあと酒頼み
深すぎて見えぬ貴女の胸の奥
仏壇の奥から呼んだ気がします
すんまへん朝昼晩のうまいめし
四面楚歌素直になれずすんまへん
川柳塔唐津支部 久保 正剣報
杖を持つ人じつくりと選ぶ杖
手際よき仕事に年数確かめる
総選挙食欲色欲出世欲
平成と名付けて急ぎ逝った人
地面まで縁に染める五月雨
魑魅魍魎足の裏にも潜んでた
ごもつとも悩む相談ワイドショー
薫風や雨乞い蛙喧し
訳安りが三組並ぶカウンター
職安に三月も通う破目となり
ためにする虚報と知ってもあそぶ
弁天が降りるとコンヒ皆降りる
三幸川柳教室 三宅 保州報
芽を出そう出そうと活気明日へ向く
二階から朝の活気が駆け降りる
活気ある街でストレス溜めている
喧嘩相手居るから活気ある余生

一風 秋雄 一步 ダン吉 金太 笑風 重人 柳弘 正剣報 輝夫 晴翠 夕視 勝笑 水夫 高幸 虹明 四郎 正剣 保州報 さち子 和子 かず子 正一

煙突の活氣も失せた鉄の街
責任と自負が活氣の叩き台

好きですよ年の映らぬ手鏡は
出張でないと思はれている鏡

カメレオンになつて女は鏡見る
言い過ぎたあとには鏡に裁かれる

傍目にはしあわせ色の万華鏡
油切れ鏡に映る無表情

証拠潭滅鏡を割つて発つことに
獸鏡に卑劣呼が映るミレニアム

道化師の素顔は見たくない鏡
試着室鏡に予算覗かれる

無神論者も心の神を信じます
銃規制自由の女神をそば向く

どの神も酒豪のように見受けられ
只ひとり貧乏神が同居する

人生に溺れて探る神の藁
謎解けた頃には神はもう居ない

マイウェイ神風吹こと吹くまいと
故郷は青雲の日と同じ空

酒好きの父が眠っている故郷
郷に入り自説を曲げぬ頑固者

昭和史をしっかりと結めた郷の家
久々に帰るときも花の里

目が乾くたびに故郷の海を恋つ
虹が好きいま故郷に向かつてる

城北川柳会

川久保睦子報

釈迦の顔男か女見ていない

町子 満洲子 光男 みね 登美代 和代 保州 公子 千秀 鉄治 豊太郎 マリ子 清 美子 正範 利治 碧 桂香 美寿子 昭枝 嘉平 起世子 当代 朱夏 章子

羽づくろい鳥も私も春を翔ぶ
どこまでも主役になれぬ葱刻む
挨拶を飾つてあとの筆にぶる
春愁と言つてころころよく笑う
元氣かと聞けば元氣でない返事
また来年指切りゲンマン花の下
桜の季逝きし夫の一周忌
氣楽さど淋しき胸に一人住む
中学生こがね虫より金持だ
ビタミンを毎日飲んで病んでいる
欲ばつた手が抜けませんつかみ取り
いい風を迎える窓をあけ放つ
疎開時の幼い恋よ蓮華道
合鍵を沢山持つて間に合わぬ
御先祖のものかも知れぬあの古墳
たまに無茶したい私も少し呆け
来た道はもう戻れない白い月
盃を伏せて話の念を押す
賞味期限八十路は八十路の味がある
噂では困つていない春帽子
ままごともボールもなげず塾通い
家中を汚して子等は伸びて行く
しゃぶらせた鮎がそろそろ効いてくる
正信偈すこし飛ばした朝の乱
未来よりいま現在の土踏ます
叫ばねばこの嬉しさが表わせず
幸せにしますが嘘のつきはじめ
檜山の異かくれている介護法
金の話になると本心見えてくる

藤子 だし 求芽 潤子 春蘭 朝子 美代子 登美子 政子 はじめ 道子 とし子 達子 高栄 順三 あやめ 昭子 白峰 一枝 千歩 あい子 トヨ子 睦子 志華子 千里 典子 史風 倫子 公一

サークル檸檬 小林 一夫報
夜のしじま雨降り出して救われる
リトマス紙まだらに染めている自由
六十億きずな確かめ合う電波
私の電波キャッチしたのは宇宙人
旅疲れ家の枕に吸い取らせ
難関に女ニコツと仁王立ち
振り過ぎた尻尾が痛い夜の底
につこりと電波のつて売りにくる
電波では伝えきれない置き手紙
棘のある電波 地球を走りぬけ
傘立てに傘あまらせて雨あがる
一枚ずつ脱いで六月肌に着る
告白もメールで届く愛夢中
竹原川柳会 時広 一路報
新しい枕と夢の旅をする
風は初夏毯も仔犬もよく弾む
カラオケに春風吹いて弾み声
好天に弾む若さのフアッション
夏だなつた海が待つとる弾んでる
十七の弾みが軋げ落ちてくる
ミレニアム弾んでいます龍の風
久しぶりベビーぶとんへ針弾む
時刻表友ときどきく打合わせ
新緑の白髪もときどきに見えてくる
白い飯目の色変えた戦時中
真つすぐに進んで生きた白通す

雅子 房子 靖巳 希久子 遠野 みつ子 楓楽 いわゑ 哲夫 義子 智恵子 あずき 澄子 大千枝 幸枝 孝枝 節喜 夏夫 房子 榮恵 汎美 不朽 千年枝 一枝

白い道迷わず歩くことにする

白旗を上げて帰って半世紀

割烹着の白きよ焦げた握り飯

脳裏を染める月下美人の白だ

白い和紙にサラサラ書けぬ僕の遺書

夢を買ふなんと素敵じやないですか

幸福だなあ今年もカーネーションを買ふ

記念日は忘れぬ妻へバラを買ふ

水を買ふ水はてれくさそうにする

もう孫はおもちゃにならぬ玩具買ふ

銀河鉄道切符は何所で買えますか

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

許すとは言わぬが門灯点いている

亡母の持つ鈴が心の奥で鳴る

携帯に残るかすかな老母の声

七転びそんな余裕のない人生

初舞台扇子が決めた舞姿

華やかな道に縁のない父の靴

怖い物知らぬ子の守り疲れます

妻の持つ操縦桿にあやつられ

拉けても何時か膨らむ夢選ぶ

言い勝った後のピールはホロ苦い

美人には何時も丁寧にものを言ふ

気力だけあって体力ついて来ず

今日もまた観たいテレビを孫が取り

皿洗う音に女房荒れている

ジェスチャーも交し異国の旅をゆく

金剛杖迷える衆生導かれ

笹舟

蝸牛

年子

正宏

力

笑子

菁居

静風

喜美子

一路

嬉しさが淋しさとなる娘の門出
僕の家タクト振るのは何時もママ

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

花の絵を描けば水が欲しくなる

喉うるおす術後の水のうまいこと

水たまり月の出るのを待っている

泥水も飲んだ男の面がまえ

左遷地でうまい水とのめぐりあい

煮え切らぬ男ぶつぷつ梅雨の入り

ぶつぷつと妻は必ずついてくる

人間を憎む運河のメタンガス

グラス鉢の金魚ぶつぷつばやいてる

酔眼へぶつぷつ妻の矢が刺さる

金魚ぶつぷつ話相手が欲しくなる

質蔵でぶつぷつ言うてやかましい

慕われたのは僕でなしお金です

虐待の母を慕って泣く赤子

大猿雄が僕を慕ってついている

夜爪切る魔性と思慕の入り混じり

さしきわりあつてほのかに慕う影

いつまでも風はモンローだけ慕う

優しいナース慕う痴癡のつづらな瞳

掃除機に負けない祖母は茶がらまき

畳掃く箒の音はよろしいな

負の余白清掃をして風を待つ

掃除機に追い立てられる日曜日

日曜の夫の手をかる溝掃除

腰かがめ巡査子供の目の高さ

よしみ

くに子

千里

ますみ

アキラ

のぼる

ばつは

柳弘

弘一

欣之

春子

国治

度

東雲

柳宏子

朝子

弘直

一風

柳伸

元紀

シマ子

春蘭

太朗

年人

秋雄

聰一

祥一

マラソンの腰母からの守り札
タイプではないから腰をひくダンス

丸腰の男に負けたなと思う

呑む喋るギョク腰が働かぬ

働いた腰に沢山あるドラマ

川柳塔鹿野みか月

土橋

短気はあかん蛍静かに灯を点す

故郷のやさしい蛍灯が招く

ワンと一声大口で菓子受ける

土に生きた土に還らすわが命

少年に闇が続いて富める国

モナリザの港で父は拿捕された

住所不定だけど港には戻る

巫女舞いの心しずしず入りこみ

着飾ってしずしずと嫁ぐ門出の日

しずしずと門出する娘の幸祈る

やつと寝たやや子の部屋をしずしずと

しずしずと瓦づたいに猫忍ぶ

しずしずとお受けしませうという親御

どん底でしずしず冷や飯を食べる

しずしずと香焚く列の中にいる

珈琲カップしずしずかに溶ける角砂糖

人間という折り紙に苦勞する

折り紙を折った少女の野辺送り

折り紙の上手い婆ちゃん要介護

折り紙は母と遊んだ日に戻す

泣きに行く母の港は風いである

何にでも挑戦したい悪いくせ

とみを

典呼

ダン吉

幸生

弥生

螢報

孝男

隆風

喜与志

武子

弘子

忠良

盛桜

保子

みどり

しのぶ

久枝

幸枝

かつ乃

はるお

実満

きみ子

諷人

小鹿

くに子

富久江

睦子

八重子

いざ挑戦腹拵えの飯を炊く
挑んでは一步一步を乗り越える
挑戦者が現われて本気になった
挑むなら今の一步が大切だ
挑戦の度に笑顔を取り戻す
知らぬまま高齢域に突入する
禁煙に挑戦ガムが舌を刺す
何度でも挑戦をする恋なのだ

川柳塔まつえ吟社

恒松

叮紅報

私の不満を買ってくれる店
店をつぐ子がいて父の髭のびる
うな重の旨い店なら知っている
もう一度もどって店の前に立つ
お話がしたくて店を選んでる
百貨店へ時間を捨ててに行く娘
ハイヒール子供は祖母が抱いている
居酒屋で靴底の愚痴聞いている
ブランドの靴にかまれた足の豆
里帰り玄関狭く並ぶ靴
嬉しさも悲しさも踏む靴の裏
まだ走るつもりでスツク買い替える
健康を氣遣う妻の匙加減
食卓に健康食が福利かす
地下足袋が健康法だと父百歳
健康の保持には足りぬ万歩計
動き続ける心臓にありがと
健康で綴る日記の太い文字
穏やかな街でびつくりする事件

節子 美さ子 公子 孔美子 和子 汲香 和枝 登 桂子 日出子 博子 きみえ 邦代 紫晃 茂美 小鹿 淡艸 幸子 義良 昌枝 太泡 登美子 芳枝 煩惱児 房子 静恵

事件など知らない青い空がある
ある時は事件事件で何も見ず
レポーター事件を追って西東
真実は極の中に寝かされる
求めてもかなわぬ想い事件産み
背をまるめ牛乳飲んで生き延びる
牛乳で育てて立派な子に育ち
老骨を鞭うつ牛乳飲んで
牛乳で育ちまぶたの母を恋う
牛乳を飲んであふれる朝に逢う
牛乳がうまくて今朝の鬱が消え
川柳ささやま 酒井 靖子報
父の足跡たどり辿って黄昏れる
髪洗う今日のいいことそつとして
経を読む後ろで猫も畏まる
はしやきが妻にもあつた日の機嫌
両方の耳にもあつた落し穴
その先を読めば満ちてる朝の靴
ポケットが浅くてルールすぐこぼれ
いくつでも嬉しい時ははしやき出す
鉾先を読んで早ばや引上げる
両方の伸をととりもつ母がいる
両方を立てれば私が消えてゆく
ゲートボール弾み沈みも乗るルール
金婚式ルール外さず辿り着く
何度でも読む源平の物語
気楽さもお金も欲しい若夫婦
胸のうち読み取る母に歯がたず

畔 静江 注湖 たけし 智恵子 すみこ 秀子 多賀子 与根一 久枝 叮紅 純子 恵美 多美子 美智子 八重子 とみ子 つや子 かほる すず子 かつ子 君代 美緒子 房江 泰子 毬子 寿子

老いの恋ルール違反が可愛いらし
可住
川柳高知 川竹 松風報
盃をかわしてやっと思ひ出し
ああしんど今日一日がやっと思れ
子を産んでやっこの家に根が生える
春一番やっと思練の糸が切れ
合格の通知やっと思書いてない
あれこれと好み集めて庭に満ち
自己嫌悪やっと思自分をとり戻す
飽食の答しっかり皮下脂肪
問答は無用で俺の嫁に來た
どう答出るのか子等の新世紀
聞きたくてきいた答へ胃が重い
母の膝温い答が落ちて、いる
折り返し地点に答置いておく
生きさまの答はいずれ人が出す
思惑があつて答は濁しとく
耕した分だけ答くれる土
手付かずの森に答がきつとある
倉吉川柳会 松本よしえ報
フィルムに疑う影が写ってる
疑いを笑顔が消してくれました
疑いが晴れるまで子の罪を着る
街道に茶店がわりの料金所
疑いを知らぬ幼児の瞳がこわい
町内にほら貝さんとサイレンさん
他人ごとのサイレンだったまた眠る
天雀 智子 康子 節子 幸子 石花菜 完司 功 幸 美々 てるみ 快風 竹萌 さき子 千恵子 孝雄 千鳥 酒仙 京子 悦子 治博 良雄 圭風 松風

火事は遠くだ先ずはボトルの栓を抜く
鈴なりの梅に唾液がほとばしる
矢印が裏街道の方へ向く
ほとばしる水よ砂漠の地にもあれ
カルシウム足らぬ街道下真ん中
街道に鬼の歩いた跡が無い
街道に落とした種子が開花する
迷る言葉誤解をまき散らす
迷る滝三段にして渦をまく
迷る愛情なんて賞味切れ
街道を掃いておこうか夏祭り
老いて尚まだ迷る命の火
迷る情熱受ける皿が無い
屯する十七歳に疑惑の目
舌戦に口角泡がほとばしる
サイレンにふと戦時中思い出し
街道の花も見事なジゲおこし
鉄筋の老人ホーム江戸街道
トンネルが出来て景色も山の上
パーティーの中の一人在敵らしい
達磨なり迷る汗サウナ風呂

かわはら川柳会

上田

俊路報

隠し芸ひそかに習い宴を待つ
ブランド品隠してみたが見てほしい
へそくりもいつまで持つかこの不況
真実を隠すベールが透けてくる
母の日の花に隠れたメッセージ
さわやかな笑顔の中の片えくぼ

季芳 玲子 かつみ 芳光 和歌子 雄々 一夫 玲坊 みち子 秋草 賀寿恵 ちよ子 照彦 和枝 悠子 久子 働喜美子 よしえ 日出子 次男 重忠

説教もえくぼの笑みについ緩む
白魚にえくぼを添えたうまい酒
えくぼして吹いた口笛過去の風
花束に母のえくぼが返る

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

ニギビぶつづ青春もて余す
白い杖さき耳立てる色眼鏡
サンガラス僕の五感を覗いてる
色眼鏡嫌いな月は曇り出す
關病の友のぶつづ聞いてやり
難聴にぶつづ小言よく聞え
泡を吹く蟹にも有った自己主張
色眼鏡はずして春の風に逢う
ライバルに時々使う色眼鏡
逆縁の責めを背負って遍路旅
ぶつづと生きる証の炊飯器
夫婦箸ぶつづ言って五十年
涙もろい女を責める春の酒
モツ鍋がブツブツ男の話す
叱ってる母の涙が雫になる
ぶつづと小言が酒に浮いてくる
古傷がじわじわ過去を責めてくる
木当ですかにきびの跡がある土偶

はまゆう川柳会

中後

清史報

厄払い無神論者も餅をまく
厄介になります姑の低姿勢
厄払いピアス茶髪も正座して

ふじ子 寿子 悦子 俊路 凡々子 力誠 紅雨 ヒサ子 北歩 順風 龍人 慕情 銀波 ふさゑ 花匠 雅城 ツネ 井蛙 黙人 花峯 一花 五楽庵 美佐子 すみれ 利ばん

しくてもしても同じと厄払う
子らの不和瘦せる思いの母心
瘦せ我慢男の肩が泣いている
約束と小指をたてる孫の笑み
約束を破って疼く胸の奥
澄んだ眼とするゲンマンは破れない
生きようと固く約束してたのに
約束を笑い飛ばして四月バカ
指切りげんまん夕焼け空の別れ道
議員殿先ず約束は果すもの
土壇場で約束軽く反故にされ
はびきの市民川柳会 徳山みつこ報
失言を器用に埋めている財布
私の失言マスコミ騒がない
アイラブユーあの日失言してしまい
消しゴムで消せたらいいね失言も
不意の客俺までメロン回って来ぬ
地下街でいつもさまよっている私
さまよって迷路えらんだ過去がある
さまよって覚めた時分古稀を過ぎ
湯の町で穴場さまよふ宿の下駄
夜の街さまよふ鬱を捨てて来る
お下げ髪やっと思恋助走する
体脂肪やっと思恋助走する
定年になどついたが金利ゼロ
リハビリでやっと思恋助走する
名演技やっと思恋助走する
もっ来たかやっと思恋助走する

光 惠美子 平和 サト美 太一 清史 生米子 てる坊 修也 雄造 佳子 吐来 みつこ 敏 美代子 俊男 桂子 明子 昭平 志洋 泰子 洞庵 美喜 専平 四三郎 忠広 久仁子

やつと済むローンに緩む屋根瓦

わだかまりやつと許せる歳になり

念願がやつとかなった薬ゆび

やつと出たあの癖が出れば上機嫌

やつと姑越えた甘い言葉が身の破滅

マダムから聞いた話を真に受ける

謝っておこうマダムの言うとおり

参観日マダムがママの顔で来る

男気のマダム喧嘩へ割って出る

リストラの夫支えているマダム

決断にやつぱり鬼になりきれず

タイトルは只でくれれない奪うもの

タイトルを握った鼻は折れ易い

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

生きていることがフィーバーだと思っ

フィーバーしテレビに吠える妻の声

フィーバーに溶け込んでいく若返り

フィーバーのあのビールが照れている

ブレスリーに熱中してた過去もある

サポーター熱狂ひいきのひき倒し

同窓会フィーバーしそう五月晴れ

血圧安定忘れ上手になりました

晴耕雨読血圧なんて知りません

血圧を上げたあの娘も孫を連れ

低血圧時どき使う朝寝坊

心臓のわりに血圧低いまま

一 知 一 つえ 満寿蔵 章 司 絢 子 一 昇 一 壺 一 杓 一 沓 一 利 武 庸 佑 敦 子 重 人 重 人

血圧にびくびく今日も日がのぼる

血圧がググとあがる電話口

いろは悟つて心の彫りが深くなる

散る花に譬えて論ずいろは歌

いろは文字はかない恋の歌心

世も末になつていろはの重み知る

いろはの心知つても煩惱は消せず

いろはから教えた部下がいま上司

いろは坂苦楽の陰に見た光

いろはからんの間で生むドラマ

私の強い群を宥めるいろは順

パソコンのいろは孫から教えられ

心まで梅雨にはならぬ炎抱く

休耕の田に降る雨は口惜しそ

着てるものまで脱がされる梅雨晴れ間

梅雨もよし相合傘で君とゆく

長編のドラマも梅雨へしめりがち

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

衣替え昔の服も出して着る

被写体が妻だと焦点がブレる

不可能を可能に見せるマンガ読む

梅雨時は夫の持病が顔を出す

脱ぎ捨てた浴衣にのこる妻の肌

六十五誘う痴漢がいじらしい

相槌のうまさにスリ口滑る

ふるさとの風とあきなく話してる

十七歳親の核から脱皮する

無趣味だという人と会うパチンコ屋

豊 太 信 子 めぐみ 高 夫 ふみえ さち子 千寿子 和 重 美 子 正 博 射月芳 紀美女 幽 優 子 愿 鉄 治 あき子 寿 子 江 美 鹿 太 尚 利 龜 与 子 哲 嗣 イサミ ま さ 美智子 昌 子 六 浦

脱いだ儘とった電話は社長から

折合いがつかず焦点浮いている

オベ近く焦点しぼる医師無言

ぬき襟に魅力を見せる年の功

きれいごとだけで終った友の距離

紫陽花の魅力ガイドの歩をとめる

焦点を合わせと女うしろ向く

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

母送る駅までの道近すぎる

ふるさとの駅様変りせず欲し

わたくしの終着駅が地図にない

終着駅ちゃん待ってる霊柩車

広告塔 扇千景の厚化粧

遺言書にもの申すほど財もなし

愛してるなんて書かずに愛の文

書くだけで出せぬレターが胃にたまる

ひらがなで書いても意見に角がない

日記書き終えても涙乾かない

書くことに疲れこけしの頬つく

やがて来るひとり旅の地図を書く

深い思まだ半分も返せない

言い勝った方も深手を負っている

父の持つ深さを今にして想う

少年のころに宿る深い闇

この川の深さ知ってる友といる

親の鞭深い思いを知らなんだ

此所だけの話何だか深さある

悪口を言えは出てくるかくれんぼ

弘 治 夢之助 正 治 満寿蔵 澄 子 十四郎 紫 香 哲子報 たす子 絹 子 靖 巳 比ろ志 しげお 義 子 文 房 子 武庫坊 ルイ子 みつ子 颯云児 トミエ 千代美 富喜子 鹿 太 千 代 江 美 春 蘭 正 坊

花の下場も介護の話聞く
草いきれ今日の歩幅が若返る
介護法最後は笑って逝くつもり
似なくともいい所まで似て夫婦
貧乏という哲学に慣らされる
新しいメモを足しての衣替え
紫外線防ぐ傘寿の夏帽子
老人病背負って歩く顔あげて
コーヒーに昔の夢を混ぜて飲む
よく響く笛をたしかに持っていた

南大阪川柳会

吉川

寿美報

信子 求芽 高栄 澄子 晴美 昌子 周信 松煙 無縁 いわゑ

最高のポストが視野にある辞令
シャワーには最高だろう象の鼻
最高の日も母さんは米を研ぐ
ベストコンディション飯は美味いし身も軽い
最高峰登って来たよ天保山
自己最高出せば敗れて悔いは無し
場外は百万ドルを見る夜景
派手でんな場外へ皿茶碗飛ぶ
場外のボタンと神さま立っている
場外のタバコがうまい深呼吸
場外でもあましてるエネルギー
花一輪かざる素敵な夏帽子
悪役の素顔意外と素敵です
弾まない毬だが素敵な夢を抱き
大江文学とても素敵なプロフィール
静養の転地で拾うノイローゼ
静養は知らぬ働く夏の蟻

庸佑 幸子 章久 ハル子 三男 雅文 東雲 アキラ 蛙 千梢 千里 正博 萬的 寿美 柳伸 凡子

静養地智恵子抄を読み直し
静養先ころづくしの初かつお
怖いけどそろそろ渡るかすら橋
一年生そろそろ自我を出しはじめ
二代目にそろそろ譲る鬼瓦
のめり込んだら恐いそろそろ手を引こう
同窓会そろそろ出番かくし芸
静養と言われて庭でクラブ振る
外人の目にも花博ワンダフル
場外にとよめきひびく巨神戦
永久の旅花に埋れた妻の顔
場外で思わぬ人と縄のれん
テレバシー素敵なお人から電話

富柳会

池

森子報

遠野 久峰 直子 たもつ 志華子 文秋 日出子 修 柳宏子 叡子 勝美 清成 頂留子 春蘭 かなこ 富美子 信子 満秋 宏 夕花 ひろこ 一夫 アキ 秋雄 昭水 一慧 冬虹

ひかえめで緑の風の似合う人
探知機を付けねばバスの乗場にも
春愁や四角に残るパンの耳
許す気になったて控える火の言葉
ひかえめな心の一字身に沁みる
ふる里はゆっくり時を刻むとこ
鈍行で会う風景があたたかい
鯉のぼり隣愛を見せしまつ
控え席の弥次なら私にも出来る
鉄道唱歌が一級河川から響く
もう一遍粘ってこいと上司から
美術館次はひとりてゆっくりと
ひかえめなあなたは鳩笛のひびき
ひかえめにしても茶髪は目立ちすぎ
負けるかも知れぬが最後まで粘る

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

和子 としを 巳代一 花梢 紅紫朗 初太郎 年人 国治 潤子 元紀 けい子 勇 夕子 森子 千歩 義清 きさと いづみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 宏至 剛治 ミツ子

春の陽を全部はしくて開く窓
率直に言つて信頼とりもどす
心の窓開いてくれたのはあなた
率直に詫げる少女の眼がきれい
開かれた窓が見せたい初節句
少年の闇にうごめく悪を掃く
粗大ゴミうちの家具より豪華だね
通勤も今日が最後と振り返る
焦点が合わず会談も分け
初デートとつたカメラが全部はけ
茶髪にも心の窓を開けておく
今生の別れ柩の窓をあけ
ランドセル嬉しさ背負う一年生
だんらんの声が聞こえる窓灯り
好きだった人と目が合う窓ガラス
腹の立つときにもまるい窓の月
二十四時窓口あけているポスト

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

道子 君江 春子 一風 幸枝 隆盛 美千子 恭一 奈良司 友甫 正純 朝子 一道 賢子 ますみ トシエ 鬼遊 春枝 八重子 千代 恵子 玲子 麗 瑞枝 日枝子 富美子 ふみ

つつし咲く度にあなたを想い出す
六月の雨に淋しさをかくそう
俵せを拾いに今夜も街歩く
泣きごとは聞きたくないと思さま
マンネリからぬけ出せないつぶやく声
老いの坂記憶の糸が切れかかる
ほどほどの元氣小出しにあげられる
はたる川柳同好会 田辺正三郎報

寿々子 天雀 田鶴 晶子 スミエ 直次 桂子 善守 正安 久子 正三郎 敵子 喜美子 竹二 柳童 実 緑骨 千里志 勇治 保子 雪子 見清

「神の国」うまくもぐれと幹事長
もぐつてもたかが一分赤っぱじ
川柳塔打吹 米田 幸子報
精力削体に効かず口に効く
せつちちな親をもつ子に輪をかける
自転車も服も兄貴の古ばかり
久しぶり兄の手紙は金を貸せ
兄弟でタイムスリッパ話せるね
晩酌は夫の精力削である
スポーツカー予備に一台買いました
スポーツは万能恋はからつきし
精力は絶倫と言う独り者
伸び盛り兄のお下がりがばかり着る
せつちちな口に体がついて来ぬ
せつちちな坊さんお経とばして
コギヤル達ネオンに染まり夜を明かす
せつちかにチューしたがるけ舌かんだ
兄の顔ダンゴ鼻までいばつて
子宝に悩む兄貴が元氣出し
真っ白をこすって赤に辿りつく
せつちちを治す薬は見つからぬ
血のつながりすぐに援護へ回る兄
兄弟子を越える包丁研いで
スポーツは万能だけど年齢でねえ
せつちちで何時も損するお人好し
少子化を笑いうちでは六人目
文学を精力的に食べている
せつちちで又てにをはが抜けている

馬洗 やすし 松盛 勝見 季芳 佳女 貴恵 睦子 和枝 よしえ 克枝 京子 龍枝 逸子 セツ子 定明 順子 楨元 和歌子 喬水 玲子 博丈 玲坊 晴光 雄々 螢 やえ

叱るにも精力は要る腹は減る
せっかちな母のリズムで回る朝
せっかちだ話半分聞いてない
兄貴風吹かせるくせによく転ぶ
兄ちゃんを奪う女はみんな敵

川柳ふうもん

杉本

孝男報

身内から上がる火の手が防げない
母の日のバラにはとげを取っておく
昨日のニュースが今日は風化する
自己破産さっぱりしたと嘘を言う
赤い糸手繰れば今の妻となり
毬一つもうこの手には戻らない
消しつばに火の手は入れた筈だった
肩書きが消えてさっぱり長湯する
仏像の慈愛の目には見すかされ
いち早く火の手察したトップ逃げ
さっぱりだわが子忘れた親がいる
根本から這い上がってる若い芽だ
鳥取を焼いた火の手が胸に住み
少年の心さっぱり掴めない
ニュースにもならず賞にもならず犬逃げる
札幌で火の手消すかなき臭い
新聞に句が出た家の大ニュース
警察の威厳さっぱり地に落ちる
その先は言うまい糾乱れだす
遺産分け火の手上げると焚き付ける
不倫みた火の手が上がるまで言わぬ
神の国以来言い訳さっぱりだ

芳光 孝恵 かつみ 節子 幸子 洋々 彰夫 鬼桜 忠良 蟹郎 美恵子 一瑤 益子 徹子 美雪 鐘旭 初江 志げ緒 公乃 一枝 康博 穀 昌鼓 一京 春名 茂登子 輪多朗

投げ返す球に本音が詰めてある
甘く見た敵に一泡吹かされた
ロウソクの火の手に油断した悔悟
ふるさとのニュースも添えて旬の味
負の遺産火の手だんだん追ってくる
さっぱりとトンネル抜ける策がない
頂点に立つと火の手がよく見える
お互いに火の手を消した仲である

川柳ねやがわ

江口

度報

あきらめず粘り続けるめもと独楽
粘られて戻らぬ金を貸してやる
おふくろの粘り分っていて勝てぬ
ふるりの弾んだ声が土俵まで
弾むよな足音たてて孫が来る
高い壁わたしの毬を弾ませる
弾んでる時には気付かない油断
弾むこと忘れた毬の失語症
水の音火の音弾む母の朝
縫いぐるみ着てる美人のアルバイト
合掌の白いうなじへ溺れそう
蝶々のような美人で飽きやすい
花いちもんめ美人がほしい風の辻
淡々とくらす余生でつつがなし
ボランティア余生を少し見えています
合縁奇縁余生大事にして暮らす
出番ない靴を磨いている余生
時計逆に回してみたくなる余生
目標を身近に置いている余生

金祥 喬水 健一 孝男 由美子 かつみ 雅女 螢 賢子 シマ子 小路 とし子 義雄 光子 文秋 千里 一風 かすみ 茜 あやめ 雅文 博泉 恵子 ルイ子 高栄 庸佑

さりげないセリフに隠し味残る
数追って味は二の次わんこそば
脇役の味が主役を光らせる
持ち味で庇いつてる老い二人
スパイスを忘れた味を褒められる
カラを割るトキがばんざい聞いている
長寿万歳なんて煽ててのいるものか
万歳でひと際映える日章旗
万歳は伸びの代りにする儀式
万歳のかたちに双葉かんばしい
思いっきり万歳をした臍が出た

うぶみ川柳会

上田

宣子報

白無垢にほんのり透けている炎
平凡な一日でよし腹八分
紅つばき咲いては落ちてゆく美学
桃桜咲きたくなつたのは私
派手な音たてて陽気な台所
防犯の緩みをネズミ見逃さず
歩いてますそれでもスボン緩まない
校則を緩めると学び舎に
あいさつをする太陽気な土になる
気の緩み病原菌がのび寄る
平和続き五十年の激がひびく
潔く咲いた徒花捨てられず
子の笑顔守る苦労は平気だよ
長旅に緩む靴ひも締め直す
盗み酒類がほんのり隠せない
平坦な道を歩めばボケそう

亜成 勇太朗 たもつ 時弘 弘一 度 磔 波留吉 利昭 朝子 修 羅奈 雅女 静生 美ツ千 ひろこ 葉士人 常正 芳江 登美枝 華子 天雀 あづま 良男 孝男 ユリ子 天人

頑固者入社以来の平のまま
無為無策ほんのり呆けが忍びこむ
平坦な道選り分けて驃馬となる
ほんのりと恋占いの花ゆれる
さくさくネジが緩んでしうがない

岩田帯巻いてのぞかす母の顔
それぞれの意見立派で決まらない
岩壁の松に我慢を論さされる

岩美川柳会

石谷美恵子報

岩砕く波に大きな夢がある
ストレスも消えて二重のアゴになる
失言に一枚岩が崩れだす
漁叶う恵比寿大黒元神も
岩だった両者も酒でくすれだす
遺跡から掘るな掘るなと声がする
それぞれ役目をこなす十の指
夢希望それぞれあつて樹を揺する
それぞれに果せぬ夢を追う凡夫
八月だ岩がだんだんよこれだす
何もかも叶うこの世はつまらない
叶ったら日本海でシャツを脱ぐ
大きな岩だいずれは神になるだろう
老妻の苦勞に二重丸あげる
二重の腰で老母はまだだ子を案じ
必死で願うのに星は光らない
母は子の夢を叶えるため走る
それぞれの無口が恐い草の種
それぞれの因果で生ける花遍路
叶うなら何でもします鶴呑みして
眠りから醒めた遺跡の深呼吸吸
出土片ジグソーパズルつばにする

くにお
黙光
帆雀
雄人
宣子

単車
大漁
忠良
蟹郎
徹

螢生
静芳
孝男
一夫
圭一郎

洋
かつみ
喬水
一京
一瑶

和歌子
きみ子
睦子
まさ子
公乃
節子

豊中もくせい川柳会

田中正坊報

ベルが鳴るランプが光る終列車
ホヤの煤拭けば明日が見えてくる
争った後の虚しさ気が付かず
もらわれた仔犬一晩鳴きとおし
老いふたり付かず離れず争わず
ストレスが溜まる争いしない主義
争いはよそう小皺がふえるから
いつも居る妻が居らない日の哀れ
霧の湖哀れな民話聞かされる
見え透いた言い訳哀れだなと思つ
絆創膏貼ってしみじみ言い聞かす
転んでもビエロの顔が笑つて
一枚の舌がもつれている不覚
市役所でやや哀れっぽい顔をする
過労死のノートびつり予定表
鼻にまで孔をあけてるファッショ
あれこれ忘れて哀れです
関係ない火事と喧嘩は派手がよい
ほどほどにしたらと妻のアドバイス
父の日へ酒の相手に来た息子
梅雨晴れやたまには阿呆になりたくて

裕子
たぬ
美恵子

一笛
ただし
知香子
英子
きく子
博子
萬的
紫香
庸佑
風云児
しげお
慶子
靖巳
喜美子
重人
見清
柳宏子
正坊
周信
求芽

川柳塔おひとり
原みさを報

雄々

雄々

切れた糸結び直して旅を行く
三世代住む結び目に孫がいる
へその緒で結んだ強い絆です
いい夢を結ぶピンクの羽ぶとん
もうこれで結びとしよう人生譜
ちと緩い男結びは老母だろう
遠距離の仲を結んだ糸電話
衝動と理性を結ぶ細い糸
ネクタイを結び心を一喝す
おみくじを小枝に結び幸祈る
結び目が甘く若者狂い出す
苦勞した月日がついに実を結ぶ
波かぶる日にはきつ目に帯結ぶ
わたくしの昔肯定して生きる
愛も憎もみんな昔よ青葉風
母さんの昔話はセピア色
乱れ字に昔なつかし恋の傷
たとう紙に昔のロマン秘めている
苦勞した昔があつて今がある
わたくしの命を炎やすブチトマト
新鮮な野菜が老いを若くする
健康を保つ秘訣は野菜食
虫食い野菜安全マークです
しつかりと根をおろすまで水をやる
割り勘のときはしつかり飲んでくる
百歳をしつかり生きたい笑顔
風向きを読んできつかり策を練る
土性骨しつかり直す母の鞭
子供らの心しつかりつかむ親

野草
せつ子
孝子
由多香
千秋
幸次郎
風花
和子
雅通
富貴子
伝住
庸二
彰雄
真一
佳子
紀子
清人
舎人
ゆきの
艶昭
邦昭
敦子
仁子
義弘
宏章
登美
默光
以和万津
道子

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

利用してポイ捨てとはひどすぎる
北斗七星言葉ひとつほしい夜
あの松が目じるしになる曲り角
花活けて我が家の空気とませる
そのことを知ってる花が活けてある
肩に手が触れたくらいでセクハラか
梅千の好きな桃子は一年生
勝手流花束のまま活けておき
断たれたる命が花瓶で伸び続け

翠洋会 児玉

皇太后逝かれ暗雲たれこめる
あすか野は土の下にも宝持つ
日向ぼこ亀も私もうとうとと
亀石の歴史のロマン目で語る
結婚式亀甲柄の帯で行く
横姿涅槃に見える石舞台
浮き雲に過去の倅せふとよぎり
飛行雲イエスと言えずにまだ迷い
浮き雲に似た人生の今を生き
瘦せ我慢している亀の甲羅はし
石舞台狐に化けてシヤンソンを
沈黙考雲の流れと小半時
亀だつてせつばつまれば走り出す
窓際の哀れを雲が慰める
ミレニアム騒ぐヒト科を笑つ亀
たくましく生きろと入道雲が言う

聖子 恵美子 好栄 ちよえ はるみ かつ子 博利 清泉 白汀 蛙報 久峰 蕉子 千枝子 舞夢 伽羅 照子 絹子 宣司 日の出 会美 恭昌 義雄 正雄 周信 石舟

辛抱が亀にも回る夢の椅子
眠りから覚めて語り部めざす亀
亡父に似た雲が動こうとはしない
はぐれ雲明日香へおいで夢語ろ
飯の世の舞台たのしく跳ねるまで
草に寝て雲を見る時いつも亡母
この年齢で今まほろばの石舞台
驚きの一語に尽きる石舞台
追いついて追ひこし亀はふりむかぬ
涙して産まれ解つて母の海
雲になって世界の国を見たい夢
亀の甲年の功から知恵を借り
肩をくむ二人に月も雲がくれ
茜雲明日を信じて手を合わし

川柳藤井寺 高田美代子報

お帰りとねざらっている港町
恋拾い恋捨てに行く港の灯
幾万の勇士が船出した港
二人して選んだ船が着く港
帰らない船に港が荒れてくる
棧橋の別れかもめも啼いてくれ
国籍がとめて哀しい港町
ホテルイカ見たくて闇の港出る
海荒れて繕う網の船だまり
住みついたかもめを抱いてやる港
本四架橋港がすこし淋しそう
飼い主も九官鳥も河内弁
五月病詠りが食べなくなる季節

東雲 さと美 澄子 哲子 キク子 ミサヲ 高栄 喜美子 淑子 真砂 志華子 千梢 蛙 敦子 喜代子 利武 絹歌 修六 志洋 扶美代 みよ子 龍一 美代子 六正 桂子

飛び込めば詠りに会える縄のれん
端正な男がこぼすに詠り
詠りには泣かされました女優です
国詠り少うし抱いて街に住む
出雲弁残したままで昇りつめ
左遷地の詠りに溶けていく野望
奥様の指に誇りが2カラット
ブライトを捨てたら温い風が吹く
論されて鼻を折られていた天狗
ジュエリーの箱に隠れた自尊心
ブライトを持ってと鏡は言い過ぎる
ブライトがあるので白を白く干す
ふるさとの詠りを乗せてバスが出る
自分の部屋持つて無口になる子供
縄のれん汚えぬ男の怪気炎
酒と言う悪友がありまた楽し
こけし人形話せばきつと北なまり

ローズ川柳会 山崎 君子報

水中花 地球汚染は他人事
一口の水が勢いつき水呑む
あれやこれ万策つきて水を呑む
マグマには水の魔力も及ばない
色即是空しつかり水を呑んでいる
酸欠にならぬうき水飲んで寝る
津軽弁 故郷では水を得た魚
逆あがりまだスカートは気にせぬ子
影だけが僕を信じてついて来る
梅雨さなかな今日は晴れるよローズの日

悦子 夕花 昭子 よしえ かつみ 和樹 一箇 雅枝 大八 アキ 瑠美子 重人 花梢 昌子 史郎 鐘造 治子 貴代子 はつ絵 ミサヲ 藍 澄子 義子 哲子 武庫坊 まさお



落児さんを語る

森 下 愛 論

私と落児さんの出会いは、昭和二十九年、

大阪通信病院（現在N.T.T.西日本大阪病院）

でした。当時、麻生路郎先生指導の「烏ヶ辻

川柳会」がありました。

私が落児さんに、川柳を薦めて、入会して

もらいました。もともと短歌を少し作ってお

られたので、川柳にもすぐに、馴染んで毎月

の例会に出てくれました。

川柳雑誌社不朽洞会員にも推薦しました。

始めは、實（みのる）ひらがなで作句して

いました。

昭和三十五年、病院労務厚生課長に昇進し

て、日多忙にもかかわらず、句会には出席

し、川柳も、静かに時を眺めながら、己の句

作に余念がなかった。これと言って非の打ち

どころはないのも、彼の身上であらう。

仮病堂々診断書を呉れと言っ

売薬で充分ですと博士言っ

風邪引いて行けばドクターマスク掛け

昭和四十六年、有田市箕島報話局庶務課長

で、単身赴任した。以後、川柳会とは全く縁

切れとなり、公社定年退職まで、各地を転動

する。

退職後、暇があるので、川柳会に復帰

このころから、体調の不調持病の心筋梗塞

パーキンソン病の悪化が目立ち、杖を頼りの

生活となられ、外へ出掛ける時は必ず、奥様

と一緒にした。

禁酒禁煙、好きなスポーツ、スキーも、全

く出来なかった。スキーの指導員としても、

一時は活躍していた。

下手な真似して転ばぬ指導員

雪煙りたてて転ぶは何処の人

ザイラーに似た指導員持てている

スキー宿ヤットン節が洩れてくる

再び「川柳塔社同人」となり、皆勤賞も、

何度か貰う程熱心に句会に出席する。又豊中

「もくせい」川柳会の同人でもある。

いつも奥様同伴でした。

甘党であり、コーヒーにもなかなかの通で

した。

一杯のコーヒーで夢を語り合い

コーヒー一杯それで極楽とは寂しい

せわしげにビルに入ってコーヒー飲む

日曜日掃きだされて行く喫茶店

だんだん体重が増えて、医師にも注意され

ていた。が、なかなかやめられぬものらしい

時々句会にも欠席するようになった。

凡そ十五年の川柳空白の片鱗もなく、毎月

句会にも、佳句、秀句を発表されていた。

昭和六十一年秋、彼に頼まれて、小冊子の

「一杯のコーヒー」を、八〇頁程度を製本し

ました。この中の句は、これより抜粋したも

のです。ここ二ヶ月姿を見なかったら、六月

十三日電話で、亡くなったと知らせがあり

た言葉も出なかった。僅か二週間の入院だっ

たと言う。永久に帰らぬ人となる。

「冥福を祈りつつ稿を終わります。

合 掌

柳界展望

★西宮川柳会創立15周年記念

念川柳大会が6月14日、西

宮市民会館で75名の参加を

得て開かれた。当日の本社

同人の秀句は次のとおり。

自販機の釣りがじやまく

さそうに出る 門谷たず子

いつかわたしも踏まれ上

手な草になる 牧瀬富喜子

★いずも川柳会75周年記念

川柳大会が6月18日、出雲

ロイヤルホテルで180名の

参加を得て開催。本社関

係の秀句は次のとおり。

人間であることをうつつか

り忘れそう 新家 完司

うっかりと造花に水をや

つている 西口いわゑ

うっかりを影で支える人

と居る 竹治かし

にんげんの姿が見えず美

しい船 新家 完司

船が出るというのに手紙

書いてある 松本 文子

野晒しの椅子が私の胸に

ある 伊藤 寿美

椅子拭いて一番好きな人

招く 伊藤 玲子

椅子一つたして仲間に入

れてやる 竹治かし

びちびちと生きよう草も

考える 園山多賀子

びちびちの順に生け簀か

ら消える 竹治かし

輪の中でときどき起きる

静電気 西出 楓楽

雲は本気で今日の姿を決

めている 野坂 なみ

戒名は平凡な名にしてほ

しい 松本 文子

平凡なわたし飽きたら捨

てていい 木村富美子

お似合い夫婦素敵な年を

取り 小川 注湖

大夕陽逆立ちしたくなっ

てきた 佐藤 治代

★あおば川柳会五周年記念

句会は6月25日、横浜市青

葉台フオーラムで90名の出

席で開かれた。当日の本社

関係の秀句は次のとおり。

美しい方の横顔ばかり見

せ 秋元 和可

横丁の暖簾なじみに護ら

れる 菱田 満秋

降っても降っても浜は溢

れずひとり 奥田みつ子

引き潮に浜の広さを見せ

られる 菱田 満秋

濡れ落葉妻の介護で見直

され 清水 潮華

五感研ぐ朝の冷気を独り

占め 長島亜希子

五大陸まだ踏破せぬバス

ポート 吉田 裕峰

五分という予想は既に敗

けている 菱田 満秋

年輪に少し乱れた跡があ

る 藤田 泰子

青年の樹になりきれず吠

えている 金森 徳三

来年も花に会おうと竹を

踏む 後藤 早智

▽御芳志御礼△

■北畑金治氏（参与・八尾

市）から金一封を拝受。

▽人事往来△

■6月11日、日本青年会館

大ホールで開かれた第24回

全日本川柳二〇〇〇年東京

大会に薫風主幹は第二次選

者として、岳人副理事長は

か同人数が参加した。

■6月11日、右記の東京大

会で、黒川紫香相談役は長

寿川柳人として出席、表彰

を受けられた。

■6月18日、出雲ロイヤル

ホテルで開かれた「いずも

川柳会75周年記念川柳大

会」に薫風主幹はお話、天

笑理事長ほか参与・常任理

事四名が選者として同人数

と共に参加した。

■6月25日、青葉台フオー

ラムで開かれた「あおば川

柳会五周年記念句会」に薫

風主幹・岳人副理事長・千

代参与は選者、天笑理事長

はお話に同人数と参加。

▽出 版△

■同人の渥美弧秀氏（富士

宮市）が60代で始めた川柳

の10年間の句をまとめて、

川柳句集『富士あざみ』を

発行。B 6判・64ページ。

水府忌

番傘川柳本社句会

日時 8月6日（日）

18時開場

会場 アピオ大阪

J R環状線・地下鉄

中央線森ノ宮駅すぐ

宿題（各題2句）

青 瀬川 幸子選

響く 北沢 尚子選

いじめ 岩井 三窓選

岸 河内 天笑選

プラン 磯野いさむ選

ほかに席題1題

投句締切 18時50分

会費 1000円

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	19日(土)午後1時から 回る・あざやか・大胆・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川 柳 会 梨 花	19日(土)午後1時から 番号・野・わざわざ・雑詠	鳥取県民文化会館 第2会議室 (鳥取駅から徒歩10分・バス5分) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮本方 坂田和歌子
岸 和 田 川 柳 会	19日(土)午後1時半から くせもの・削る・口上・指図	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	20日(日)正午から 無口・二階・相談・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	20日(日)午後1時半から 関心・予想・性格	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	21日(月)午後1時から 浮く・スター・借りる	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	23日(水)午後6時から 白・肥料・不運・ペダル	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前10時から 沈む・首・表情	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	26日(土)午後6時から 疲れ・サイン・時間・悪	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	27日(日)午後1時から すんなり・頬・頷く 「プレッシャー」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうも 吟 社	27日(日)午後1時から 骨抜き・ノック・どうして	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	28日(月)午後1時から 誰・エネルギー・招待	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	28日(月)午後8時から 星・メロン・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

川柳塔東大阪カルチャー教室 8月24日(木)2時から 布施駅前市民プラザ
「自由吟」3句—5句・〒593-8305 堺市堀上緑町2・16・3 河内天笑宛

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	7月29日(土)午前10時より 第18回 夜 市 川 柳 大 会	堺市総合福祉会館 5 F 川柳塔 7 月号 P.105 参照 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 な ら	3 日(木)午後 1 時から 記憶・腕・戦う	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ 7 分・JR奈良駅北歩 5 分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西 2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	4 日(金)午後 1 時から ぶどう・足・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代
富 柳 会	5 日(土)午後 1 時から へこ 凹む・からまる・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩 3 分 〒584-0043 富田林市南大伴町 4-1-10 池 森子
川 柳 塔 みちのく	5 日(土)午後 4 時から 洗う・河童・ばりばり	弘前市桶屋町 4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町 50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 唐津支部	6 日(日)午後 1 時半から 正・強い・慌てる	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町 1-2-13 仁部四郎
ほ たる 川 柳 同 好 会	8 日(火)午後 1 時から ずばり・下駄・踊る	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ 150 米 〒561-0864 豊中市夕日丘 1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	8 日(火)午後 1 時半から 持ち味・筋金・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス④番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
八尾市民 川 柳 会	10 日(木)午後 6 時から ようやく・背く・顔・花束	八尾市文化会館 4 F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北 1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 打 吹	12 日(土)午後 1 時から ブーム・弁当・穴	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町 21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	12 日(土)午後 1 時半から 星・提灯・花火	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町 381 竹内すみこ
川 柳 塔 わかやま	13 日(日)午後 1 時から 華奢(きゃしゃ)・どきどき・ダンス 折り句「くまの」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺 111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	14 日(月)午後 1 時から 枕・取る・少ない・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 5 分 〒662-0841 西宮市岡度町 2-19-515 山本義子
高槻川柳 サークル 卯 の 花	17 日 (木) 正 午 か ら 蜜・乾く・意地悪・あふれる 自由吟	高槻現代劇場 306 号室 阪急高槻駅徒歩 7 分 〒569-1142 高槻市宮田町 3-8-8 川島諷云児

編集後記

★今年もペランダにもじずり草が咲いた。ねじりばな、ねじばなとも言ふ。ラン科の多年草で初夏に淡紅色の小花を総状につける。

★よく見ていると、下の方から咲き始め、初めは普通

に咲いていたのが、だんだんに上にゆくに從つて、ねじれた状態に小花が巻き上がつてゆく。実に順序正しく美しい螺旋状になる。

★あるべき物があるべき所に置いてある。居るべき人がいつもの所にいつものように居る。それで何となく安心していられる。家族の一人が体調を崩すと、たちまち、歯車が狂ってくる。

★昭和58年9月25日、尼緑之助喜寿・句集発刊・句碑10周年祝賀川柳大会が市商工会館であり、23日に

大阪からバスを仕立てて大勢参加した。初めての川柳バス旅行に、ときめきと不安

安こもこの私の耳に、当時の西尾葉主幹の御挨拶がひびいた。「こうして皆で楽しく川柳の仲間と旅行が出来るのも、本人はもちろん、家族の方々が健康であればこそです。」

★そのバス旅行の途中、24日に津和野で、香川酔々さんの計報を聞いたのを昨日のことにように思い出す。

★あちこちの大会に、また吟行に行かれないのは淋しい。某先生の言葉を思い出し、心から家族も含めての健康の大切さを痛感する。

★毎月の投句の締切日は厳守していただきたい。少しぐらいいいだろうと遅れるのは、事務所の仕事をより煩雑にすることになる。

★一賞選考応募をお忘れないように！

(み)

ひとこと

呷く万歩計

ウオーキング教室に入門した妻から万歩計の払い下げを受けた。広島原爆忌を参観する計画があるので夏の陽に馴れるために一時間ほど歩くことに努めている。比例希利・領巾振りの松浦佐用姫伝説で知られる鏡山を遠望しながら唐津市宮陸上競技場の外周を歩く。出かける直前に川柳塔六月号が届いた。七月号に秀句鑑賞を依頼

され書き送ったので、川柳塔欄の句は再読ということになるが、見落としていた句が多かったような気がしたまま万歩計をつけて出た。途中で「アツ」と思いついた。薫風主幹の「この句この人」に私が取り上げた句があった。何も驚くことではないが「アツ」ではある。鑑賞を競り合わせる趣向などあり得るはずはないと呷きながら楽しんで気分ではある。(仁部四郎)

☆島根県荒神谷史跡公園の

一角には一面運に被われた池がある。今にもボンと音をさせて開きそう大きな

薔、葉は直径30センチぐらいに青々と広がり、真ん中に露の玉を抱いている。一

九五一年に種子が千葉県から出土した丸木船と共に見つかり、発見者大賀一郎の名をとって大賀バスと命名された。蓮池を眺めながら進むと小高い丘に、昭和59

年農道調査中に出土したお

びただし数の銅剣、銅鐸が展示されている。弥生時代の祭りの道具として使われ

たものらしい。☆こうして出雲の観光スポットへ案内していただいたのは六月十七日のこと、翌

日のいずも川柳会75周年記念川柳大会へ参加の大阪からの一行16名である。

より松江市の紙漉きを体験

させて頂き、いずも風土記の丘そして荒神谷遺跡へと半日の観光をさせて頂いた。

☆梅雨のさ中、予報も雨に拘らず、不思議にも松江駅に着く頃には雲も切れ、時折薄陽の射す日和となった。

☆神話と伝説の国出雲の魅力は、古代ロマンの宝庫であること、食べ物、美味し

(希)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表(10月号)

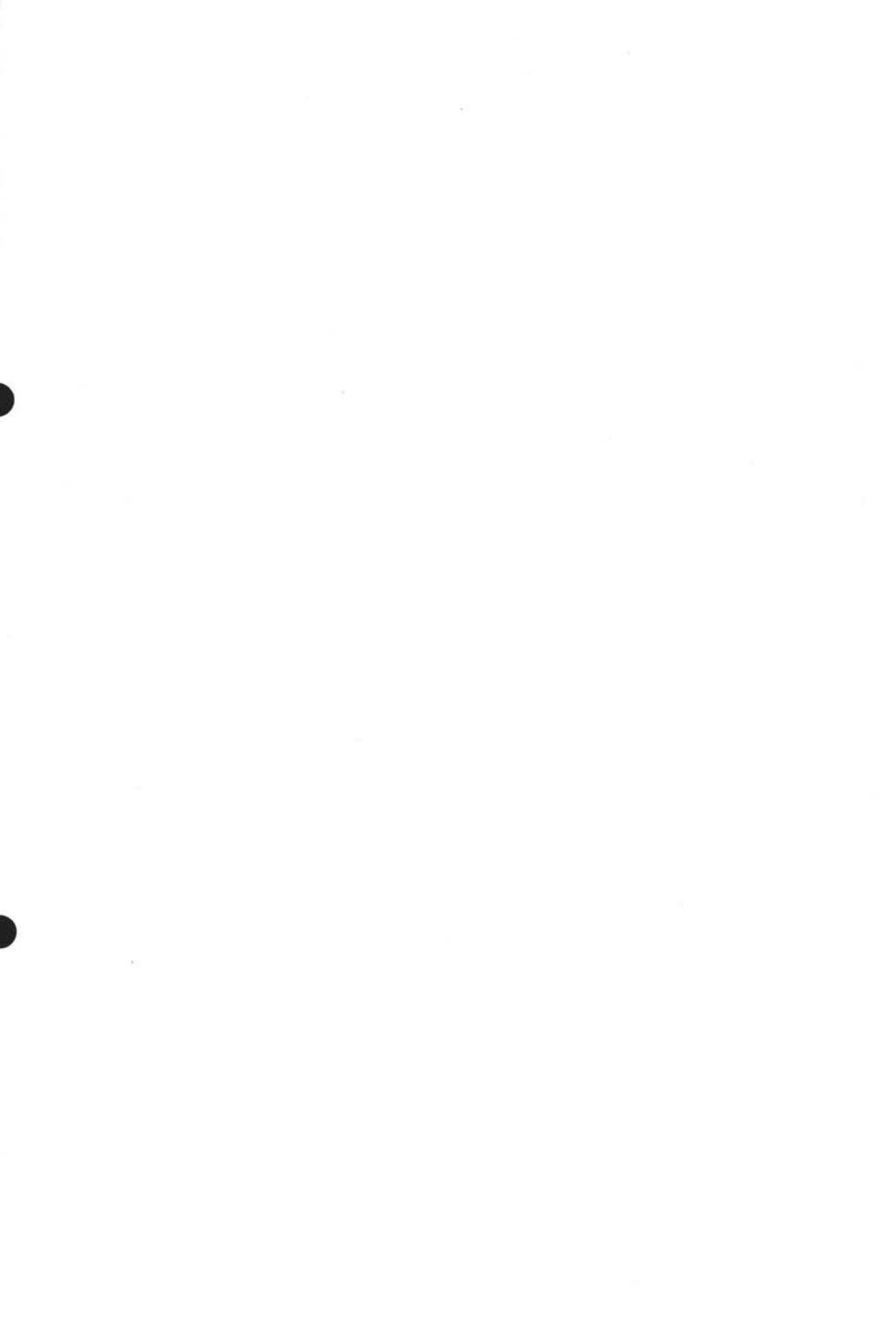
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



第六回川柳塔まつり

きりとりせん

〔平成12年9月24日(日) ホテル・アウイーナ大阪〕

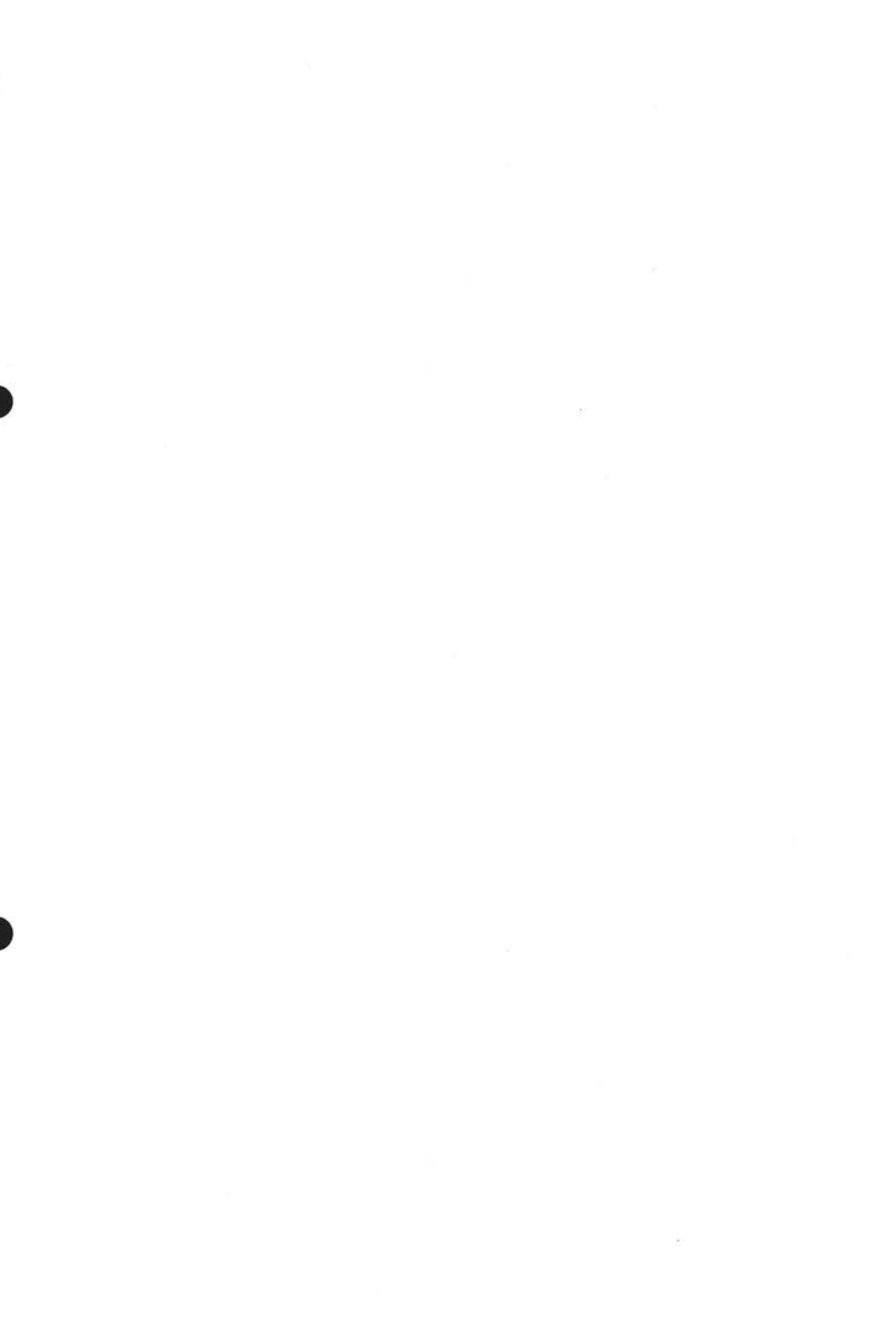
NO. 〒		住所	
懇親宴 7,000円 会席料理 不参加 参加		宿泊 ホテル アウイーナ大阪 シングル 朝食付 8,000円 24日泊 23日泊	
◎ 会費は当日いただきます。		懇親宴・宿泊の代金のみ同封の 払込用紙で御送金ください。	
性別 男・女		TEL	

事前投句「むらさき」

黒川紫香選

(8月20日締切 出席者に限る)

NO.	



二 賞 選 考

応 募 用 紙

○印を入れてください。

路郎賞（川柳塔欄・同人）

川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）

きりとりせん

地名

姓·雅号

◎裏ページの要項を読んで応募してください。

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に
応募資格を認める。

② 平成11年9月号から平成12年8月号までの入選句
路郎賞——同人・川柳塔欄の入選句から8句
川柳塔賞——誌友・水煙抄欄の入選句から8句

③ 8句を楷書で書き、8月15日必着のこと

作品募集

10月号発表(8月15日締切)

川柳塔(8句)	橋 高 薫 風 選
水煙抄(8句)	河 内 天 笑 選
愛染帖(3句)	波 多 野 五 楽 庵 選
茴香の花(3句)	西 出 楓 楽 選
吟課題(3句)	住 谷 石 舟 選
「強 い」	相 馬 銀 波 選
「慌 てる」	原 さよ子 選
初歩教室「石」(3句)	吐 田 公 一 担 当

11月号
課題吟「荷」「公 園」
「切 る」
初歩教室「美しい」

本社8月句会

とき 8月7日(月) 午後5時半
ところ アウィーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「チャンス」

「地 獄」 江 口 柳 伸 選
「新 聞」 中 原 比 呂 志 選
「書 く」 田 中 正 坊 選
「迎 える」 橋 高 薫 風 選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)

会費 1000円 投句料 500円

本社9月句会 7日(木) 予定

兼題 「噂」「つなぐ」「意見」
「艶」「裁く」

夜市川柳募集

第3回「浮 気」 山 本 希 久 子 選
ハガキに3句 8月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺 川 柳 会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 六百元(送料84円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

(二〇〇〇年平成十二年)八月一日発行

編集兼 発行人 橋 高 薫

印刷所 美 研 ア ト

〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川 柳 塔 社

電話(〇六)六九一六九二四番

振替〇〇九八〇一五―三三三六八番

